川柳塔

創刊大正十三年　通巻八〇二号

No. 802

800号記念川柳大会特集

三月号

日川協加盟

川柳塔誌寿古希記念

合同句集『川柳塔』

「川柳塔」は、大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて七十年、めでたく古希を迎えました。そこでこれを記念して、同人・誌友を中心とする合同句集『川柳塔』を発刊いたします。合同句集は、第一回の昭和四十九年、誌寿還暦記念の同五十九年につづく第三集、十年ぶりで平成初の刊行となります。次の要領により一人でも多くのご参加をお待ち申し上げます。

★刊　行　7月7日　★締　切　5月6日（金）
★句　集　B6判・約500頁・レザック表紙美装本
★参加費　5000円　★掲載句　1人15句（自選）
（同人・誌友を問わず、誰でも参加できる）

★申　込　所定用紙に掲載句（昭和五十九年以降の発表句、または未発表句）を記入し、参加費を添えて川柳塔社事務所へ。

〒545 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
川柳塔社

第9回国民文化祭・みえ94「文芸大会」
川柳大会募集要項

一　応募受付期間
平成六年四月一日（金）～六月三十日（木）消印有効

二　応募規定
(1) 未発表作品とし、一人各題二句詠
(2) 出品手数料は、一人につき千円
振替口座　名古屋　九―一二八三二七
加入者名　第9回国民文化祭三重県実行委員会
(3) 実行委員会の所定用紙又は二百字詰原稿用紙を使用。
郵便番号、住所、氏名及び電話番号を明記。
(4) 応募先　〒五一四―九一一　津市中央郵便局私書箱十号
第9回国民文化祭三重県実行委員会事務局
「文芸大会―川柳大会」係

三　宿題と一次選者
〔灯台〕去来川巨城　〔山〕寺尾　俊平
〔太鼓〕大野　風柳　〔真珠〕八木　千代
〔鈴〕木野由紀子　〔鬼〕渡邊　蓮夫
席題と一次選者〈当日投句〉
〔神〕加藤　翠谷　〔スピード〕田頭　良子

二次選者（五十音順）
新　万寿郎　磯野いさむ　牛尾　緑良　大木　俊秀
奥野　誠二　片岡つとむ　玉野可川人　仲川たけし
野口　初枝　矢須岡　信　保地　桂水

四　その他
入選作品は、作品集として刊行し、応募者全員に配付します。

五　問い合わせ先　〒五一四　津市広明町十三番地
第9回国民文化祭三重県実行委員会事務局
「文芸大会―川柳大会」係
☎　〇五九―二二四―二九三五

ミーム

熱烈感謝

西尾栞

平成六年一月十六日は素晴らしい晴天だった。文字通りの暖かい冬晴だった。

この日、『川柳塔』誌寿八〇〇号記念川柳大会を開催した。

来賓の各位の御臨席と、北は東北から、南は九州まで、各地の柳友・柳人の御出席を得て、賑々しく和やかに開催することが出来た。

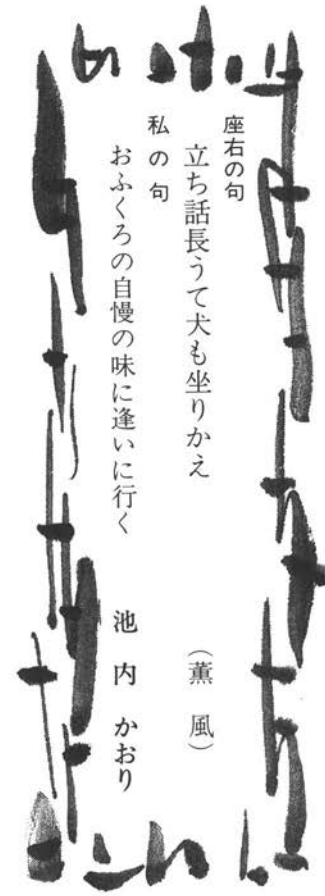
当社の挨拶のあと、社団法人全日本川柳協会、仲川たけし会長の川柳昂揚の祝辞をいただき、誰もが予期しなかった田辺聖子先生の、終始にこやかな笑顔で、ユーモアたっぷりな、水府・路郎の句を入れたたのしい講演を拝聴し、お話はこの人と定評のある川柳「塾」塾長寺尾俊平氏の堂々たるお話を聞き、感謝状、表彰状贈呈とセレモニーは終った。休憩後、兼題発表は各僚誌の主幹を煩わして立派にスムーズに進行した。

午後六時から楽しい懇親宴に移り、清興のあと滅多に来られない、路郎・葭乃両先生の五女で、西村家へ嫁しておられる梨里ちゃんが壇上に立たれて、一場の挨拶をされたのは圧巻で、会場の一同の拍手なりも止まず、本日の大会の有終の美となったことは、何よりであった。

斯くして、お蔭様で意義ある八〇〇号記念大会は無事終了した。茲に謹んで、各位の御協力に深く感謝申し上げ、厚く御礼申し上げる次第である。有難うございました。

その節、主幹退任という勝手な発表を致しました。前々より常任理事会で申し出ておりましたが、一向に実現しませんので、あの場で発表すれば、のっぴきならんと思い、八〇〇号という花道を使わせてもらいました。世代交替、後進に道を開くという以外、何ものもありません。それが年寄りのとるべきマナーだと思っておりますので、大方の御了承をお願い致します。

有難うございました。



座右の句
立ち話長うて犬も坐りかえ　（薫風）
私の句
おふくろの自慢の味に逢いに行く　池内かおり

川柳塔　三月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　熱烈感謝……西尾栞…(1)
言葉のあつかい……安藤寿美子…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾栞選…(4)
自選集……(40)
川柳の群像　伊木鶯生……東野大八…(46)
■古川柳　柳籠裏二篇研究（二十～二十一丁）……(48)
同人特集「女百句」……(50)
水煙抄……黒川紫香選…(53)
秀句鑑賞┌同人吟……西出楓楽…(44)
　　└水煙抄……新新子…(73)
銀河系……河内天笑選…(74)
茴香の花……八木千代…(78)
ひみこさろん　ワイド「女に生まれて」……(80)

言葉のあつかい

安藤寿美子

八百屋のおばさんがぼやいていた。「あの人放送局へつとめてはりまんねんで。放送局いうたら言葉あつかうとこでっしゃろ。それにものも言いはれへん」「へー？放送局てどっちかというと電波あつこうてはると思うけど」ユニークな発想に思わず笑ってしまった。

なるほど八百屋は大根をあつかい、放送局は電波をあつかい、川柳人は言葉をあつかうか。私など言葉のあつかいに毎度四苦八苦しているのだ。自分の感動をどんな形で言葉にするか、勿論、言葉のあやだけではなく、心の内奥からつき上げてくる言葉でないと、人の心を打つ川柳は出来ない。言葉というのは生きざまの積み重ねで、別にむずかしい議論なんかしなくても、日常の家族のおしゃべりや他愛ない兄弟喧嘩でも充分修練がつむのだ。それがないと川柳を作るにしても、大人になってからの口喧嘩にしても勝目はない。

不幸にして私は一人っ子で育ってしまった。相手に何を言われても切り返すべき言葉が咄嗟に浮かばず、モガモガしているうちにタイ

池　森子・岸　桂子・高橋千万子・舟渡杏花
中井ゆき・松井かなめ・宮本欣史子
「　陽　」……奥田みつ子選…(84)
一路集「パ　ン」……細川稚代選…(84)
「測　る」……小林トメ子選…(85)
初歩教室「魚」……吉岡美房…(86)

『川柳塔』八〇〇号記念川柳大会特集……(88)

大空のこころ(39)……橘高薫風…(114)
■川柳こぼれ話「川柳と固有名詞」……田中正坊…(115)
各地柳壇（佳句地十選／秋元てる）……(116)
二月本社句会……(128)
柳界展望……(132)
三月各地句会案内……(133)
■編集後記……(134)

座右の句
これもよし梅に止まっている雀　（紫　香）
私の句
大空へ彩をとかして亡母を描く　米田幸子

ミングを失い、敵に凱歌をあげさせてしまう。そこへ行くと息子達の小さい時は達者なものだった。それを感心して聞いていておこられた。「コラ！お母ちゃん言うもんは子供が喧嘩してたら止めないかんねんぞ。それを何や面白そうに見物するな！」「そやけどあんたらうまいこと言うなあ」今は八歳と五歳の孫がやっている。五歳児はどうしても言い負けるから先に手を出し十倍くらいのお返しをくらって口惜しがって泣く。母親が叱ると五歳児が言う。「お兄ちゃんがボクに先たたかすねん」。

私は心の中でしっかりやれとけしかけている。私のように訓練不足の大人になるな。しっかり喧嘩の場数をふんで言葉も心身も鍛え言葉のあつかい巧者になれ！兄弟喧嘩はしらずしらずのうちに、自分と相手のバランスを体得して自己主張の程度、折り合いのつけ方、体力の差による手加減、色々な事をおぼえるだろう。叩かれて痛いなら叩いた相手も痛い事もおぼえなければならない。彼らが将来何かの文を書く時、自分の意志を表現する言葉を如何にえらぶか、自分のひらめきを如何に展開して行けるか、相手の話をよく聞き、充分自分の意見を述べ得る人間になれるか、がんばって体得してほしい。川柳もまた同じことである。「どない言うたらええかわからへん」では川柳は出来ないのである。

川柳塔

西尾栞選

寒の水生命の重さ喉を越す
墓を購う話　夫婦の置きごたつ
女であることを忘れてから久し
六郎の絵本の中のノスタルジア
漬物石がだんだん重い一里塚
負けて勝つ女の戦はしたたかで

羽曳野市　吉川寿美

海賊の末裔なのか海が好き
本日の海はご機嫌斜めなり
山鳩の声聞きながら深呼吸
お見舞にまごころ込めた嘘を言う
発作的に美容体操する妻よ
吉良殿が討たれ今年も大晦日

鳥取県　新家完司

抱えきれないほどの情けよ光る瞳よ
節約も買いだめもして五十年
どうでもよい事を祈っている夫婦
実弾の底にかくれている名刺

倉敷市　小野克枝

洗礼の名を持つ友の肩を借り
綿雲のひとつが残る古日記

藤井寺市　吉岡美房

孫の背の高さが頼り初詣
約束を果して鬼を困らせる
橋の手前で傘さしかける人を待つ
口紅がしゃれた別れを忘れない
バカ　バカ　バカ　美人が言えば許される
焼いもに君は並んで買えますか

大阪市　西出楓楽

平熱が少し低目で淋しがり
数え歳書くと寡黙になってくる
凡人のジョーク手垢にまみれがち
シャネル5をふって流れに棹をさす
わざわざに迷路選んでゆく若さ
時と場合でわたしも失声症になる

竹原市　小島蘭幸

学問の神をそろそろ拝んどく
甘い甘いといつも一本杉は言う

亡父の友達と一度は飲み明かす
サスペンスゆらりゆらりと眠くなる
珈琲の時間を知っている　電話
蛇にも天敵　僕にもひとりふたりいる

松原市　小池　しげお

もう一度神様と逢う滝の音
即答をさける男の洗面器
その辺で買うてきたのに喜ばれ
人妻と変な話をして別れ
妻素顔大きな口で食べている
新しい歯医者ためしに妻をやり

米子市　寺沢　みど里

遠近の眼鏡で峠越えてきた
にごり酒の上澄みだけを老父に注ぐ
笛吹けど踊らぬ牛を飼っている
蝶々の放浪癖に似て遊ぶ
ままごとの客間も母に似た流れ
遠まきに象の曲芸はやしてる

香川県　松村　迷観子

おっぱこの精神火種としてのこし
戦陣の島は観光基地となり
見る人に見られるまでは只の石
木造の美は五重の塔にあるほこり
中庸を信じてからの処世術
飛び出せと春一番が芽に合図
いい友を詰めた宝の住所録
年金がやがてパンクをする白書
しんみりと聞いてる方も親がない
ダイヤルを回せば里の声も風邪

松山市　白石　春嶺

口縄の坂で出逢った冬の雨
振り返り夕陽を探す坂途中
登り切る坂で織田作雨有情
雪積るはなしを聞いて豆ご飯
酔うて寝るひとを見守る寒椿

堺市　板尾　岳人

どちらも大好き故郷ふたつあり
キャンバスをまだうめつくせない七十年
小春日にいだかれているおしゃれ
沈黙の美術館たり石の庭
泥舟に聖書たんと積んであり

奈良市　天正　千梢

こつこつと歩くパワーは侮れぬ
家を建て新車も買うて嫁がない
借方をふやしバランスとってます
あるものがあると退屈などしない
一〇〇〇号へでっかい夢を抱きはじめ

松原市　玉置　重人

尼崎市　春城武庫坊

元旦やあと幾度か掌を合わす
寒に入り目覚し時計に起こされる
樹から下りて空の青さが広くなる
慎重を気が弱いとは言うなかれ
眼病み妻　禁酒を言われ春遠し

尼崎市　春城年代

尋ねあぐねて枯れ一色にまぎれこむ
冬うらら私の時計おくれがち
こんな時　夫のうしろかくれよい
単線が一気呵成に冬ざれる
からたちの塀ブロックに化けていた

奈良県　田中紀美代

母とする内緒は桃の花の下
万歩計裏切る友がそこかしこ
男だと言わんばかりのいびきかく
菜の花を活けて娘は新世帯
嫁ぐ娘がこんなに綺麗と気づいた日

倉吉市　奥谷弘朗

前向きな心づかいが効くという
花よりもだんごの欲しい人にされ
シベリアを耐えた力を信じ切り
女房が恐いと思うている平和
お歳暮に感謝以外の匂する

東大阪市　森下愛論

芳醇の香りなみなみ瞳も揺れる
チップ代ままよこれまで飲んじまい
尖る気を察して銚子替えに立ち
仁王像見上げて恐れ入りました
老鹿の動かず雪の東大寺

甘日市市　林野甦光

正直な人と言うから味方する
思い切りよい娘で失恋ばかりする
ライバルが見ている橋を渡らねば
国会のニュース茶の間を寒うする
コーラスの美女の口もと見ていたり

高槻市　川島諷云児

味方にも隠しておこう脛の傷
お一人で気楽でしょうと言う他人
ニアミスも衝突もある凡夫婦
縄尻を妻がつかんで放さない
直角に物言う質で損な父

奈良市　宮口笛生

病院で正月してる個室の灯
正月から身内の不幸くる電話
蟹一匹下手な食べ方してる旅
雑収入などなし年金で老妻と
高い酒のんでいるんだ顔の艶

今治市　矢野佳雲

アダムとイブ以前ならいい丸裸
あれ知らぬか知りませんよで今日も暮れ
天窓にゆらりゆらりと昼の風呂
木に登るそんなことさえ猿に負け
酒癖のさまざま酒に罪はない

豊中市　田中正坊

アッという間に三月がやってきた
古希すぎて閑日月を友とせず
倒木に若木根づいている輪廻
旗の色とことん褪せた社会党
老犬の蹌踉として行く枯れ野

和歌山市　堀端三男

蹴躓くたびに思案が長くなる
反対を押し切った道戻れない
美辞麗句　他人ごとに聞くご紹介
放たれた羊のように電車降り
囁きに酔っておんなは脱皮する

米子市　林荒介

冬を知る獣たちの息使い
腕組みをして弱点を見せまいとする
キャッシュカードの中で胡坐を組む
どうしようもないポケットの砂
お土産を配って借りを軽くする

鳥取県　土橋螢

食卓に五人家族の指定席
この道は一度通ったことがある
黄昏に姿くらましてはならぬ
花いっぱい運動の花になりたい
この齢を縮めて恋を試みる

鳥取県　土橋はるお

末席に以下同文が来て座る
お巡りさんの吹く笛ろくな事はない
演台の水で時間を稼いでる
嫁さんをもろたら宝物にする
自民党が素人扱いしているな

下関市　石川侃流洞

消費税と減税結ぶ赤い糸
打ちこめる道あり老いてなお燃える
瞳の黒いうちは譲らぬ床柱
傍観の方がよっぽど重い罪
美しく生れて微罪負う女

豊中市　安藤寿美子

大臣は二人でよかったお雛様
宝塚スター老けても美しく
私が真顔で言うのになぜ笑う
良妻賢母という天敵が待っている
雲行きがあやしいビール取りに立つ

西宮市　奥田みつ子

八〇〇号見て欲しかった史好さん
初日記　今年は何を追いかける
初風呂に今年のツキが浮いている
二次会を出ると霙の街となる
淋しくて雨を受けてるたなごころ

堺市　高橋千万子

さい銭の多少を言わぬ鈴の音
三ヶ日終って街の音になる
玉砂利にバス一台の足の音
胴長の犬を抱いてるニューモード
素顔とはみにくきものよ鏡ふく

堺市　楊井二南

米寿とは言われたくない同い年
自分史で有為転変を想起する
欠礼の年賀に寒中見舞来る
僅少差　敵愾心を募らせる
弱気では公平無私になり切れぬ

八尾市　宮西弥生

たくさんの出会いたくさんの敵もいる
よく見えるめがねで足元が見えず
目覚しより早く目覚める雪の朝
着ぶくれ同士で押し合っているラッシュ
吊り皮に早出の生命をあずけます

大阪市　津守柳伸

こんなとき　あなたがいればワンカップ
満杯のまま三月の冷凍庫
対岸の火事は大きくする世間
ヒレ酒に酔いカニチリがせわしない
豆餅へどうしようもないダイエット

寝屋川市　稲葉冬葉

水仙の咲く頃に遇う八〇〇号
許せないことのひとつに落し蓋
スタートへ期待ばかりが先走る
喫茶の隅で嫁の話をして帰る
皇室の扉を覗きすぎないか

熊本市　永田俊子

天に地に謝してひとりの屠蘇を酌む
人よりも大きく鳴らす神の鈴
名前のない賀状の文字の癖を読む
人種こえ結んでごらんぬくい手だ
残菊の香をあたためる八十路坂

名古屋市　越村枯梢

二階から降りると修羅の街に出る
長寿という一日ながし無位無冠
うすら惚け父権の墜ちる音がする
心中未遂そんなドラマもあって老い
死に損ない生き損なって八十路

仙台市　川村映輝

九十の誕生日家族と盃を挙げ
白内障手術女房のしわが見え
万歩計先ず元日に歩き初め
子や孫と飲んでしゃべって三ヶ日
愛し子に〝悪魔〟と名付ける親も居る

笠岡市　松本忠三

ああ言えばこう言う女は苦手です
しみったれ痛くも痒くもありません
じいちゃんも話がわかるお年玉
愛犬が期待を背負う年となり
魚屋のおっさんのこと大将か

島根県　堀江正朗

雪しんしん地球の汚れ消すように
ひがみなど持たないでねと妻は言う
おおらかな心になろう深呼吸
戦盲の挑む点字に望みもつ
もう歳と甘え心を抱く炬燵

島根県　堀江芳子

いつまでも夫の手引いて行けますよう
言いたいこと明日にしたらと言った亡父
年齢の侘しさ抱けば負けになる
目覚めても炬燵にあった夫の足
戦盲の夫と望みは小さく抱き

美禰市　安平次弘道

自信喪失　助走ばかりを繰り返し
嬉しい日運勢欄は無視される
均等法　男意外に骨がない
青写真に遠く人生たそがれる
二者択一　勝者に驕りなかったか

柳井市　弘津柳慶

体型は違うが兄弟だ声は似る
気骨だけは明治生れの父頑固
旅に出た妻から夜の電話ベル
鏡に馬鹿　馬鹿　馬鹿とどなりつけ
とうちゃんの句は何か感情が薄すぎる

寝屋川市　江口度

寒椿目白が来てる動けない
笑いながら気絶しそうな傷見せる
鼻毛ぬきぬき残り時間を考える
七転び八起きは不惑までのこと
前進前進　押して開かない明日はない

羽曳野市　榎本吐来

憂さ晴らす気に忠実なジャンプ傘
敵味方はっきりしてた古日記
行間の思惑を追う地味な文字
ベッド並べて夜の夫婦の無言劇
気を変えておかずの味を褒めてみる

島根県　小砂白汀

酷使され果ては日ざらし雨ざらし
落日の速さに驚く柚子を煮る
君がいてわれ中年の恋ありき
目のうろこ落ちたらなぁんだ女など
虫も食わぬ菜っ葉を人間食わされる

西宮市　門谷たず子

母さんと呼べる実家の掘こたつ
度の合わぬ眼鏡夫婦の倦怠期
似てるという絆重い日うれしい日
恵まれて金にはうとい雪だるま
句読点わたしを探す旅に出る

富山市　舟渡杏花

美しい結び目　過信する勿れ
時ならぬ風がドラマの中で吹く
にんげんを尻目におさるトンボ切る
猫背までわたしのせいと言わないで
早く死にたいのが忘れずに薬呑む

大阪市　河井庸佑

勝算は無いが勝負に出る無欲
不平不満言わぬが花と心得る
正論も表現次第敵が出来
取って置きの一手はすでに読み切られ
聞くだけは聞くが初心は貫く気

鳥取市　両川洋々

指切りが重荷となった女です
男だから僕の懺悔を陽に晒す
男です正義の二字を抱いて死ぬ
樹海死ぬ日から与作は森を捨て
廃線のレールが怨み節を吐く

鳥取県　松下たつみ

同罪ということにして口封じ
逆になる立場を持っている弱さ
学歴に差があり自説ひっこめる
ごめんねが素直に言えていま倖せ
裏表ジョークジョークと聞いている

鳥取県　林露杖

万両の朱玉に冬の陽が温い
両の掌に包む温もり寒卵
初詣もう長生きは祈らない
物故者の数を指折り寝正月
八〇〇号参加した意義悦ぼう

大阪市　本間満津子

薬ほど飲めてはんなり春の宵
奥の方からじっと私を見る鏡
美しい人情だけで生きてけず
正確な時計を持って情が無い
脛の傷かばうと前へ進めない

大阪市　神夏磯　典子

正月の買い過ぎ嘆くゴミの山
太陽に皺をしっかり見てもらう
返し針しても抜けてるとこがある
蓮沼にメルヘンがあり水ぬるむ
水は神　汚いものをみな流す

大阪市　板東倫子

里帰り老母一年分草疲れる
猫家出　気丈な妻が涙ぐむ
悲し過ぎる男の美学　逸見逝く
ライバルの涙見てから好きになり
寝すぎてもきばりすぎても痛む腰

大阪市　藤田頂留子

大物の差し金らしいとぼけよう
国うみの現代版ね新空港
ひっそりと紙面のすみに元女優
本当にして居りますにちと慌て
いいだろう此処までやったという甘え

高知県　赤川菊野

自分史に泣き言などは書いでない
価値観が合うて年齢気にならず
種なしのぶどうを食べて子沢山
痛いとこ外して諭す母の愛
上げる人ないがセーター編んでます

宇部市　平田実男

喪に服しひときわ厳し寒の冷え
お年玉あげる仕合わせ分かりかけ
物干しのここもやっぱり核家族
長いものに巻かれた振りも老いの知恵
嫁とまだ張り合う妻にある若さ

京都市　都倉求芽

夢ひとつ一緒に入れた守り札
幸せ行きの地図継ぎ足して継ぎたして
自己暗示　弱い男の語呂合わせ
星と雪　愛宕の空をせめぎ合い
ひとり言　妻もそろそろ老い仲間

京都市　松川芳子

足るを知る今日一日のスケジュール
スケジュール母の御機嫌問うてみる
招かれて一つ覚えた味加減
ほのぼのと屋台の情けもろて来る
膝小僧泣かせた虫に灸をする

尼崎市　田中薫

逢いたくてしきりに濁る水のいろ
連写　移ろい易き愛のいろどり
てのひらに童話転がるかなしい嘘
コーヒー皿に音立てぬよう嘘を置く
酔眼　不連続線は胃のあたり

京都市　山海友熙

捨てられし球根の意地水仙花
庭椿思い思いの貌をもち
銘柄の云々贅の極過ぎし
初風呂に浸る萬を満喫す
春炬燵スイッチ切るを忘れられ

横浜市　菱田満秋

見たらしいけれど初夢憶えてず
ためらっている身へ自動ドア開く
美味いのか行列してる尻で訊く
モビールが動き始めた夜の冷え
浄財も賄賂も日本銀行券

今治市　越智一水

精いっぱい生きて秒針気にならず
空間を大切にして丸く生き
座して掌を組めば光が差してくる
母が選る娘のお見合はまとまらず
目を閉じて聞けば分かるよ上手下手

鳥取県　江原とみお

海原へ先ず元旦のごあいさつ
水音のきこえる方へ根をのばす
切り札の使用期限はすぎていた
お隣の窓に油断はできませぬ
造反の礫にぎったままで老う

有田市　松井かなめ

今年から神様信じてアテにする
自分勝手なりくつ並べる六十路坂
たとう紙にまた来年と夢包む
六十路だが五十路四十路の心意気
満足の度合いが違い揉める事

高知市　北川竹萌

亡父母の善意を追うてある命
一期一会　年賀状くる十余年
暖冬のサルビア庭の彩となる
電気屋もガス屋も親し訪ね客
八十挟み今日は茶飲みの凡夫婦

高知県　小澤幸泉

ストレスを溜めてるような昼下がり
南窓開けて希望の陽光を迎え
それほどでない人生にしがみつき
年金の先がかすんで熟年期
口だけは曲っていない義母の意地

西宮市　西口いわる

道づれと時に喧嘩もしています
二次会はコーヒー党の顔も立て
グラスの中のたわむれなのだこの浮世
姑らしくゆったり加減に結ぶ帯
追伸に一度飲もうと結んでる

岡山県　嘉数兆代賀

節くれた指はわたしの素顔です
長いものに巻かれる老いの処世術
白いもの白と言えずに負けている
煩悩つづく枯野千里や冬の景
天を味方に八十路の坂雪の坂

松江市　柳楽鶴丸

安サラリーマン　毎朝七時三十分
天高し僕の体重五十キロ
名曲をきくとおんぼらとなってくる
宿帳の嘘は時効になりません
ホールインワン蝶もびっくりして乱舞

松江市　舟木与根一

年金は切り張りで済む冬仕度
我が家には我が家の喜劇待っていた
心機一転今年は歯医者予約する
捨て犬に餌付けしてから運が向き
国会にただ飯食わすほど平和

島根県　西村早苗

来るたびに方向音痴の君を待ち
さまざまな別れもあろう雪おんな
笑い声この湯呑みにもある余韻
自転車がポツンとあれはおやじのだ
ひとひらの雪わだかまりをもった掌へ

島根県　榊原秀子

臘梅の気品と香り酔う心地
知らぬ間にしっとり雨の夜となり
地のままで生きているから軽い肩
いいわけをしたら愚痴になるこわさ
内緒話出来ない耳と暮してる

出雲市　尼れいじ

喜びを大風呂敷には包むまい
成金になるまい意地を持ってる歩
眠りからまだ覚めて来ぬ宝
成就せぬ夢がたまって来た通帳
自給自足そんな暮らしが欲しくなる

出雲市　吉岡きみえ

小ぶとりの女とことし初詣
地酒よし寒さにとろりとけてよし
十八の輝き少しうろたえる
ようやっと着れた着物が左前
今日もまた喜劇の眉を書いている

出雲市　園山多賀子

八〇〇号末広がりの塔を積む
胃カメラに覗かれている羞恥心
長老というおだてにはだまされる
主語主語と何時も五月蠅い夫といる
土　日は運行停止のバスを待つ

島根県　松本文子

私の言葉が分かる犬と住む
あんなことこんなことなどもう時効
私も赤が似合わなくなった
倖せになろうと走る春ですね
覆水は盆に返らず焼く手紙

出雲市　板垣草丘

宮鳩がバイトの巫女を馴染ませる
年金に不労所得の引け目持つ
呼出しの予感があって腹七分
種まいて先楽しみが二つ三つ
昔ならタバコ畑にやる落葉

出雲市　久谷まこと

無駄足を重ねて道も開けてくる
思いやり本音は胸に納めとく
歳月が角を削って出た丸味
父の血をとどこおりなく子に送る
老骨も春には春の種を播く

出雲市　島祥庵

人情に溺れてみたい春の耳
間違いは無駄ではなかった明日に生き
常識を背負うと遠い主語述語
新しき水がのってる石地蔵
眼と耳をふさぐと明日がよく見える

出雲市　竹治ちかし

いやな奴　しぐさがなぜか俺に似る
子がすがる樹ならば深く根を据える
貧しくも性善説を子に諭す
天才でない子に育ちほっとする
春眠を妻と競っている平和

出雲市　伊藤寿美

欲捨てた顔で居眠りする法話
多過ぎる情報自分を見失う
仕来りがこれは蕎麦椀　雑煮椀
御内室様と書かれ仲人頼まれる
見て見ない振りもしている冬の薔薇

出雲市　岸桂子

いくつもの面つけ替えて生きている
カタツムリ苦労話はしたがらぬ
納豆の糸で栄養つなぐ朝
夕やけに背丈伸ばしたシルエット
胃袋が人を愛してから痛む

島根県　佐々木鳳笙

弥陀の掌で飽くなき貪・瞋・痴
スタンドにジェームス・ディーンに似た男
知識では行きつけそうにない境地
昼の月を汚さず落とす水たまり
花一輪いい迷惑な来る来ない

人間の相剋　地球穢すまい
埋れ木にならぬ執念生きつづけ
賀状書く手許へ訃報また届く
書き初めに墨の香意欲かきたてる
たどたどと母の便りは温かい

島根県　石飛水煙

かしずいてなおゆとり持つ福寿草
七福神ひとり娘が我がままで
年賀状だけの友だちたんと増え
七〇〇号喜寿金婚のあたたかさ
八〇〇号二十一世紀へ揃う足

和歌山市　福本英子

温かい土が待ってるちちははも
無位無冠みんな満ちてる笑い顔
母も娘も同じ轍をふんで無事
ふりかえるいばらの道が今楽し
錯覚でよかった淡い恋でした

和歌山市　内芝登志代

約束の糸を紡いで詩を織る
何があろうと今は一途に歩むだけ
受話器からぬくい言葉が流れ着く
抱いている心の距離は離すまい
透明な海はこころの底で満つ

和歌山市　松原寿子

枯野の虹　希望というはこのような
淋しさに慣らされてゆく冬の蝶
原点にかえり賢治を読み直す
合鍵の秘密を猫が知っていた
大空へ雲が描いた鳥獣戯画

和歌山市　木本朱夏

自然治癒待てば海路の日和あり
まことしやかに褒めあげその場切り抜ける
植木職無口　鋏が物を言う
謙遜の誇張押し売りせぬように
非の打ち所なくて近づき難いひと

和歌山市　桜井千秀

花暦めくると　水仙のページ
初春やすこし気を引く紅を刷く
忿懣があろと無かろと寒の水
冬将軍へかもめになって乱舞する
留守番でんわ少うし気まま過ぎないか

和歌山市　福井桂香

こだわりを捨てよう明日はお元日
充電がすぎて名案浮かばない
臘梅へおもわぬ人の寒見舞
内孫が贔屓力士に似てうれし
雰囲気に酔うて身の上話など

和歌山市　細川稚代

なるようになると自信の体験者
物差しに世の常識という目盛り
程々の距離でふたりを繋ぐ趣味
にんげんとしてのあなたに惚れている
裏に裏大人の世界もうイヤだ

和歌山市　宮口克子

自慢せぬことが私の自慢です
過去形の会話が多くなって冬
叩いたら直るテレビを捨てられぬ
母子手帳受けて確かになる鼓動
流れには乗るが流されない処世

海南市　三宅保州

足音へ妻より犬が先に立ち
人間のモラルを嗤う檻の猿
気の重い税の話は明日にする
胸襟を開くに少し足りぬ酒
相槌を打つと空気が動きだす

和歌山市　青枝鉄治

一時の恥を承知で愚問する
一番の味方は妻と信じたい
一面識ないが惹かれる句に出会う
人一倍気がつき時に疎まれる
一概に女は魔物とは言えず

和歌山市　田中みね

春風駘蕩　猿を背中に犬の新春
妻が出す一碗の茶も松の内
簡単に謝る人はまた詫びる
これからの詩は余生の旅日記
雀踊子偲ぶ湯槽に一人いて

唐津市　田口虹汀

計算のうまい狐に騙される
セールスのプロ猛犬の字が読めぬ
カタカナの文化に迷う老眼鏡
平成の寡婦の辞書には無い操
いま一歩城が落とせぬ預金帳

唐津市　久保正剣

紹介がウソで予感がホントかな
御存知の虚報でスター御紹介
大臣の紹介で来たガス工事
転校の紹介ドラマは伏せてある
紹介が済むまで旧知の顔を伏せ

唐津市　仁部四郎

一杯の屠蘇でおどった黒田節
万民の幸福願う口の先
常夏の島で背を焼くお正月
我が町の町長さんも臭います
猪口才なやつだが一寸憎めない

唐津市　山口高明

唐津市　浜本義美

一陽来復　冬至の鴨が羽休め
何もせず臥ているだけで爪が伸び
ハンターが雉子を放って撃つ矛盾
ふるさとに過疎がまだある水車小屋
寄せる波憶い砕けて砂に這い

唐津市　浜本ちよ

じんわりと厳しく切ないリューマチよ
ガン告知転移の怖れ日々重し（夫）
良心の痛み転々と窓白む
電気毛布亡母の温みに逢う心地
玄関の花を無視する女客

奈良県　長谷川春蘭

湯豆腐に糟糠の妻対面す
猛犬注意女の文字のたけだけし
飴色となり鯨尺にもある追慕
麻痺の子に動かぬ玩具も親心
曲り釘のばして明治生きている

八尾市　宮崎シマ子

好きなのは歌を合わせてくれる友
酔いませる姑とっときの秘話かたる
ふるさとの川で禊だ出直しだ
もがり笛北へ赴任の子をおもう
追いつかれそうで我が身にムチ一つ

八尾市　高杉千歩

偽りのない素顔です姫鏡
二番目をねらえと無理な知恵をつけ
生母逝きて瀬戸の大橋遠がすみ
泣き上戸　三次会まで従いてくる
やさしさも無口のままで春炬燵

八尾市　山下美津留

還暦の晴着で犬と駆けて見る
初春のソフトムードへ孫の群
新年会リーダー達はよく踊る
高い物買いたがりやが横に居る
夕映えへ通天閣の一人言

八尾市　吉村一風

湯豆腐で仲直りする京の雪
おとぼけがうまくなったと妻曰く
首吊りを買うたむかしの大晦日
留守ですと言えば通じるインターフォン
お年玉は貯金しますと子も不況

大阪府　籾山隆

森ひとつ根こそぎ消した酸性雨
芝居じみた正義なんかは真っ平だ
ちゃんこ鍋仕上げにいれるちから餅
キタ新地どこも気軽に入れない
夕映えにちょっと威張っているわが家

八尾市　片上英一

四畳半こたつをはさむグルメ旅
お茶の間でモンローウォークに出会う
表面はさりげない貌するアヒル
帰ります　伝言板のひとり言
思惑もあるにはあるがケ・セラセラ

大和高田市　岸本豊平次

スニーカーは若者向きで古希の春
故里に「長寿の里」と碑が立った
シュウマイの匂が隣の包から
広告の洗剤なのにこの白さ
負けるが勝ち本音は無念を胸に秘め

姫路市　人見翠記

初詣　若葉マークの孫運転
子か孫か区別のつかない話し声
好奇心ただそれだけで老い知らず
絶景かな夕陽に映えた金閣寺
開山は夢窓国師の金閣寺

箕面市　坪田紅葉

不景気と聞いているけどこの人出
寒い夜犬小屋に入らぬ犬といる
鉢植のシクラメン買うひとくぎり
誕生日うれしくないと言いにくい
またひとつ年を重ねる犬の年

高石市　浅野房子

バラ園で温めあっている絆
公園で凧上げている早春譜
美しく枯れてわらべになる夫婦
上げ底の大きな箱にある迷い
玉手箱がびっくり箱になる怖さ

宝塚市　丸山よし津

賀状見て電話掛けたくなって来る
七草や昭和天皇懐かしい
ライバルの受賞に拍手惜しまない
喪中ハガキ親しい人をひとり消す
開き直って老いと向き合う齢になる

大阪市　大塚節子

初鏡　心も薄紅さしておこう
小抽斗　母の秘密も風化せり
他人事で走り回った去年今年
待ちに待った春が来た来たホームレス
体重計が狂ったことにしておこう

寝屋川市　岸野あやめ

一族のボスも老いたり華の宴
生きるとや照る日　曇る日　雪崩の日
肝腎の問いにドクター聞かぬふり
その母も倖せ薄き妻なりき
病人の靴うっすらと埃被る

定位置で年を重ねた箸枕
千切れ雲あれから独りくらしてる
コスモスの乱舞の中でバスを待つ
筆談の紙は言葉に飢えている
墨壺の糸は妥協してくれぬ

米子市　石垣花子

新婚の羽子板鶴の舞うような
冬の湖の水鳥とシベリアを語る
会長と言う名のピエロ演じねば
夜泣き癖　千鳥は恋を知ってから
ユーモアにわたしの波瀾組んでおく

米子市　林瑞枝

どんな彩加えてゆこう初暦
雪の日の出逢い淋しい話聞く
似たような貌カルチャーは花ざかり
物忘れさがしものして日が暮れる
救急車走らせたのは夫の足

米子市　青戸田鶴

八〇〇号　初春の予約へ歩を合わす
息子の釣りし針魚　亡母ごよ帰りませ
スタート前からもう立っている風の中（新春国技館）
立合いのその一瞬に裁かれる
過疎のイベント線香花火にせぬように

米子市　野坂なみ

〆縄が似合う先祖からの樹よ
窓口の眼鏡はかけたことがない
断酒した夫に祝杯すすめてる
旅立ちを見送り一人残された
急行の止らぬ駅で老母を待つ

米子市　菅井とも子

妻の無口つづくあいだに雪となり
影がじゃましてまだまだ忍者にはなれぬ
春の蝶へ亡夫の消息きいてみる
パンひと切れ昔の恩義わすれない
残そうと母の躾はまだ続き

米子市　田中亜弥

旅人が知ってるおいしい水の駅
沖の一人に藁一本が届かない
期待重くていつもズボンがずり落ちる
縁あって僕の頭に出た瘤だ
花束は褪せてく喜劇だけ残る

米子市　政岡日枝子

仁王さん　めしはまだかと立っている
老いたのか影も栄養剤を飲む
美人すぎる似顔絵がけたけた笑う
岐路に立ち寄りかかりたい母の駅
陽が輝くと幸せ彩になる木の葉

米子市　澤田千春

米子市　金山夕子

形よく尻尾を巻いて走る犬
戌の顔で素直になってチャンチャンコ
正座して価値観ちがう話聞く
血族たちそれを言っちゃおしまいよ
よくゆれるイヤリングだな眠くなる

米子市　白根ふみ

元旦にきざはしがあり手を合わす
おだやかな正月鶴に会いにいく
忘れたいしこりが海へうみへ行く
貧しくて遠くの絵ばかり見てしまう
古時計　亡母を語れば動きだす

米子市　中井ゆき

はこべ摘む母のおもいでやわらかい
銀のめし案山子の苦労だってある
ジャンプして子ばなれしよう青い空
愚かしく似ている人に立ちどまる
夕ぐれに滲んで母が待っている

米子市　光井玲子

三ヶ日嫁は立ったり座ったり
大正の笛で踊っている夫婦
再スタートながら一徹尾を振らぬ
夕ぐれの無風に焦る置時計
売り出しのチラシに弱い女たち

米子市　茂理高代

素顔になれる公園の椅子が好き
貧しいと思う顔にも化粧する
師に恵みもらい裸木芽吹き出す
あいうえお　ふいに忘れる齢になり
交差点大事な人を見失う

米子市　新正子

ああ夫婦ひとりのものでない命
五十から少し気ままな紙芝居
千一夜関係ないと駱駝の子
影武者が殿に指図をして困る
ハイレグを一度着たいと妻が言う

米子市　川上より子

プライドと同じ高みにスベリ台
プライドの飛出しという事故に遭う
油断すると昔へジャンプしてしまう
七草の真ん中にいる母子草
はなやぎは寒中げいこの帰りだな

竹原市　森井菁居

パスしても祈りは忘れないように
伝説の森のクイズは解かぬよう
したたかさは誰にも負けぬ寒椿
野火走れ春のドラマを連れて来い
お浄土のこたつで写経するも良し（義父逝く）

呉市　槇田英詩

ニュートンの法則通り墜落す
輪の中の一人二人は左利き
老いたれど小骨ぐらいの意地はある
女部屋まだ起きている声がする
手に負えぬ二男が出世したそうな

竹原市　時広一路

留守番の電話へ小言いうておく
掛け算が好きらし大きなことを言う
籤運を知っているから諦める
今日はどの温泉にしよ入浴剤
靴だけは履かせられない猿軍団

竹原市　岡本清水

欲するは失う事に至近距離
今一つ助力の欲しい時もある
好きなもの書画骨董に日本刀
農閑期しばし洗脳　美術館
順風満帆　皆達者が怖ろしい

竹原市　岩本笑子

ピノキオの自由を誤解してないか
天井川の歴史を知っている柳
二たす二をいつも考えています
猛犬注意お昼寝ばかりしています
駄犬の意地時々もらう倦怠期

岸和田市　福浦勝晴

早春の素足に絡む貸し浴衣
おじさんと呼ばれて傘寿悪びれず
相談に乗っては無心のことかいな
指輪買う話なかなか纏まらず
ねんねこも若奥様という姿

岸和田市　島崎冨志子

正月のおセチへ孫の迷い箸
置き床に夫の掛軸生きてくる
同居してまた子離れがむつかしい
何が気にいらぬか妻が貝になる
赤い糸切れず縺れず来た夫婦

岸和田市　原さよ子

柏手が夜霧にひびく初詣
夢がまだあるから呆ける暇がない
孫の作厨はなやぐ鍋つかみ
好きだから少しあなたを困らせる
こんな色出したいもみじの葉を拾う

岸和田市　古野ひで

喜寿迎えこの元日に思うこと
空気まで新たに思うお元日
たっぷりの水で蘇生の植木鉢
犬老いて優しい優しい目となりぬ
倖せを嚙みしめてきく除夜の鐘

春近し木々の祈りも浅くなり
ファックスの合格祈願効くのかい
目標を高く掲げて春を待つ
雪解けの小川冷たいけど温い
風格を早く持ちたいなと思う

岸和田市　高須賀　金　太

特等を当てたらなんて言うてくれ
区画整理　人いきれする街が消え
雑草と言われ健気に背を伸ばし
弥次馬の一人となったさみしい絵
タイミングよいブレーキを母がかけ

岸和田市　岩　佐　ダン吉

手と足の爪切り所在なくごろ寝
自信から過信に変るコップ酒
一日の始まり息子起す声
年金が這入ったらしい母の髪
窓口で尋問受けるおろす金

岸和田市　田　中　文　時

人間の無欲の顔は美しい
足腰が弱り口だけまだ達者
初春に色封筒の便りくる
ロボットの下働きという職場
ニセ者の夫婦も出ている連休日

香川県　木　村　あきら

来客が多く仕事が捗らず
茶目っ娘も和服が出したしとやかさ
金なくも五体満足だけでよい
歯車が一つ狂って不和の仲
三ヶ日孫とチャンネル奪い合い

香川県　成　重　放　任

極楽は一日の締めしまい風呂
一合にホロリホロリと春の夢
片方の耳で聞いてる夫の嘘
山笑う出番待ってる父の鍬
弱い者同士の肩があたたかい

香川県　川　崎　ひかり

聴く姿勢持つとやさしい風の音
美味そうに食べてる僕が気に入られ
借景の山春めいて句碑の宿
温めた掌で痛いとこ診てくれる
マゴの手が届かぬ所にある痒さ

香川県　池　内　かおり

親馬鹿で裾野に広く種を蒔く
食欲を満たして新春へ翔ぶカラス
金婚の貨車寝たきりも乗せてゆく
口達者せめて手足へ回したい
一言の重み知ってる心の灯

香川県　新　川　マサヱ

香川県　工藤吟笑

充電はしたがエンジン掛からない
一筋に愛を信じて共白髪
当確になると味方がドッと増え
古里は達者なうちに帰るもの
倖せな話ばかりで山が見え

香川県　山地マツヱ

ミシン踏みふみつつおでん煮込んでる
ボーナスに歯止めのきかぬ年の暮れ
添いとげるとは立派　男が耐えている
竹のような気性で辞表ばかり書く
惚けている姑へ五度目の食運ぶ

岡山県　小林妻子

敬老会へとうとう顔を出して来た
でも付きの就職口が見つかった
留守番の辻褄合わぬ酒の酔い
除草薬　土筆も春へ意地を見せ
尾鰭までつけても嫁が見つからぬ

岡山県　矢内寿恵子

幸せも夢も手探り夫婦坂
躓いた今日をジャンプにする明日
生き下手も動けば和む風がある
振袖がはたちの鼓動聞き分ける
血と汗の軍手本音で生き通す

岡山県　山本玉恵

楔ひとつ抜いて素直な道を説く
出つくした笑い袋を満たさねば
ひとり分の音でブツブツ炊飯器
義理一つ果して下駄のかるい音
酒に流したはずのいたみが舞い戻る

岡山市　井上柳五郎

ことしから逆に孫よりお年玉
真実を知った日からの失語症
あんなにもいい人なぜに不倖せ
古今東西　賄賂の好きなお役人
吠える犬をやんわり叱るのも癪

岡山県　荻野鮫虎狼

招き猫　金の無い客呼んで来た
喋るうちゆとり見出すのも女
更年期　雛人形が欲しくなり
税金の還付予測の旅プラン
夫婦して出すアイデアは妻好み

岡山県　池田半仙

焚火するゲートボールの熱心さ
年末も隠居に余裕ある時間
紅白戦お祭りさわぎ気にいらず
ジャンパーの姿時世の初詣
元日の生れぴったり歳が増え（長男）

表現の古さに父の人間味
お互いの尻尾で遊ぶ仔猫たち
神さまの杖につまずきここに住む
うとうとと一日風邪の鬼と寝る
札束は時に冷たい目を向ける

砂川市　大橋政良

アイヌ語の苗字と知ったお正月
正月の会議は口を縫うて出る
友人のバラも刺出る春だもん
冬の郭公啼くかと触れて魚売り
冷害の米もおにぎり丸くなる

弘前市　蒔苗果林

輪廻転生すべて忘れて地に還る
咬竜の夢を抱いて時を待つ
少年の孤独を仔犬慰める
子に托す夢は無限の虹となり
末席の若い意見が意表つき

弘前市　村田善保

本棚に灯るは塔の八〇〇号
実らない稲を供えて新春とする
人間の餌だけあてにしなさるな
景気よい振りでもしよう雪合戦
だから米粗末にしては下さるな

十和田市　斉藤劦

雪に生き雪に眠るも北の業
春一番残雪きしむ愛と憎
猫柳　納税終えて風光る
きじ鳥と一期一会の万歩計
ごますりを嫌うおやじの橋頭堡

弘前市　岡本花匠

波風を乗り越えて行く嫁姑
弔詞から口惜しい涙落ちてくる
叩く手と叩かれる手が実を結ぶ
藍染に雪を咲かせる北の街
結論を急いで余計皺が寄る

弘前市　中山雅城

内科医の医者にもあった鼻づまり
煮え滾る鍋です蓋を持て余す
末席に座り拳を抱いている
かけだしが天下を狙う赤提灯
喫煙の場所でマニキュア目にしみる

弘前市　小寺花峯

夏炉冬扇 哀しい夢を抱いて 春
吹雪吹雪　のっぺらぼうの人ばかり
大寒の気位見事　君子蘭
いか釣りの漁火亡夫と見ています
系図一巻昔ばなしが生き残り

弘前市　佐治千加子

弘前市　一戸ツネ

自主性を忘れた老いの妥協癖
孤独から逃げる心の阿弥陀経
寒修行網代の笠の雪しずく
謎　謎をいっぱい集めバーコード
火葬場の寒さ重さに明日の風

黒石市　相馬一花

新年になっても来ない福の神
鼻水も涙も洩らす嬉し泣き
憧れの美女に手術の跡がある
朝食を競って食べる共稼ぎ
一息で書いた前衛書道展

十和田市　小笠原敏人

犬が曳く散歩時々嘘になる
犬好きで一〇四匹も飼ってます
キュッキュッキュッ雪も啼きます氷点下
待合室呼ばれるまでの胃の痛み
絶妙句夢諸共に獏が食い

十和田市　阿部進

伸び伸びと子を育てたくUターン
ああ無情いい人ばかり先に逝く
米輸入　断固反対　ムシロ旗
椅子とりをあきらめ人間らしくなり
親心逃げ道あけて叱りつけ

姫路市　大原葉香

山削られ山彦さえもいじけてる
一服のタバコで思いふと変る
車いすの暮しに背のびなどいらぬ
羅針盤北指しつづけ律義さよ
国会の入口仁王像など如何

吹田市　山本希久子

歳の差はなし川柳の輪に生きる
女正月小豆と餅があればよい
冬の日を無為無策なり鮭茶漬
風景は一つ　こころは二つある
双葉もう香りを放つ幼稚園

西条市　片上明水

凶作の跡の田圃へ来ぬカラス
コスモスが枯れて野風も道を変え
風邪引きと風邪ひきが遇うパチンコ屋
子に借りた靴がピカピカ光りすぎ
七輪の味を知らない婿と鍋

大阪市　北勝美

孫からも年玉もらう齢になり
一行詩飾る言葉が邪魔になる
年金のくらし値上げが痛い米　切手
春の陽を沓脱ぎ石は知っている
早春の絵筆とらせるシクラメン

寝屋川市　柴田英壬子

ひとり暮しへサランラップのお年玉
市の人は仕事で桜伐っている
樹の精が舞う春浅き陽の中で
払暁から呼ぶキャンキャンが疎ましい
大粒のいちごで明ける松の内

羽曳野市　田中透太

本当の涙は胸の奥にある
シクラメン温い話に飢えている
二ん月の小樽運河よ多喜二の死
使わぬが殺し文句は持っている
未知数の顔並んでる春の駅

富士宮市　渥美弧秀

病床の窓に広がる春の雲
風邪に寝て気になる原稿締切日
フルートの音色心の底にふれ
朝焼けの富士しばし刻を忘れよう
〝エリーゼのため〟弾いた青春戻らない

今治市　野村京子

黒豆が口でとろける無責任
片袖に残り火おいて冬の章
想い抱く時捨てるとき夢芝居
男と女　喜劇悲劇や終の章
雪が舞う故郷の下絵を持ち歩く

静岡市　安本晃授

横着な足より先に口がでる
沈黙の間がこわい花だより
やさしさで包む故郷の万華鏡
切りつめた暮らしの中の貯金箱
煩悩を捨てて浄土の波に乗る

河内長野市　井上喜酔

真実を知ると冷たい風が来る
美しく飾る野心は嘘が好き
ほっとする話へ母は茶を入れる
性格へ釘を刺されて無位無冠
教養のカーテン邪魔な縄のれん

北九州市　梅田宣司

故郷は幾星霜の居士大姉
万歩計　老化するぞと後を押し
一年中菩薩の顔はしておれず
よい勉強させてもろたと痩我慢
その程度でよかったなどと見舞客

鳥取市　美田旋風

計画の手直しすまい明日がある
三連休名所旧跡大渋滞
興に乗りジョークが過ぎて火傷する
ゴキブリの誤算居間には子らがいた
ひととなり恋の出口で試される

鳥取県　さえき　やえ

言い分は明日に回して月を見る
唯々諾々と従う百姓もう止める
くたびれた駅をはなれぬタブレット
依估地だな　たのみますよとなぜ言えぬ
らちもない話に明治とんで出る

奈良市　米田恭昌

還暦新春長寿社会の一年生
柳友が増えて楽しい年賀状
元旦に矢張り日の丸出しそびれ
橋詰の交番で聞くたこ焼き屋
踊りの輪ぬけた二人の内緒ごと

豊中市　吉田あずき

初暦　良運ならば信じよう
藁一本持って余生を達観す
キャンドル一本　君の堂々たる生命
木枯しと闘うて来た髪かたち
折鶴の少しいびつな暖かさ

堺市　中野欅子

度忘れを披露し合ってクラス会
近すぎて有難すぎて見えぬ愛
追憶の橋も渡れぬほど涙
シルバー席らしく見えぬかそれも良し
我が終章利口に馬鹿に忙しい

広島県　藤解静風

年金者までは届かぬ総理の目
平穏という有難い陽が沈む
禁煙へ飴なめさせて落ちつかす
一本のマッチが闇を消す明かり
タガ一つ外れてからの下り坂

伊丹市　山崎君子

バス停ではぐれ手袋年を越す
髪型をかえて戌年ひとり言
酒の文字消えて単身赴任地へ
七草にカレーライスを食べる孫
残り福肩でサラサラ音たてる

箕面市　椎江清芳

背を向けた島の土にはなれぬ骨
故郷の水温もりの掌に溢れ
鰻丼は上中並の中にする
罪許す仏の顔は丸い顔
コップ酒匂を知っている軍手

富田林市　片岡智恵子

齢の差に歯ぐるまの合わない喜劇
小言だと思えば腹の立つ小言
着てくれる母の米寿へ縫う晴着
落ちてくる風船　夢を詰めすぎる
やはり大きい方を選んだ福袋

何も彼もみな持ち越して年明ける
娘より母満足のお振袖
大仕事してきたように晴着脱ぎ
抱負はとまたも聞かれる二十歳
ここだけは二十歳の世界別世界

茨木市　堀　良江

利下げ幅余生プランを建て直す
マンションの窓別々の陽が当り
仕残しを作り傘寿をまだ生きる
学者言うままに育てた左利き
自家用車やめて豊かな日が戻る

富山市　酒井　輝

おのろけは夫の頑固こぼす時
都合は直ぐついて何時もの顔揃う
清貧を気取る気はない野菜好き
犬が逃げ嫁と姑の仲直り
二次会で本音聞くはず聞き出され

西宮市　秋元てる

逃亡記虜臭かなぐり捨てた夜（奥安嶺逃亡記）
血のいろの落日追うた逃亡記
六月を逃げ北満は花ざかり
黄の百合を摘んで食べては下痢ばかり
数珠つなぎ銃殺死体見た恐怖

広島県　田村新造

好きなこと言うて世間を狭く住み
訃報記事　年齢病気が気にかかり
除夜の鐘歴史のひとときだと思う
たわいない話老母を囲んで小正月
心の傷覆う化粧を忘れまい

神戸市　山口美穂

犬つれた隣同士がドッキング
孫に年玉やって娘からまた貰い
ときめくもの未だあり源氏読み進む
それぞれのポケットに余命表を秘め
火の国の女で一途な想い込み

堺市　黒田真砂

エゴだよね芸する犬を哀れがる
支柱ない朝顔に似た孤独感
おない年真似たいところたんとある
可能性若さが叫ぶ熱いもの
恩師からカンフル注射のほめことば

吹田市　井上照子

酢の抜けた男真っ平御免です
竹光に助太刀などは頼めない
愛すべし犬は三日の恩を知る
補聴器の助けを嫌う老いの意地
在庫一掃頭は空に出来ません

倉敷市　田辺灸六

富田林市　池森子

すれすれのところで神の掌に落ちる
火だるまになって帰って来たカード
枕ことばを飾って駅になるつもり
不整脈フランスパンと仲がいい
身の内の悪魔が笛を吹きたがる

堺市　柿花紀美女

世の流れ眼鏡の焦点呆けてくる
七人の敵欺いた古い靴
人三人が来て正月も早や七日
好きだった人も私も年重ね
老姉妹　話ばかりの旅の夜

藤井寺市　中島志洋

合格の報せ我が家にやっと春
木蓮の蕾を焦らす春の冷え
男と女判子一つで付くけじめ
縋る娘に慈母観音の目が優し
黄門の笑いでドラマ締めくくる

松山市　宮尾みのり

ケーキ食べながら初恋談義など
何かある妻がきれいになりだした
束になってきた凡人があなどれぬ
データには出ない心の奥がある
謙譲の美徳置いてきぼりをくう

姫路市　中塚遊峰

神様が知ってござるという安堵
傷ついた羽を繕う古希峠
目の前を邪魔なくもの巣老化とか
物識りのお方本当の謙虚さよ
死にたくはないが老大の友は逝く

生駒市　北山悟郎

凡人の群れが連なる初参り
良い笑顔　顔が疲れるお正月
娘が幸を僕の頭にふりかける
警察を軍隊に比べ馬鹿にする
八方破れ男の肝は座ってる

大阪市　桝本蕗児

貸金庫僕の位牌も入れてある
アナウンサー就職難を淡々と
噂をどうぞ私補聴器はずしてる
集団の中の孤独のおそろしさ
介錯は君に頼むと言った友

鳥取県　羽津川公乃

元日の誓い喜劇にさせまいぞ
春を待つ顔おだやかに装うて
存分に凧上げさせる休耕田
ガン克服の友溌剌と赤い靴
通帳とわたし残高頼りない

大阪市　井上白峰

片意地な男に絶えぬ向う傷
胃カメラに戒められた梯子酒
老いてまだ絵皿に残る春の彩
言いたくはないがと妻の強意見
どちらともとれる言葉で行違う

松山市　谷真風

ふるさとのあの赤松も枯れたとか
酢なまこよわたしは呑めぬ体です
熱い味噌汁上様気分にしてくれる
足なえにおまけがついて手もふるえ
三日暮る回診を待つ脚腫れる

姫路市　丁坪サワ子

屠蘇祝う空白のまま亡夫の席
新春風景全国を観る床の中
今朝話した友の訃報聞く夕べ
子に遠慮して濡れ落葉という父権
旬でない苺の虚色に騙される

寝屋川市　平松かすみ

抜き足差し足　娘一泊しています
どう塗りつぶそうか真っ白な明日
本気だな屋根を越えますシャボン玉
ジャンケンはグーと決めてるお人好し
じいちゃんのおやつになったひなあられ

枚方市　海老池洋

美人薄命やすやす口にする勿れ
泡吹かす碁石徐につまみあげ
数奇屋ありき昭和もまたありき
妻とならこんなに弾まないダンス
今もって遠い約束責める妻

鳥取市　西原艶子

ぴかぴかの望みを抱いていた昔
一徹な男へ発破かけて見る
そろばんと愛が反撥して揺れる
妻という椅子へ幻覚多すぎる
耐えようと誓う靴ひもきつく締め

鳥取県　乾喜与志

古い情けの抜けきらぬ温い部屋
大根の味噌煮お隣へも配る
人情の機微を漫才から学ぶ
愛すればこそ傷つくことも笑むことも
殿様の嘘には慣れた齢まわり

大阪市　渡部さと美

春あらしあなたも同じ自我強い
土やわらかく陽がやわらかく弥生
還暦の妻はいまだに夢多き
一足跳びが出来ずに去年より一歩
一人相撲と分かって急に腹がへり

富田林市　松本今日子

小康を得ると自由を考える
私をわたしが信じる外はなし
マンションの灯アカアカ大晦日
咳の子を気遣いながら賀状書く
病院のロビーでよんでる八〇〇号

豊中市　辻川慶子

産声と共に初春おめでとう
母乳濃く噴き出て愛を含ませる
輪が増えて楽しさもあり苦しさも
内緒ごと思わぬとこへ飛火する
妥協してきれいな嘘を又つくる

倉吉市　淡路ゆり子

初孫の安産祈る初詣
この国が好きで旗日を早く起き
遠い子を当てにはせぬが年を取り
乗り過ぎた話はいつも裏があり
追伸に老母の本音が書いてある

町田市　竹内紫錆

押時計　職場の王位入れかわる
わが暗記　平方根より周期律
沈殿の色から化学技師の道
持ち主のぼやきは知らぬフロッピー
返信に及ばぬと書き喜ばれ

鳥取市　春木圭一郎

初デート切符大事に持っている
冬山の素顔に生命知らされる
男なら黙って許す度量持て
パソコンも休みほしいと軋み出す
二次会になっても席次変わらない

阪南市　坂口公子

残光へしみじみかばい合う夫婦
金平糖負け犬ばかり寄ってくる
思い切り振っても答くれぬ鈴
ときめいてはじめて出合うような海
あめと鞭入れて故郷からくる包み

鳥取県　鈴木公弘

一年の計をアルコールに漬ける
きれいごと言う大尽の裏おもて
異なものと思う空気を分けて吸う
エンストを気遣う人がいてくれる
福袋しあわせそうな嘘をつく

倉吉市　米田幸子

戸を幾つ開けたら神に逢えますか
ため息はよそう今夜は満月だ
丸腰で来たら手心して帰す
マスコミに追われる頃が華だろう
里帰り我慢袋が干してある

新しい嘘がのし紙貼って来る
桃の花はふくらんでるに元気出せい
人情も算盤ずくとなる浮き世
晩酌へやさしい嫁は手を伸ばす
灰になるまで水甕は切らされぬ

鳥取県　乾　隆風

目覚ましに今日の仕事のけたたまし
木漏れ日よ僕の心も温めてよ
制服がバッチリ似合う再採用
再就職　六十五歳の顔上げて

和泉市　西岡洛酔

初詣　今年は欲が一つ増え
不況でもやることはやる責めをもち
ストレスの泡一つずつお湯に消し
傘寿すぎまだまだ欲が捨て切れず

大阪市　上田柳影

糖尿病ですねと断る甘いもの
叱るのがソフトになった父案じ
面接に猫とねずみが向い合い
道に地図書いて教えてくれた道

大阪市　中西兼治郎

掛け声を己にかけている余生
ちぐはぐにとりでを築いている夫婦
わずらわし親子の境に嫁が居て
贅沢と年金無縁にさせてくれ

岡山県　花田たけ志

食欲に辻褄合わせてメニューする
年末にお経のテープが切れた謎
カロリーを控えたい気がまだお節
ストレスを湯気に発たせる露天風呂

岡山県　岩道博友

赤ちゃんの名前この頃復古調
時節柄おすすめ旅行も安近短
新3K喜んでると肩叩き
ブレンドでご飯の炊き方垣根越し

和泉市　岡井やすお

近道といえ行かねば事もなし遂げず
逃げ道を開けて言葉のきついこと
少年は口笛吹いてまぎらわす
泥臭い匂が好きで同居する

大阪市　寺井東雲

みんな寝て時計に音があったこと
だんだんと皺が気になりノーメイク
遊んでる日は六十の顔忘れ
子は肉親　夫は他人と言う世間

河内長野市　植村喜代

焦るほど裏目裏目の繰返し
外米もやっぱり火加減水加減
妻死んで若返る友ふけた友
仮の名で働く女の薄い眉

七尾市　松高秀峰

貝塚市　行天千代

酷使した手足労わる三が日
お正月いつもの規則外れてる
三日目はボチボチ仕事したくなり
孫の嫁見るまで生きていたいもの

鳥取県　上田俊路

騙されていよう楽しい嘘だから
証人席であいまいになる記憶
忘れたい名前が残る住所録
迷わずに心の点を線にする

島根県　藤原鈴江

しっとりと心にしみる春の雨
ゆきずりの縁運命として生きる
人の世や嘘も時々使わねば
追憶は素敵な先生だった恋

大阪市　松尾柳右子

初夢に会えずぐっすり良い目覚め
ひな段を飾りおんなを自覚させ
気おくれを押して幸運つかむはず
夫に似るしぐさに血筋こわくなる

藤井寺市　福元みのる

快気祝　奮発するほどに癒え
もうこんな時間と席を立つ女
塵箱にキセル切符が棄ててあり
酒煙草止めて体調狂い出し

広島市　森田文

ひとり旅小石ばかりの川に出る
さみしさは外灯ひとつ消えている
潮騒にわたしのことばはばまれる
聖書閉じ心ころころめまぐるし

鳥取市　岩原喬水

サラリーは上がらずノルマだけ上がる
男なら火傷承知の火を浴びる
子育てにあと振り向かぬ女です
算盤に合う贈賄が恐ろしい

出雲市　板垣夢酔

ほろ酔いでこの世バイバイしたい欲
花生けて人も鋏も満足し
太陽が真赤で旅路今日も晴れ
知らぬ間にいい友胸に住みはじめ

西宮市　瀬尾六郎太

人の世や大中小の三括弧
柚子使いカボチャ食べ食べ老い二人
老齢化大ボケ小ボケ割拠して
フリーマーケット　コミュニケートの店を出す

和歌山市　田中輝子

嫁ぐ夜の枕並べて姉いもと
結び目がほどけたごとく娘が嫁ぐ
友達より低いヒールを履いている
早春へ鈴振ることが多くなる

犬の名で呼ばれてふえる顔なじみ
痛いとこ妻がやんわりついてくる
脇のまた脇でもうれしい初舞台
謎めいた妻の笑いが恐ろしい

東大阪市　崎山美子

晦日から初詣へと変る音
二三品予定はみだすおせちなり
旅の運　元旦の空晴れわたり
女正月　地酒一本さげて行く

守口市　結城君子

二人扶持やっと老後へ食い繋ぎ
山林の開発水源池を涸らし
碁敵へ待った許さぬ黒布石
九州の臍で火を吐く肥後もっこ

唐津市　筒井朴竜

お正月猫一匹と老いふたり
七草のみどり無口で食べている
松の内きれいな顔の福寿草
ブーツなどいらぬ天気で寒に入る

鳥取県　山根八重

色あせて亀裂が走る夫婦の絵
先に逝く妻に手順を狂わされ
ころころと手繰れば逃げる毛糸玉
人の世の箍をゆるめる寄席囃子

和歌山市　山田高夫

齢ですな　なんのまだまだ旅の酒
モノクロもカラーもあった幾山河
残り火で恋人以下の話題積む
大正の依怙地が抜けぬ独楽の芯

川西市　松本ただし

誇らない弥陀の心を日々の師に
勲章の陰に輝く妻の汗
子の夢を親が四角にはめ直し
七草もセットで売られ良い時代

出雲市　富田蘭水

かざり綯う十一代の家長です
伝統のかざりを綯うも我が一代
おめでとうヨッシャヨッシャの椅子がある
手を叩く役にはるばる出かけよう

鳥取市　武田帆雀

袖通す亡母の晴着の濃紫
屠蘇きげんついロに出る国自慢
聞き流すことも一つの思いやり
ふるさとを捨てる片道切符買う

寝屋川市　堀江光子

無理難題目でピーナツは噛めまいて
枯れ芒　大正琴もしめりがち
とんがらし真赤な色に騙された
出雲路に山から時雨駆け降りる

出雲市　小玉満江

権力にすり寄る記事を読まされる
恵まれて病んでいく国怖いなあ
波風が立たないように一歩引く
レッテルに翻弄される左党たち

鳥取県　谷口次男

ぽっくりと逝けばよろこぶ子がふたり
四季の花咲かせて独り住む借家
亡き夫と私も今年は同い年
ふる里の冬はすっぽり雪の中

宝塚市　吉田笑女

阿国舞　昔を今にほうれやほい
くるくると髪結上げん紅珊瑚
母と娘を結ぶよすがの月の枷
鬼も蛇も飲めばほろ酔う神楽酒

出雲市　石倉芙佐子

不景気を流行色で撥ね返す
赴任地へ夫を偵察する切符
男ならこの娘はきっと出世する
生ぐさい風が寺から吹いてくる

鳥取県　石谷美恵子

少年の夢はてしない輪をえがく
腹八分今日もたのしく生きている
老人と見て押売りもよく粘る
のびのびと五体安らぐ故郷の空

鳥取県　津村八重子

穿いてみるだけで納得靴売場
偽物で結構通る街のよさ
バーゲンの山から引張り出したこれ
丸い石まことしやかな名がついて

吹田市　栗谷春子

寒牡丹ひらかずカメラ待惚け（石光寺）
線香の煙の中にある願い
厄除けを護摩木に書いている安堵
万葉の余情が残る歌碑の道

岸和田市　芳地狸村

手を上げて歩道を渡る児等につく
お茶の間のアイドル犬に奪われる
マル優の枠増やします下がる利子
仲直り口には出さず茶を入れる

吹田市　茂見よ志子

忙しい妻へねたきり手を合せ
やわらかな声で男を釣り上げる
旅帰り妻の甘えた声に逢う
ぬくもりの一言で足る老夫婦

鳥取県　黒田くに子

嫁入りの娘と妥協することばかり
お上手でとても嘘だと思えない
老眼ですかと互いに眼鏡かけ
御飯ですよ呼べる人が側にいる

芦屋市　黒田能子

豊中市　滝北博史

春一番ハートにできた水たまり
小鳥さんごめんテープかと思ってた
原色を好まぬ夫好む妻
ゼネコンも峠見えたか花見酒

豊中市　井上直次

良い記事へペンがひとりで踊り出す
ぞんざいな言葉の裏の温かさ
年金が潮引くように年の暮れ
バーゲンで買うたが気になる妻の口

出雲市　小白金房子

竹とんぼ孫の歓喜へ高くとぶ
鍬ふるう余力あしたの策もねる
松過ぎて飯場灯をとり戻す
暴落を知らぬ子牛の目がやさし

大和郡山市　坊農柳弘

君想う愛の便りの胡蝶蘭
戦いが済んで夫婦の欠け茶碗
粗大ゴミ愛の絆の同居人
写真より美人のはずはない見合い

和歌山市　堀畑靖子

幸せな暦いくさのない暦
雪月花あいてに遊びたい余生
クレーン車の影けものめく寒の月
春のゆめ通い路開けて君を待つ

大阪市　清水絹子

千号に出会える気概まだ六十
似たような顔が寄り会う通夜の席
姑の忌も母の忌もくる如月よ
あれば見る無けりゃそれまで週刊誌

大阪市　大野武太

私の書斎　廊下の片隅に
無宗教　人間不在が恐ろしい
就職はお上が決める世を生きて
病歴と税歴　秤にかけてみる

島根県　加本義良

巻き戻し出来ぬ喜劇を続けてる
年金の暮らし秘密も謎も無い
次期総理もう決めている縄のれん
飽食の驕り味噌汁冷える音

鳥取県　田村きみ子

伊勢参り神の恵みの小六月
満ち足りて遊ぶことには参加する
りんご剝くこの幸せを放さない
食卓で話が弾む嫁姑

和歌山市　玉井豊太

汐のにおい春の近さを告げている
特賞をひとり手前で当てて去ぬ
職人へかけた根性ちちの腕
北風と財布がかるい日曜日

鳥取県　西浦小鹿

いい道ができてお米が盗まれる
サロンパス貼ってＰＫＯへ出る
男には譲れぬ砦ひとつ持つ
僕だけが自由に泣ける橋の下

守口市　森川まさお

茜雲もうすぐ島は闇になる
無人駅　冬将軍を加勢する
何事ぞ酒飲んだのに寝付かれず
目印がだんだん低くなってくる

岸和田市　三輪通彦

人形になれず口出しして揉める
寝込まれて妻のありがたみが判る
外面が良いので得をする夫
世辞言えぬ男が抱く疎外感

茨木市　藤井正雄

深夜バス潮の香りで明ける夜
雷のように叔父貴が来て帰り
ライバルが親しい顔で来る危険
古語辞典買う子の背丈嬉しくて

箕面市　岩津ようじ

甲斐性なし夢の中でも甲斐性なし
中高年　会社ゆすればこぼれ落ち
倹約の母いたわしく疎ましい
わが首を締めるロボット掃除する

島根県　松本聖子

ああ女が座るとバラの香がうごく
あの人がいるので呆けていられない
青春は上下左右へ気をくばり
年金は年金なりの喫茶店

東大阪市　安永暁子

病院のなんと眠たい時間まち
無口なり肝臓検査もの申す
老いの部屋生花鉢物水をやる
世の波を日和に願う初詣

鳥取市　西村黙光

処女作の蕎麦へ女房の舌鼓
古希の坂　亀と仲良くして暮らす
躾する親のしつけが出来てない
血圧の自動装置は縄ノレン

倉吉市　野口節子

ソロバンに合わぬ愛情だってある
淑女らしく見せる帽子で手放せぬ
これが極楽だろうか湯にひたる
百ワット並べたような嫁が来た

豊中市　江口明光

孫の齢もううかうかと叱れない
私より十歳下の過労死よ
銀行はティッシュで定期売っている
朱に染まる友が沢山居て困る

和歌山市　北山好笑

Jリーグの親がとくいにインタビュー
犬の尾も人を選んで振り分ける
子供みな嫁ぎ夫婦のパートII
福の神　隣で踊り引き返す

鳥取県　石尾かつ乃

さむ空へ素通り出来ぬ募金箱
あの時の嘘を償う借りがある
食卓を囲むとしゃべる過去未来
スタートした頃はきれいなピンク色

鳥取県　大角幸代

ひらがなでやさしく子供らをつつむ
生きている愛のほころび繕って
そこそこの幸せでよい朝の靴
生きてゆくには嘘も少しはたしなもう

鳥取県　大角正道

生きている価値が分かってから死のう
嘘をひきうけ笑顔でいるあなた
弱虫ですと故郷へ電話する
弱音を吐いて風船ふくらます

神戸市　木村貴代子

モーツァルト流し屑屋がやってくる
歯こぼれの鋸で不況を切ろうとす
行きたくはないが二次会誘われず
陽の匂　髪いっぱいに子が帰る

豊中市　三宅つえ子

甘酒で向き合う人と弾む刻
木蓮の芽がふくらんで喪が明ける
ぬくい所を探して回る車椅子
花の下ふたりで座る椅子がある

大阪市　小糸昭子

髪切って昨日の事は忘れたい
高枕してみてやはり肩がこる
組紐を編んで女は脱皮する
不況風　自動扉は開かぬまま

倉吉市　最上和枝

溺れても藁に頼らぬ意地がある
鈍行で余白を埋める旅に出る
懐のカードが謀反して困る
母さんの笛に家族の輪が回る

堺市　近藤豊子

公園のすみでぬばたま眼をさます
ぬばたまへ光あつまる雨あがり
児の髪のぬくもりテレパシーのよう
射干玉の夜をひそめたる埴輪の眼

宝塚市　中田純次

スカウトは即戦力を標的に
よくぞ似た寛美親子の泣き笑い
目に保養　心に詩情　旅にでる
新空港　不況も離陸したいもの

健康が幸福と知る屠蘇の味
挫けては居れぬ六十路の峠道
子は巣立ち老いた夫婦の縄電車
七転び八起き六十路の初日の出

交野市　福崎しげお

博愛の心絵皿に溶いて見る
山城にかなしい秘話が埋もれてる
信じ合うだけで地球が丸くなる

鳥取県　幸家單車

初詣　無神論者も孫と手を
初日の出　二階窓より拝む老い
枯山水　説明聞いてああそうか

池田市　岡本吉太郎

ひとときを酔うあの頃の父子像
ささやかな願望　主婦の初春の旅
それぞれに評論家なり夜の集い

大阪市　町田達子

満月だ気を付けようね血潮湧く
心根が目元に一杯たまっている
年の瀬に即入院と宣告の夫

香川県　永峰伽名子

天国が地獄に変わる飛行事故
もうそこに春が来ている装身具
戌年へ張切っている麻薬犬

大阪市　清水利武

ボーナス減に妻のリフォーム腕を上げ
ふたぁりの食卓皿を派手にする
募金箱に入れてスキップして帰る

鳥取県　西川和子

神様と焦点合わす初もうで
外で合う猫が善人ふりをする
子宝をもうけ苦労も共に来る

鳥取県　太田幸枝

苦労した皺は勲章化粧せず
見返りを求めず生きて幸を知る
瞼にはゆさゆさ大正髷の母

吹田市　瀬戸まさよ

花びら餅　乙女の頬にふれるよう
妻と共演　筋書きのないドラマ
皆勤賞の時計もらって朝寝坊

和歌山市　岩本美智子

寄り添うてふたりで築く愛の城
大海の味を覚えた井の蛙
離れたら懐かしくなるひとの声

和歌山市　玉置当代

信号のようにぴしりと言う男
山小屋のランプと唄の明るさよ
知恵の差で猿に芸まで教えてる

和歌山市　池永正雄

自選集

月原宵明

生きていてよかった八〇〇号に会い
六十は過ぎても好きな色ピンク
保育園頃から既にある派閥
海向けば叫んでみたいことがある
足腰は弱いがペンに骨がある

小西雄々

福を呼ぶ陰の努力を見てくれず
桃源郷へ来てから特技　芽が出ない
コーヒーとパンでエンジンかける朝
ノルマ追う靴に自信のマイペース
父さんがピエロを演じ今日も幕

八木千代

半分は仏に部屋を明け渡す
旅人の消えた森から明けかかる
目を覚ませあれは一番鶏の声
再びの夜明けを大切にしよう
喪明けにきれいな鐘を打鳴らす

波多野五楽庵

鳥獣戯画の一匹だったら楽しかろ
どの道を辿れば釈迦に逢えますか
船若湯膝を崩さぬ有難さ
十本の指に火の過去　水の過去
割り切れぬ数を毎日割っている

小林由多香

老い二人年の数ほど豆を炒る
仏壇へ向かうと弱音こぼれだす
農業を継いでくれるという宝
懐が寒くて動きにぶくなる
生き残りかけ神様にすがりつく

久家代仕男

朝の凍て豆腐屋の湯気ことさらに
仕様ない風邪いただいて寒に入る
初鏡　出来そこないの俺を見る
口喧嘩できる相手が居て和む
追い越されなお信頼にある絆

橋ひとつわたれば港の灯がゆれる
晴れた日の橋　晴れた日の音がする
終止符をうつ段階に橋がある
橋のゆれふるさとのゆれつたえてき
橋一つふるさとというあかし

正本水客

長講の法話へ忍びよる睡魔
胃袋の疲れ出番が多すぎる
美しく老いるつもりの背が曲がり
職退いてまだ幻覚のある名刺
おムツ洗った経験のない母性愛

恒松叮紅

仏飯も外国産という悲哀
清貧と言えば貧乏聞こえよい
人生の黄昏きょうも夕茜
大笑いすると頭は空になり
昔から右も左も無い軍手

工藤甲吉

大寒にひび霜やけも知らぬ幸
衆目を節穴にして検査役
癌宣告何よ悲しき結末よ
立志伝どれも汚職に関らず
新築を買い病棟をきたながり

大矢十郎

祝盃はむらさきの彩春の詩
初出勤きびしい春が始動する
健康で貧乏性まで似る親子
平成不況　我慢へ政治は遅々として
三つ重ねよろこび事が貯めてある

藤井明朗

ソロバン玉一つ大阪弁でまけてくれ
一病を持つ者同士へ揺れる萩
広辞林　絆の文字を確かめる
郵便受　賀状以来は何も来ず
散ってなお真っ赤に燃える寒椿

松川杜的

子育てが済んであなたの妻になる
大空があるふるさとに墓を買う
人形とおみかん食べています冬
子を叱る娘わたしの顔になる
嘱託の大正と書くひとりぼち

遠山可住

想い出は捨てたくもあり捨てられず
もみくちゃになって出て来る過去のあり
野心ある人うらやましいなと思う
そこまでの歩幅の伸びぬもどかしさ
いじらしく芽吹く野草の根来坂

児島与呂志

天皇へ脱いで日本の帽子です
手を洗う失うもののないように
泥沼に空の深さを教えられ
嚙み合うて太郎と花子おめでたい
はまり込んだなあと浅瀬が呼んでくれ

水粉千翁

ご近所の土産ばかりと言う荷物
すうどんを食べて飛び出す事件記者
他人ならとっくに別れている喧嘩
捨て犬と一緒に帰って来た散歩
オーバーのボタンをかけてないおしゃれ

辻白渓子

愛犬の視線と合ったつまみ食い
飼主の恋へ愛犬食いはぐれ
盲導犬主人の歩幅に合わす脚
子沢山それに犬まで拾うて来
無駄かも知れぬ尻尾をふってみる

有働芳仙

花道は春三月の花盛り
情滲む声に心を揺さぶられ
声出ない時の親父の目が怖い
自己顕示強い司会でちょんぼする
逃亡記今は楽しいことばかり

野村太茂津

点滴のしずくしずくへ祈り込め
点滴へ無言の行をする如く
病院の三食もりもり舌鼓
退院よろこび孫らに取巻かれ
八十八本目の年輪しかと書き加え

本田恵二朗

はなしの落ちを難聴は聞きもらし
あほらしいように借家を修理する
米不作でも空腹につながらず
ストレスは主人がいつも家に居る
チャンネルを取り合うこともない孤独

金井文秋

もう少し年金貰わねば逝けず
友急死　賀状一枚無駄になる
し残したことが多い年の暮れ
寒に入り鼻水しきりに湧いてくる
ちゃん付けで呼ぶ還暦の友が居る

野田素身郎

草も木もまた花の咲く春が来る
思い出を見上げる空の星の数
万作も春さきがけの色を見せ
春うらら雪を故郷の山に見る
梅香る孫も大学合格す

藤村〆女

戦争をするなと余命たまわりぬ
贅沢は敵だと今の世を生きる
世の中の風に合わない鬼のつの
森の樹のいっぽん森を変えられず
向うからこちらへ来れぬ向う岸

高杉鬼遊

いっぺんは戻って見ぬと気が済まず
反故にした紙にもあったある主張
いきいきと犬に先導させる土手
東から西から見えてする握手（八百号記念大会）
うろちょろとしてる自分を叱りつけ（同）

黒川紫香

ぼんやりと雲を見ている行き詰まり
他人の立場でスリッパが置いてある
もう何処へも行かないから老母よ
友達はともだち爽やかに手を振って
うかうかと十日も経っている日記

小出智子

角帽が青田と山を食って卒え
休日が雨で親馬鹿胸を撫で
吊皮へ停年ぶら下がり
道しるべに家畜授精の家あって
お隣と分けて植えてる茄子の苗

植村客遊子

川柳塔（追加）

カラクリの裏がゆっくり見えて来る　鳥取市　前田一枝
埋れ火を燃やす男に会っていた
夢ばかり食って浮世を生きて行く　和歌山県　西口忠雄
米櫃に字を書く姑はまだ元気
まだかいな　まあだだよ　てなことらしい
制服に父の時計は叱咤する　岸和田市　藪野けい子
整理して一円ごろごろ出る机
袴丈一寸引いた七五三
相談へ私も意見持っている

水煙抄（追加）

紅ひいた口もと少し若く見え　出雲市　中村トク子
白菜は冬美人です鍋料理　東大阪市　今岡真人
年改まり日記を糧に人生を
辞書にない言葉が一人歩きする　香川県　田中なみ子

◆ジュニアの部

美容食食べても無駄なオバタリアン
春が来て窓辺でうとうとおばあちゃん

秀句鑑賞

同人吟　西出楓楽
—2月号から

川柳塔「あおもり」（現在「みちのく」と改名）五周年大会に、はるばる弘前まで出掛けたのは、もう一昨年十月のことになる。

折から、たわわの林檎、たけなわの紅葉と共に忘れられないのは、句会終了後の宴会であった。これはただの宴会でなく、〝温泉に一泊して川柳を語り合う会〟なのである。

会では、アルコールに背を押されても、情熱に燃えた北の柳人たちの話に、耳を傾けるのがほとんどであった。その中で「ハッ」と目を覚まされたことがある。それは、尊敬する柳人の句を筆写していると聞いた時である。この方法も、多読多作同様に上達法だと昔から言われている。にもかかわらず当時私は、句会や投句のためだけの作句をしていたと気付き、「筆写」という謙虚な勉強を忘れていたのを恥ずかしく思ったことだった。

その後も、暇がないことを自分への言い訳に過ごしている。秀句鑑賞の機会を与えられ、沢山の句を写して、自分の勉強も兼ねさせてもらいながら、好きな十五句を選んだ。

分け入って山が見えなくなってきた

林　荒介

例えば〝川柳山〟に分け入ったとしておこう。籠をうろうろしている頃は、無責任に人の句に感心したり、批評したりして、生意気に山の姿が見える気がした。けれど、だんだん登り勾配がきつくなり、ふとまわりを見ると、細くなってきた道は、ところにより消えている。その頃、周囲は大木になり、山の姿の見えぬまま、一歩ずつ進むしかない。

〝山〟は、どの世界にも通じると思うが、私にはこんな風景が心に浮かび、共感を得た。

蛍光灯かえて欄間を眺めてる

堀江芳子

なにげない日常生活のスケッチだが、強い印象を受けた。誰もが日々の暮しの中で、そう感激や驚きを得られ、それを句に出来るものではないだろう。ましてや、家庭が生活の舞台である主婦はなおのこと。単に蛍光灯をかえ、欄間を眺めるだけで句に仕立てることができる、作者の感性がうらやましい。

一枚の賀状と重い話する

吉岡美房

「重い話」の使い方にウーンと唸らされた。このことばでドラマがひろがり、賀状の相手を気遣う作者の人柄まではっきり見えてくる。十七字でこれほどの奥行きが表現できることこそ、川柳の醍醐味にほかならない。

義歯はずす武装解除をするように

田中正坊

〝するように（…のような）〟の言いまわしは、たいていの場合、安っぽくなりがちである。その分、このようにピタリとはまった時は、効果が倍も三倍も大きくなる。義歯と武装解除のとり合わせの意外性がおかしく、思わずアハハと笑ってしまった。一見、謹厳実直に見える作者の、内に秘めたユーモア精神は、川柳人の面目躍如たるものだろう。

月光を浴びていつしか似非詩人

奥田みつ子

川柳だけでなく、文芸一般に言えることだが、作者自身が酔った作品は、読み手の共感を得るどころか、反感を買う場合がある。つねに少し醒めて、自分から一歩離れた位置で作句したいものである。「似非」という一言が、ほどよい醒め方と位置を表わしていて、すんなり読み手の心に入る。

優しいネ只それだけの人なのね

尼　れいじ

今どきの若い女性は「優しくなければ男でない」と極言するとか。それもその優しさは自分にだけ向けられなければならない。間違っても母親に向けると「冬彦さん」と言われ総スカンを食うことになる。それなら、優しければそれでいいかと言うと、中味が伴わないと〝只それだけの人なのね〟と軽くいなされる。現代女性気質が、会話調で実にうまく表現されている。欲を言えば只をただとした方が、ピッタリくるのでは…。

春のことばかり思うて冬を越す

吉岡　きみえ

この句を読んで一つ賢くなった。不況の底に、日本中が落ち込んでいることを含め、つらい事は、このようにして乗越えればいいと…。教訓が前面に出ないのは、作者が厳しい山陰の冬を何度も克服してきたせいだろう。

破り捨てるほどの手紙はもう来ない

松本　文子

相手を変えるためには、まず自分が変わらねばならない—作者の解脱の境地が伝わる。

手紙破ることにして二階から降りる

田中　薫

前の句と正反対の、この人間味も捨て難い。

誕生日嫁が覚えてくれていた

小林　妻子

作者と全く面識のない人でも、句から、上手に年を重ねた好々爺のイメージが、無理なく湧いてくることだろう。誕生日を覚えてくれていたのが、妻や娘であればこの句の価値は全くない。作者のこれまでの生きざまで見えてくるような気がする。

蔦が太くなりすぎているわたしの樹

川上　より子

係累や社会の中で、がんじがらめにされている—絆とは、時としてこのように感じられるのを否めない。けれど裏を返してみれば、頼られているよろこびがあり、蔦が身を覆って〝わたしの樹〟をかばってくれる。

表現が少し理屈に傾くきらいがあるが、しみじみ身につまされる。

何もかも許せば俺が消えそうだ

美田　旋風

物事を丸く納めるためには、妥協をさせられることがしばしばある。家や会社の大黒柱としての、筋を通さねばならない場面で、揺れ動く男心の叫びが、〝俺が消えそうだ〟で如実に出ている。自分が消えないために、縄のれんやカラオケもいいが、このように〝川柳をよむ〟という手もある。

書き終える自信はないが日記買う

島崎　冨士子

この句に出会ったとき、ほっと肩の力が抜ける気がした。はじめから気負って日記を買って来れば、続けられないと、挫折感から自信喪失につながるのだと気がついた。この作者のように、日記だけでなく何事にも、自然体を心掛けたいものだ。

あげるものなくてやさしくしてあげる

山本　希久子

句に、より深い味わいが出るのは、読み上げて耳からの場合と、活字による目からの場合がある。この句は明らかに後者で、ひらかなが訴えようとする内容とピッタリ合っていて、心にくいまでの効果を上げている。山村暮鳥の「いちめんのなのはな」の詩を彷彿とさせる。愛情のこもった丁寧な句作りがうれしくて、読む者の心の芯にまで、暖かさが伝わってくる。

仏の花買うて自分をなぐさめる

西口　いわお

句から察すると、作者は死後の世界の否定論者であろう。さりとて先祖をおろそかにせず、自分の心のよりどころとして花を供える。あるいは、人間の弱さがそうさせるのかも知れないが、女らしい心根にうたれた。

川柳太平記（190）

川柳の群像

伊木鶯生

東野大八

「小田夢路氏を偲ぶ其筵会の一人の方から〝眼をとじているとありあり父がいる〟の句が、夢路さんの墓に刻んである由だが、それを確かめてほしい、との依頼があった。

老妻のながい入院療養などで、それがのびのびになっていたので、一日杖を猫屋町の清源山教伝寺へ向けたのである。

当寺の十六世成美師は生憎不在、親切な堂守さんからいろいろお話を伺った。

昨年私の書いた短文の中の誤りを、まず謹んで訂正しなければならない。小田氏の墓は戦後建立したもののように書いたが、実は風律翁の墓ともども原爆炸裂当時、本堂の陰に在って直撃を免れ、その後倒壊した本堂や、庫裡の火災には、風上だったために、これにも損傷がなかった由である。人も物も一切壊滅した爆心五百米以内のこととて、真に奇跡であろう。仏石の裏面の、眼をとじて…の句もはっきりと読みとれた（以下略、『ふあうすと』旧刊〝再び夢路さんのこと〟伊木鶯生）」

以上の稿は、昭和60年7月刊の『川柳人小田夢路』にも再録されているが、鶯生夫妻も被爆者である。生家も灰燼に帰し、窮亡のどん底に陥った身で、よくぞ夢路の墓を気づかったという、その謹直誠実な人となりは、まことに感銘深い。

鶯生、本名益田与一。明治34年12月22日広島市生れ。伊木鶯生の柳号は〝意気旺盛〟をもじったもの。

「鶯生さんは、己斐小学校の卒業生で、同校の校歌はこの人の作詞であるという。若い頃、教員志望で独学ながら小学校本科正教員の資格を取得された。昭和3年から同19年まで広島市役所に勤め、福祉関係の仕事に従事する。大正5年頃、松呂宗匠について俳句入門。この頃、伊藤鴛城氏について漢詩に入門、麦癖の号を師から命名さる。

大正末期の27歳頃、広島の生んだ新興川柳の雄、古屋夢村指導の川柳句会に出席。

どうかこの影を出させてくれという

の句会入選作が、昭和2年発行の〝影像句集〟に残されている。（中略）

広島川柳会に入会されたのは、昭和28年51歳の時であった。椙元紋太氏の川柳に共鳴して、昭和35年『ふあうすと』同人となり、県下の同誌同人会の結成に尽力され、昭和42年に私（石原伯峯）を、広島川柳会の会長にすいせんされ、自らは相談役となり、今日まで協力して頂いた」（『川柳ひろしま』石原伯峯悼文要約）。

平成5年3月16日老衰のため死去。享年91。法名秀学院釈与楽。

「宇宙無限ならばレンズ磨きます　鶯生

この作品は、前年夏石原伯峯句碑建立記念大会の兼題『無限』の軸吟である（これが遺作となった）。白内障手術で、再び与えられた視力と向学心の意がこめられた自信作である。漢詩人でありながら、決して硬質な作品を指

向しなかった一徹さを持ちながら、難解作品にも理解を示し続けた、個性ある得難き伝統作家であった。

他方、漢詩界においては、山陽吟社の重鎮として講師をつとめ、明快で懇切丁寧な指導には定評があった。各界での人脈交遊も広く、かの日本画壇の長老奥田元宋画伯（文化勲章受章者）も門を叩かれた一人であり、その作品は、新聞・画報等の頁を飾っている。

著書に漢詩集『禹城詠章』『続禹城詠章』評伝は『川柳人小田夢路』等があり、中でも圧巻は、米寿記念にと昭和63年に発刊された『芸備歴史散歩』で、五三〇余頁に及ぶ〝頼山陽遺響〟を軸とした大作は、白内障による不自由を拡大鏡を頼っての労作であり、各方面からの絶賛を浴び、翌年、権威ある〝頼山陽記念文化賞〟の受賞の栄に浴している」（『ふあうすと』角本華峰悼文）。

「今は小学生になられた鶯生さんの曽孫である俊ちゃんは、三歳の頃から『べんきょうのおじいちゃん』と呼んでいられたという。何時でも机に向って、読んだり、書いたりしている姿しか見ないからだ。けだし適評である。広島市内小河内町のお宅の二階はすべて書棚である。日本・中国両文学の研究を生涯の仕事としての独学であり、万巻の書籍がそれを物語る。（中略）

鶯生さんは、10年ほど前に広島大医学部の白菊会員となり、献体の手続きをしておられた。なお遺言により葬儀・告別式は行わず、香典・供花などは辞退するよう指示されていた」（石原伯峯悼文）

「憶えば鶯生さんが、昭和35年にふ社同人となられて以来のながい御厚情の一コマ、一コマが脳裡をよぎり、万感胸に迫るのを覚えます。なかんずく、〝ふあうすと広島グループ〟の誕生は、鶯生さんの人徳によるものなくしては、為し得なかったと思います。

昭和47年6月号の明鏡府鑑賞に、鶯生居に九名参集したのがグループらしい初めての会合でした。

以来、事ある毎に集合の場を提供頂いたのも鶯生居でした。やがてこれが研修会に発展、昭和57年『鏡心集』第一号の発行を見るに到ったが、ここでも、その表紙作製の労をとって頂いたのも鶯生さんであった。

命名された誌名の裏書には、

『鏡心は鏡のように澄んだ心の集いですが、ふ誌明鏡府に思いを寄せて、川柳を研さんするものの集いの意から鏡をとりました。（中略）鏡は漢音ケイで、呉音キョウが専ら用いられていますが、漢詩の韻書の方では、敬の部に入っています。鏡シンシュウと読めばよろしいでしょう』と漢詩人らしい注釈がなされている。一語一字を大切にされた鶯生さん点けて頂いた鏡心集の灯は決して絶やしはしません」（角本華峰悼文）。

筆者の手許に布張美本四百頁を越す『続芸備歴史散歩・益田与一』が贈られてきた。これは広島県警本部の機関誌『いずみ』の川柳選者として、昭和38年以来貢献した鶯生の、同誌上に連載した、地元広島の歴史上の人物随筆の総集篇の続篇である。

この中の第三章が古屋夢村篇である。

「広島は奇しくも夢の字のつく川柳家二人を生んだ。その一人は小田夢路であり、もう一人は新興川柳誌『影像』の主宰古屋夢村である」との書き出しで始まるこの評伝は『川柳ひろしま』誌上に昭和62年1月号から12月号まで連載され、好評を博したもの。その結び。

「川柳は時代と共に変わる、変わるべきである。夢村氏逝きて四十余年、現代の川柳界は百花繚乱。百鬼昼行——人間と世相への深い省悟、詠歎の句はどれほどであろう。未完のまま混乱の世に殉じた夢村氏……」。

▼次号は「**八木摩天郎**」

柳籠裏三篇研究（二十〜二十一丁）

岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人
八木敬一・七久保博
鈴木倉之助　故岡田　甫

343　**正札は二分諸入用しれず**　和笛

岩田＝揚代二分は「部屋持」「座敷持」であるが、揚げると言っても二分だけで納まるわけではなく、遣り手へのチップ、たいこ持、やれ芸者、飲食代、床花など締めてみると、その費用はどれほどになるやら、こっちがお聞きしたいもの…。

岡田＝この句は「附け廻し」の句。附け廻しは未来の太夫級の金の卵。それで妓楼では大事にし、二分と称しながら三分の女郎並に金をとったらしい。

344　**いゝくらし車一輌もって居る**　狸声

岩田＝車長持であろうか。長持に車をつけて移動できるようにしたものだが、明暦の大火の際、却って逃げまどう者の混乱をまねいたので、禁止されたが、地方には残っていた。

田舎嫁車長持はなにかけ　一〇42

江戸みやげ車長持などへはり　六11

車長持を持つものは、やはり地方ではいいくらしの部類に入る。

佐藤＝この車は、銭車のことではないか。両替屋は皆裕福である。

八木＝私も銭車と思っていました。

七久保＝礎稿賛。車長持説をとりたい。

鈴木＝同。

岡田＝車長持とも、銭車とも解せられる。

345　**さり状を三とせはこゝに松が岡**　住の江

岩田＝謡曲「松風」の文句取り。「行平の中納言三年はここに須磨の浦」。

東慶寺、駆け込み寺は、三年居れば離縁状が取れる。主題句は、その三行半を三年間東慶寺で待っているという句である。「待つ」に「松が岡」とかけて続けた。

再縁を三とせはここに松ケ岡　安八義4

三とせはここに松風と松ケ岡　六六9

立別れ三年ハ爰に松が岡　一〇六5

鈴木・岡田＝賛。

346　**奥嶋を来て通へども〳〵**　蜃江

岩田＝「奥嶋」は「奥縞」に同じ。『俚言集覧』に「渡りの桟留縞の木綿織也〔産業袋〕に赤糸入の立しまを俗に奥嶋といへり」とある。紺地に茶の縦縞のある綿織物である。

句意は不明瞭だが、「伊達陸奥守綱宗」ではなかろうか。「陸奥」に「奥」をきかした。何度通っても高尾に振られたというのであろう。

西原＝賛。高尾が、

文字ずりハいやでざんすと嶋を着る　四六7

だから綱宗も奥嶋を着たのかもしれない。

佐藤＝礎稿に賛。

しのぶずり召し傾城にみたれそめ　二六2

岡田＝伊達侯を表現するため「奥縞」などを使用しただけ。

347　**ほそ長イ水へきなこをかけて売り**　五楽

岩田＝心太であろう。

ところてんきなこさとうハ嫁のぶん　明元義5

の句もあり、好みに応じて、きなこや砂糖をかけて食べることもあったらしい。

鈴木＝賛。

心太ひょろひょろひょろとかしこまり　五六13

岡田＝賛。

348　**梅若で口のすくなる程すゝめ**　花菱

岩田＝これも度々でた木母寺梅若忌から吉原行き。「口が酸くなる」は今も言うが、同じ言葉を幾度も繰返すこと。「梅」・「酸」の縁語仕立。

口をすくさせて梅若から別れ　傍三43

鈴木＝賛。

岡田＝同。くだらぬ句。

二十二丁

349　**北朝室町南朝尾張町**　一口

紀内＝江戸の雛市は室町十軒店、尾張町が二大繁盛の地であった。

地理的に十軒店が北、尾張町が南にあるので、それを北朝・南朝に見立てた句。しかも北朝は事実京都室町に御所があった。

雛市は雛の装束から度々御所に見立てられる。

むろ町の御所ハもも咲頃に出来　二二ス4

四五日ハ尾張の御所のにぎやかさ　筥一8

岡田＝賛。

250　**早朝にかゆを六升弐合たき**　雨譚

紀内＝元禄十五年十二月十五日早朝、赤穂義士が上野介の首をとり、泉岳寺へ引き上げていく途中、芝の伊達屋敷で呼びとめられ、粥をふるまわれたという話がある。

ほまれさは芝の玄関でかゆを食ひ　天四天2

句は、四十七人もの義士にふるまうには、さぞ多くの粥をたいたであろうという意。六升二合は伊達六十二万石の暗示である。

鈴木＝賛。講談種か。

岡田＝賛。

251　**それつきりさいかちの木へ凧が落**　間々

紀内＝皂莢の木には多数の刺があるので、凧が落ちると、取りに行くこともできず、といって棒などで取ろうとすると凧がこわれるので万事休す。あきらめる他はないということか。

佐藤＝皂莢の木は高木で、丈が高いばかりでなく、礎稿でいうように刺がある。それで木登りして凧をはずすこともできず、あきらめるより外にないのであろう。

鈴木・岡田＝賛。

川柳塔社常任理事会（2月1日）

▽八〇〇号記念川柳大会の反省点を出し合って今後の改善策について協議。

▽同大会の1月末現在の収支概況を報告。

▽『旅人・福寿草』普及のための措置決定。

▽誌友の新規申込み増加について報告。

▽古希記念合同句集の参加を推進するため、関係各句会に要請状を送ることを決定。

同人特集

女百句

平成三年～平成五年
同人吟から　**編集部**

人前はあんな女と言っておき　麻生路郎
女の子揃えの柄が気に入らず　麻生葭乃

屋根を守り抜くのは女かもしれぬ　八木千代
ぬか床の底は女の痛み知る　西出楓楽
鈴の音させて女の京訛り　児島与呂志
美しい少女に育つ雪の家　波多野五楽庵
花に嵐　女に嵐だってある　宮西弥生
桃咲いて桃より桃の女の子　春城年代
一葉忌　今更ながら女とは　桝本露児
浴衣から女おんながこぼれるよ　都倉求芽
いつの間に女になった女の子　新家完司
どうしてくれるのよと女の強おもて　矢野佳雲
クラス会美女も才女もただの主婦　岸野あやめ

船着場　故郷へ戻る女と逢う　黒川紫香
一着の毛皮　女の冬満たす　田中紀美代
しつこいほどに女を生きる仮の世で　小谷美ッ千
春ですね女が太い足を出し　宮口笛生
女はもう千人針などさしはせぬ　石倉芙佐子
女坂　ふり向くことの多かりし　岩本笑子
火の絵　風の絵　抜けた女の束ね髪　野村京子
おんなごころを秋へ調律しておこう　西山幸
女ですほんのり香る位置でいい　西原艶子
草笛を吹いて母とは女とは　土橋螢
女百態　母の演技はむつかしい　政岡日枝子

いわしの浜に立つと女は若返る　正本水客
しあわせの桜はらはら女文字　福井桂香
サバサバと女を捨てた通り雨　津守柳伸
逞しい女にさせた不幸せ　井上柳五郎
しあわせな女がかける長電話　遠山可住
女が打つと女の音で鳴る太鼓　柳楽鶴丸
夫と会うひととき魔女になりきろう　田中亜弥
ひそと咲く野菊おまえも古い女　内田結実
乙女心を皿にきちんと盛っている　土橋はるお
流れ着いて女は深く根を下ろす　秋元てる
悪女では困るが貞女肩が凝る　椎江清芳
女から男らしさを教えられ　上田俊路
人にほれ人に捨てられ女生き　高橋千万子
コスモスも女も強し風の中　西口いわゑ
お嬢さんと呼べばみんなが振り向いた　江口　度
縦糸の強さを女知っている　田口虹汀
フィクションの好きな女の孤独癖　福本英子
分岐点から女の胸に雪が降る　松原寿子
女独り誰がために炊く実山椒　大塚節子
一生のお願い連発する女　崎山美子

戻り橋　女はすっと鬼になる　安藤寿美子
女です　女ですもの一人ゆく　吉村一風
欠点は美人すぎるという女　三宅保州
妻であり母で女でななかまど　片上英一
読み終えて元の女に戻れない　吉田あずき
女ですあなた次第で変ります　赤川菊野
結び目をまたも確かめたい女　山本希久子
愛実るまでは女のしおらしさ　黒田くに子
女三人凄い話になってくる　上田柳影
六十から女に生きる差がうまれ　片岡智恵子
嫁姑しょせん女対女　町田達子
夕焼けを背負うおんなの二十五時　林　瑞枝
橋渡るたびに女が強くなる　川崎秋女
ひと吹きでおこる火種を持つ女　青枝鉄治
女人とや椿を踏んだまた踏んだ　三宅不朽
紙を折る女の指が人を恋い　林野甦光
嘘秘めた女のうなじ白すぎる　加藤彩人
武器のない女に一つある涙　細木歳栄
百歳になっても女花が咲く　滝北博史
罪深い女へ揺れる縄梯子　安平次弘道

何もでけへん人やと女うれしそう　玉置　重人
レディーファースト女は先に嘘をつく　一瀬　福一
鬼灯をかんで少女は恋をする　板尾　岳人
子らみんな巣立ち女をとりもどす　北山　好笑
翔ぶちから蓄めて女は時を待つ　山海　友熙
女三人そっと古疵ふれたがり　細川　稚代
三歳でおんなのことばしたたかな　井上　森生
曼珠沙華の嫌いな女好きなおんな　江原　とみお
ピンチには強いおんなの細い腕　嘉数　兆代賀
女偏　波をかぶって生きている　佐治　千加子
ローランサン少女は恋を知りそめし　辻川　慶子
男ひとり女もひとり北の風　牛尾　緑良
男に夢　女に愛がある限り　田中　正坊
泥水に生きる女のうすい眉　山田　高夫
巣作りの下手な女が翔んでいる　阿部　進
母の顔女にかわる時間帯　池内　かおり
だから今　女が強くならないと　西川　和子
まちごうて出てきたような女の子　川崎　ひかり
六十の女盛りがよく遊ぶ　田村　きみ子

女が女賞める言葉に刺を持つ　藤村　〆女
ジーパンに女盛りを閉じ込める　相馬　一花
能弁に勝る女の黙秘権　井上　白峰
頂上へいつか老女も辿り着く　吉田　笑女
賞味期限切れて女が浮いている　幸家　単車
あなた次第です聖女にも魔女にでも　宮口　克子
阿弥陀堂　女の靴が脱いである　田中　薫
女の野心　白いお皿に盛り上げる　澤田　千春
苛めても泣かぬ女で物足らず　松本　文子
恋をする女に弱い句読点　田中　輝子
薄幸の話が好きな女です　荻野　鮫虎狼
ためらい傷なめて女になる私　新　正子
ぐち多い女斬ってもすかしても　渡部　さと美
女みな耐えて通した針のメド　永田　俊子
中将湯　母はおんなでありしよな　木本　朱夏
おろおろと貞女のままで黄昏れる　久保　正敏
袋物好きな女で病気がち　奥田　みつ子
小説の女恋しや江戸恋し　故谷垣　史好
女とは思ってくれていないらし　小出　智子

黒川紫香選

テネシーワルツ君と踊った夢の中
花屋さんの横にタンポポ咲いている
赦すほどわたし強くはありません
眼の前のあなたは遠い遠い人
エンドマークを凍った窓に書いてみる

香川県　蔦沢翠

好きですと私に言わす丸い月
軍歌ばかり唄う男は泣き上戸
猟銃のある奥の間で待たされる
艶っぽい噂の絶えぬ楽隠居
のど飴が溶けると一服したくなる

尼崎市　田辺鹿太

先生と呼ばれその気になっている
幸せな家をつばめが知っている
人肌にうえた与作のサロンパス
肌の合うライバルだから憎めない
偶然でないと知ってる花時計

今治市　渡辺南奉

葉牡丹の渦に溜っている冬陽
二次会の方へ木枯し背中押す
喪中につき手持ち無沙汰の三ヶ日
血統書うっかり恋も出来ぬ犬
臙脂梅が月のしずくの香を放つ

摂津市　木下道子

春雨が春の音符を奏でます
三月の風です蝶も誘います
紅絹裏のなさけよ昭和史をおもう
野の草の魅力を見落してないか
まゆつばはそんじょそこらにない話

名古屋市　藤井高子

小川さらさら早春の風乗せてくる
早春の旅ローカル線がよく似合う
女蝶ひらひら春の予感へ香を放つ
電話口欠伸聞かれていたらしい
裏表なく無器用を丸出しに

広島市　流奈美子

富山県　高畠五月

木枯しや葱も淋しく肩落す
暖冬をロダンもやはり考える
喪の家の庭に一輪寒椿
つり橋の向うに母の味が待つ
六法が棚でほこりをおうて幸

富山市　島ひかる

川柳の師の師へ仰ぐ雲の峰
火吹き竹亡姑の仕草で火をおこす
雪しんしん亡母の小袖のものがたり
里帰り靴きっちりと脱ぐ娘
ブランコを揺すると自信湧いてくる

宝塚市　永田暁風

不倫かも知れぬめしべへ風が来る
歯磨きが確実に減ってゆくいのち
まぼろしの袖をつかんで母恋いの
流氷の軋みを愛の中に聞く
戦時下にピアノで慰められた秘話

熊本県　大川幸子

温めています胸の底の秘話
見様見まねで知恵を積み重ね
溜息の季節があります私にも
ダイヤルを回せば貴方がそこにいる
身ごもるようにふくらむ梅の花

尼崎市　児玉歌子

仏壇を開くどうにもならない日
望みない返事が眼鏡越しにある
子を思う母で傍聴席にいる
とんとんと話が弾む春の酒
賃搗きの餅を頼んで母が病む

熊本市　宇野照代

独身貴族親の期待に無頓着
農道の舗装悲しいつくしの子
気休めに来た検診に引っかかり
笹舟を流すと光る春小川
入学 卒業 年金ごっそり持ってかれ

大阪市　勢理客トミ子

家事ちょっとなまけ冬日に丸くなる
視界からゆらゆら消えた奴凧
三分粥生きる力が湧いてくる
冬空へゴミ焼く煙白く立つ
暖冬に犬も待ってる雪こんこ

藤井寺市　高田美代子

私の歩幅を靴は知っている
現役の主婦でエプロンはずせない
昭和一桁デコボコ道に慣れている
花屋から花が届いた誕生日
パーマ屋のこぼれ話がおもしろい

兵庫県　森脇和子

電話口誰かいるのかそっけない
カラオケのうまい住職受けがよい
あきらめて本音呑み込む長い夜
不器用で騙されたまま冬に入る
傷心の友誘い出すバスツアー

高槻市　守先伸子

道問えば誰もがやさし遍路みち
五十路の訃まだ燃えている冬のばら
あと十年生きてるだろうか十年日記
切手シート当った程度で恙なし
気がつけば向かいも隣も老いふたり

尼崎市　森安夢之助

砂浜に涙の跡が残ってる
常連の雀が遊ぶ狭い庭
妻の灯がとっても温い旅疲れ
つまずいた昨日の石を忘れてた
もう一つの顔でお金を借りにゆく

久留米市　鶴久百万両

千日回峰　開祖の声が背なにする
七十五日までは眠れる獅子になる
ゼット旗をあげて弥生のいくさする
保育器の中まで積み木積まされる
極楽で会える日もあろ花へんろ

静岡市　沢田きん

やさしさが春風みたいに身を包み
親しさの距離遠からず近からず
スカーフの工夫で気分変えてみる
好きですと書いたむかしが懐かしい

尼崎市　的場十四郎

燃えつきて島の椿は散り果てる
直感のイエスで後悔ばかりする
かたときも母は忘れぬドラ息子
愚痴一つ壁に埋めて気が和む

尼崎市　長浜澄子

許そうかテネシーワルツ聞きながら
流された噂　男の顔を消す
風の子はいないブランコ揺れている
触れないでおこう私と同じ傷

尼崎市　野瀬昌子

散る音のはげし寒さがなお沁みる
積んどくの本が私をあざ笑う
母と子の歩幅ちぐはぐ散歩道
日めくりをめくって今朝はもう七日

米子市　足立由美子

似顔絵がぐっときれいに描いてある
母の椅子　北の窓辺に置いてある
冬眠からさめ蝶々と旅に出る
リラックスできる眼鏡が家にある

熊本県　岩切康子

菜の花が日本列島上り出す
木の霊のなんて言うから木が切れぬ
アキレス腱ちょこちょこ突いていじめる気
豪邸拝見　寒い部屋の多いこと

西宮市　牧渕富喜子

切り換えが上手で背筋伸びている
時計持たぬ姑の見事な時間割
枯葉みな落し臘梅ひそやかに
故郷の識らない町を尋ねられ

尼崎市　尾宮弘治

飽食の犬が居眠りして困る
ゴム長で妻が見送る無人駅
弁当に妻の温もり二度の職
年末の冷えにささやか募金箱

和歌山県　杉山精子

大根を引き抜く老母は逞しい
一息に語りつくせぬ遍路秘話
海鳴りへ眠れぬままの日本海
いたずらの始末を聴いている拳

和歌山県　藤井春子

一億の中で探した青い鳥
ひと目惚れそれから時計狂い出す
勉強の出来る子供と距離が出来
朝市の空気がうまい人間味

羽曳野市　芦田絢子

亡父の日の寒さはいまも語りぐさ
小春日にデート気分の花手桶
しまい風呂一人相撲の夜が更ける
お寺から来たカレンダーがけむったい

東京都　山口新子

おしゃべりな男が無言で言う別れ
別れにも余波があるのかテトラポット
父さんの賀状印刷文字がある
キャベツ畑に大根の花貞淑に

旭川市　朝倉大柏

不器用に真っ直ぐ生きて悔いがない
負けている方の応援勝っている
悪い奴ばかりいるよなニュース聞く
曲り角どう曲っても向い風

河内長野市　大西文次

図書館へ行って欠伸をして帰る
筆ペンを持てば眠たくなる机
易の灯が揺れる女将の男運
裏門はいつでも空けて待っている

今治市　塩路よしみ

転校の子を取り巻いて過疎の村
声上げて泣いて見ようか無人駅
ブラックコーヒー好きな女のペン走る
仲直りするにはしこりまだ残り

今年またスタートラインに屹度立つ
寡婦二人亡夫の自慢で夜が更ける
脱皮して若返りたい靴をはく
泣き上戸借りたい胸が一つある

今治市　白石サダ子

実印を押せば重たくなる書類
かけ違いのボタンで終るああ夫婦
掘ればみなつながっているゼネ汚職
炬燵消すと猫もしぶしぶ外に出る

今治市　越智青園

少しずつ赤色の服ひかえてる
淋しいと言ってはおれぬ意地がある
つまずいて方向転換それもよし
雪埋める野草は春をたくわえて

西宮市　山本義子

二次会を抜けて送ってくれた人
電池入れ替えにふるさとの時計屋
やわらかい拍手で孫が立ち上がる
もう少し登ると船の見える坂

西宮市　亀岡哲子

一方へ擦り減る靴よ人恋し
時を追う女の膝が萎えてゆく
髪切ったくらいで氷雨降り止まず
赤い実に群がる鳥よお前もか

西宮市　岡本道子

歯車が軋みはじめて知る絆
悪い事したのかいやに低姿勢
肩書きも脱いで一緒の湯につかる
新婚を肴に酒がよく回る

香川県　辻上よしみ

大都会空から見ればマッチ箱
初春を少しリッチに空の旅
あちこちに顔を出してる話好き
春の海釣り糸垂れて日が暮れる

香川県　堤くに子

経験のごり押しをする古い風
労られ邪険にされて出る泪
鱈一尾放り込み北の鍋つつき
隣組年寄り順に朝を告げ

酒田市　永澤裕子

春には春の明るい話題持ってゆく
これ以上欲を出したら叱られる
春を待つ花も蕾も私も
世界地図広げる孫の夢の国

鳥取県　土橋睦子

水飲んで平常心を取り戻す
ネクタイをゆるめて仮面ずり落す
追い風に願いが届くシャボン玉
動揺をしかと見ぬいた水鏡

今治市　野村清美

松山市　竹田さやか

目ざましを離れた位置に仕掛けとく
花遍路その訳聞いてみたくなる
安心の歩幅で子犬ついて来る
核心に迫ると強い風当たり

寝屋川市　冨山ルイ子

春の雨芽吹くもの皆芽吹き出す
春風が涙をそっと拭いてくれ
歩こう会　散歩の友に励まされ
偽善者かも知れぬ思惑胸に秘め

和歌山市　山口三千子

子のために渡った橋をまた戻る
どんでん返しまだありそうな夫婦坂
嫌な夢見た日占い欄を視る
落ち葉焚く心の憂さを消すごとく

和歌山市　森茜

にわか雨きそう呼び止められている
やわらかに冬の陽　辛さなど伏せて
満ち足りた人だけ持っている笑顔
日が落ちてからポストまで一目散

和歌山市　古久保和子

一番星見付けて帰りたい故郷
終電車ポロリポロリとこぼす客
犬を飼う話で家族会議する
カレンダー仰山もろうて二ＤＫ

大阪市　亀井円女

行革に御苦労なさるお殿様
初夢の二年つづいた亡母の顔
バブルに喘ぐ二世の苦労を見るつらさ
誰よりも信じてくれる犬と猫

岡山市　中嶋千恵子

刺のある花がこぼした良い話
長短を決めかね迷う花鋏
狛犬に願いを托す落ちこぼれ
成功を信じた母の眼が綺麗

大阪市　三浦千津子

生きる欲あってリハビリ耐えている
口数少ない男の持つ強さ
諦めるために大根スパッと切る
今日も一日幸せな割烹着

静岡市　永倉柳華

好き嫌い明治の話したくなる
新婚の夫婦へ送る姫ダルマ
若夫婦愛を小出しにして平和
そわそわと母の形見の鏡拭く

岡山県　国米きくゑ

青年の樹のてっぺんに青い鳥
窓を出た蝶は絵本に帰らない
熱燗が好きで気の好い冬の鬼
胸に棲む鬼が時々爪をとぐ

年男孫の船出を祈る春　　貝塚市　池田寿美子
登山家のつくる料理は大まかだ
春風や噂話をゴミ箱に
生きていると面倒な事あるばかり　　寝屋川市　土井英明
ついて行くたとえ歩幅がちがっても
支那栗を中華栗とは呼びにくい
二次会を蹴って帰れば家に鍵
お隣は今日もさんまの換気扇　　尼崎市　吉永伊三郎
還暦に漬けた梅酒が古希に利く
玉川に筆を沈めて桜桃忌
一杯の酒に男が口説かれる
七階に住んで六甲今日は　　尼崎市　中澤向西
会う度に成長の跡低い腰
焦らずにせめて年越す独り酒
君が代を腹で歌って背を伸ばす
カラオケが年末不況ぶっ飛ばす　　尼崎市　河津正治
断崖の松が教える逞しさ
育つ子に月日の重み噛みしめる
目の位置を変えて仕事が運びだし
満天の星に胸張る過疎に住む

ボタン押すその責任を考える　　西宮市　菊池トミエ
古本も名残りおしくて捨てられず
山茶花がほろほろこぼれ三回忌
二次会で課長ほんねを打明ける　　松山市　丹下美津子
息子は下戸　婿を相手にお正月
白無垢に鬼火つつんで雪女
パパだって青菜に塩のママの声
落ち葉着てじっと早春待ついのち　　福岡市　井崎ミサ子
疲れても気遣い見せる夫が居る
ないしょ事つくると言葉出なくなり
配達のついでに愚痴も置いてゆき
日本人握手のたびに頭下げ　　高知市　桑名知華子
笑ってる私がピエロに見えて来た
同じキー同じ鈴付け帰宅する
漫才のようにからんでいる夫婦
帰省の子親父の席はあけて座す　　佐賀市　古川かずのり
神に祈るときも仮面はつけたまま
世渡りが下手で素顔をさらけ出す
一途さをたっぷり聞いて乗せられる
大正の心を洗う礼智信

文学を語る顔とは思えない
真ん中に鍋おんな五人の旺盛な
またもとの道に出てきた迷うてる
うまいはず元船長の港唄

大阪市　尾崎黄紅

うすれゆく絆に他人の影よぎる
地に還る掟の中の人生譜
残された余生は未知のままで良し
まだ少し生きねばならぬ父喜寿

大阪市　江城修史

空気のようにあなたがいる幸せ
鬼面ひとつはなさないでいる女
哲学の道で拾ったお守りさん
テーブルに林檎が一つある寒さ

京都市　小林英子

逃げ腰を呼ぶ声少し大き過ぎ
意外性を御馳走にする禅料理
目立たないけれど丈夫な母の糸
言い訳を酒に言わせた日を泳ぐ

今治市　渡邊伊津志

五十代啖呵きったが五十九
しんしんと雪降るむかしがなつかしい
昼食へわたしはパンで孫はピザ
お出かけへ何処へどこかとうるさいね

島根県　菅田かつ子

紅白で初めて知った流行歌
手から水流れるように父弱る
あの父が甘えるような瞳でみつめ

松江市　松浦登志子

汚れから目を背けては暮らせない
笑わせてふっと寂しい顔をする
葉が落ちて公園冬の貌を見せ

静岡市　小木久子

魚の群　同じ顔して誰がボス
明日香路にレンタルなびく冬日和
古里の土をどっさり芋届く

枚方市　前たもつ

おせちよりマクドナルドに孫を連れ
子供らと歓声あげる雪の朝
もっと肩寄せてとポーズとらされる

茨木市　島元ふみ

福寿草　奥床しさをありがとう
長男の嫁さがしなどものがたり
何でもかんでも大きく書いて収納す

兵庫県　倉垣恵美

平凡な暮しでいつも笑い声
石ころに躓こうにも石はない
三人がタクシー降りる賑やかさ

兵庫県　西井つや子

うそ一つ涙も添えて子を叱る
家の中走り抜けたは風らしい
夫と子の竿のズボンが笑わせる

米子市　小塩智加恵

ライバルに闘志を秘めて意気が合い
愚痴一つこぼしみじめな風にあう
粗大ゴミなどともったいない言葉

徳島県　濱田白柳子

やれやれと孫等帰って大掃除
異常なしを不満げに見る診断書
日なたぼこ本読みだすとすぐ眠る

大阪市　中橋恵美子

めでたくも一番風呂で初日みる
雪が舞う津軽じょんがら映える頃
おめでたい元日走る救急車

青森市　諏訪明雄

火の女老母のたよりに泣きくずれ
山里の墓へ火種を埋めてくる
北の島ただ寒々と霧に浮き

尼崎市　湊修水

天辺に立って初心を省みる
人妻に命がけだと言われても
若者が素直に拝む戦友の墓

寝屋川市　北岡波留吉

身勝手に犬にチョッキを着せ散歩
不自由をしなけりゃ便利わからない
好きな物みんな持ちより新年会

静岡市　三浦つね

いい予感今朝の化粧のりがよい
友情を出し合い弾むバスツアー
信じてる貴方に歩幅合わせます

十和田市　阿部喜久江

風見鶏無風に自由見つけたり
坊さんが新車で回向来てくれた
ストレスが溜った顔のコップ酒

唐津市　入江喜久亭

あなたとはコントになれる間柄
ふり向けば元のふたりになれるのに
耳許で捨てる言葉を吐いている

和歌山市　森口恵子

天国はこんな音かな鈴の音
及ばない尺取虫の演技力
肩もんでついでに背中さする妻

島根県　福間博利

始めての習字あちこち墨だらけ
名物の一つは入れる土産もの
針仕事習い覚えて単赴任

熊本市　北川一進

杖持てば座席を譲るひとがいる
ワープロのレター情熱鎮火する
自宅通勤できる距離まで左遷され
熊本市　遠山夏生

おっとりと待った娘に残り福
麗筆の友の賀状が消えた春
グルメより笑いで飲ます名幹事
西宮市　古谷ひろ子

たこあげも羽根つきもないお正月
癌告知　我がことなれば取り乱す
独り部屋聞こえたような花の私語
八尾市　大内朝子

頂上が見えてもなかなか登られず
年金の枠でお花を部屋毎に
風邪引いて思い過しを悔いている
松江市　佐野木みえ

役立たずの嫁で六十七になり
病院のひと所暗い喫煙所
消しゴムのかすの残ったノート閉じ
神戸市　向井泰子

隣の犬流し目で見て背を向ける
大正の不況に生まれ不況には慣れ
旅に出て土産の石を探す癖
寝屋川市　井上すみれ

啓蟄に私もベッドから出たい
家の外パパ独身の顔をする
給料日だけ花を買う新世帯
河内長野市　印藤智子

名も知らぬ山路の草に春を知り
この強さ岩の割れ目に草の青
にっこりと無沙汰が来れば不審がり
羽曳野市　西村りつえ

子の夢をこわさぬ苦労親サンタ
ホノルルのクリスマスパーティー浴衣がけ
元旦はいつもながらの電話番
広島市　元林光子

B面に読みの深さが窺われ
御来光　富士へ祈るは老母の無事
ときめきを映す眼鏡を買いに行く
岡山県　土居ひでの

大学の話はよそう桜散る
お水取りすめば春です奈良の顔
値上がりのハガキへたんと字を埋める
羽曳野市　福田悦子

山や川　子供の昔を思います
馬子にも衣裳　私にも赤いルージュ
春近し私の心もおどります
出雲市　林悦子

香川県　松岡遼雲

円空も出逢いし飛騨の雪女
雪女の瞳がいつもぬれている
雪女恋する時は消えるとき

池田市　木村一笛

酔うほどに愚痴が飛びだす泣き上戸
役得は汚職に歩む一里塚
コメ騒動ラウンド交渉らちあかず

広島市　中村要

留守番の代りテレビをつけて出る
どっちみちかまってくれぬ生返事
川柳塔心のうさの捨てどころ

岡山県　伏見すみれ

寝るだけに戻る万年床の部屋
どの部屋も灯をつけて嬉しい夜
紙のように切って松茸汁に浮く

吹田市　馬渕光子

恐竜の名　舌を噛みそに三歳児
軒先の野良猫とうとう母屋入り
子も猫もわるさ探している目付き

高槻市　江原秀夫

二階から降りればどこも妻の城
ラッシュアワー渦にまぎれて冬帽子
初詣　晴着が邪魔になる二人

和歌山市　榎原公子

手も足も熱く愛の句湧いてくる
薄塩に慣れて野菜が甘くなる
艱難辛苦すべてコントにする月日

新潟県　高野不二

郵便の来ない日があり昼寝する
風邪ひいたらしく病院さえ来ない
育児書は買うてるだけで待つお産

島根県　槻谷仲子

気まぐれの友と背伸びの旅にいる
松江城ライトアップにある旅情
シクラメン愛されているお正月

鳥取県　美浦美代子

吹雪く日も雑草起きて準備する
冬休み妻子をつれてハワイ行き
善きこごと素直に聞けぬ若さです

橿原市　西本保夫

名前でなくおとうさんと呼ぶナース
有難う好きなナースに握手する
ここへまた来てはダメよとナース言う

兵庫県　円増純子

欠点があるから親しみわいてくる
銘柄は飲めない妻が決めている
ゴールまで私を引っぱる影法師

改めて知る風呂敷の重宝さ
遠足は母同伴で得意顔
迷っての土産見事にそっぽされ

尼崎市　向井末貞一

超特価無駄とも知らず買いあさり
素人はこわい本当の事を言う
似たような愚痴を言い合うコップ酒

和歌山市　木村親踏

バアチャンバアチャンそれだけ言えた孫の電話（テレ）
故郷の森抜けて足音軽くする
一人来て鳴り砂を踏む心冬

鳥取県　奥谷彩子

おもちゃ屋で孫は不動の構え持つ
別れたらやさしい便り書く人よ
盆栽を切るよう企業は人斬りし

寝屋川市　宮崎菜月

悟り切り病母は仏の顔になり
生き甲斐に俳句嗜む母でした
寒いのに土に戻した菊が咲き

米子市　服部朗子

手拍子はお義理カラオケまだ続く
鼻毛抜いて失意の夜をひそと居り
六法踏んでさて誰も来ぬ阿呆らしさ

宇部市　中村三良

子も犬も過保護にされている平和
白馬の王子信じ少女は夢捨てぬ
退院の荷へ色褪せた千羽鶴

柏市　上鈴木春枝

暇をみてお経あげるという信心
三ヶ日のほほんとしたつけがくる
晴着きた娘はすっかり借りた猫

枚方市　森本節子

若い気のわたしにカメラ妥協せず
黄昏れて人待ち顔の寒椿
凍る夜無気味なほどの静けさよ

島根県　武島ちよえ

スタートはいっしょだったと一人言
嘘やけど言いつつ本音言うている
焼たてのパンの匂で子を起こす

泉佐野市　河原崎礼子

焼き芋の匂に心和んでる
プランより少し狂った旅終る
宝くじ買ってハワイの夢をみる

出雲市　西尾和子

六道の辻で舞ってる花万朶
分け前は四分六と言う妥協案
友情の輪につながれて旅に出る

岡山県　大石あすなろ

広島県　森川抜智

音声は変えてありますのどに飴
電話では笑っているが寂しかろ（弟の妻逝く）
早寝くせ除夜の鐘まで今日は起き

香川県　田中フミ

嬉しい日鯛が主役の祝い酒
ハウス出て大空見たい春の花
肉よりもちりめんじゃこが好きになり

豊中市　田中道胤

セールスの他に訪ねる人もない
世渡りも上手潰しの効く男
背伸びして少女が覗くアルバイト

吹田市　西岡豊

記名にも相合傘でキープする
嬉しさに足をとられた祝賀酒
消しゴムは鉛筆さんのいい女房

鹿児島県　大山舞烏影

不況風　首にひんやり管理職
雨樋の火山灰でも草は生き
時効だと喜ぶだけの悪となり

岡山県　富坂志重

私の正月お客が去んでから
後味は負け犬だけが知っている
有頂天になり心に鍵がかからない

相生市　中塚礎石

原稿を眼鏡はずして読みなおす
わけありの一言朝まで寝つかせず
やんわりと言葉は攻めるツボを知る

岡山県　牧野秀香

年金を新札にしてお年玉
子三人孫七人の花が咲き
亡友からの賀状三枚減りました

岡山県　杉本伊久栄

古里はいいなとともす心の灯
見る方をハラハラさせる銭太鼓
日記には遺言めいた事も書き

東京都　小寺九

焼餅のふくれ具合に初笑い
天神もその学校は知らんだろう
書き初めは妻にささげる誓約書

藤井寺市　菊地繁男

褌は下着売り場に無いと言う
手の中で次の企画を温める
笑声はゲートボールに弾む老い

羽曳野市　酒井一壺

何か良い知恵はないかと寄って来る
火を付けた人が消してる悪巧み
思い切り蛇口をひねり八つ当り

岡山県　江口有一朗

一日に一度は鏡見て笑う
たくましい夢語り合う成人式
平穏な家庭に突如降る火の粉

兵庫県　北川とみ子

片減りの父の歴史が隅にある
不器用な夫婦で他人の顔をする
お世辞だと知りつつ雑魚も演技する

福岡県　本田忠男

葬儀屋の余計な送辞空を切る
出勤の靴が光を見失う
今日の贅　赤提灯で呑んでいる

姫路市　福島姫女

交番へ届けて見たや夢の金
道で逢う人と会釈のウォーキング
突然死きのう畠へ行った人

香川県　たかはしたみ

あの虹をのぼれば雲の上にのる
つるし柿向こう三軒つるしてる
助手席にみかん五六個のせてでる

川西市　田中喜俊

美容院たっぷり読める週刊誌
ドクターに弱音をはいて叱られる
見舞客となりの病人考えて

池田市　金崎峰子

開運を神にも仏にも祈り
捜しものばかりのような昨日今日
校舎からわたしも習った歌聞え

尼崎市　岩倉キク子

居酒屋の小皿たたけば出る十八番
宴果てた広間あわれに残る皿
飲めぬのが二次会までもついて来る

高槻市　執行稲子

三ヶ日卒寿の母の髪飾り
時差疲れ残りのパンの美味しさよ
王様も食べた可愛いミニ土産

寝屋川市　太田とし子

大わらじ掛けて宿場の喫茶店
温泉にゆっくりつかる長話し
行こうかな戻ろか恐い犬がいる

静岡市　大村正雄

究極の味方はいつも自分だけ
万病によく効く薬売るチラシ
生返事ドラマの人になっている

鳥取県　権代康女

ベテランをうばって仕舞った山の牙（大山遭難　三句）
大山をあまく見るなと風が言う
遭難の山を見あげて悲しかり

腹立ててみても私が生んだ子だ
母さんが黙っていると気がかりだ
新年の抱負ずいぶん草臥れた

米子市　鹿島　繭

初春の笑い財布に羽根が生え
さき先を考えすぎて絵にならぬ
交流の中で背伸びをしてしまう

兵庫県　酒井靖子

いい妻の回した独楽は軋まない
策略を知らない距離を甘んじる
言い変えてみても所詮は出雲弁

出雲市　園山かおる

心の扉開く漫画に出会う幸
期待する次の世代へ樹を植える
踏まれても雑草弾みあるいのち

寝屋川市　瀧本八十八

孫と吹くシャボンの玉は夢の色
忙しい時の時計はよく進む
橋渡り初めての地へ行く不安

泉佐野市　内田倫子

とびついてキスしてくれるポチも初春
北の旅こけしを抱いて連れ帰り
集金が早い師走でやりくりし

唐津市　山門タミ

知恵袋しぼんで託す広辞苑
立つ鳥が後を濁して困ります
愚痴みんな収めて母の火消し壺

岡山県　福原辰江

春の川リズムにのって唄い出す
愛犬と春の足音聞いている
せりを摘む春の香りを欲しいまま

鳥取市　中澤正恵

過熱する議論に暖炉湯があふれ
いらっしゃいのトーンが違う馴染客
宅配の包みに温い暮れの街

天理市　飯田昇

戌年の人かも知れぬボランティア
トンネルに入って蜜柑剝きはじめ
早耳が波長合せて寄って来る

香川県　堀田茂穂

朝の駅いつもの彼に目を伏せる
久々に会う教え子はまぶしくて
正月を温泉宿の果報者

静岡市　中西雅

迷い道で知らない花をみつけ出す
スタンドを消したとたんに句が浮ぶ
素人芸黒子が顔を出したがる

高松市　松本翠

松江市　浦辺静江

やる気出て目ざまし時計当てにする
朝ドラのお蔭仕事がスムーズに
午前五時　水の音まで遠慮する

米子市　永井三津子

不景気が父から職を奪い取る
孤独から抜け出せそうな愛に会う
今年こそ売約済みと貼れるかな

鳥取市　近藤秋星

飛翔する君は輝け新春の陽よ（本多君の社会復帰を祝う）
零歳の瞳にじっと見つめられ
老人の耳にも春の音がする

唐津市　野田旭恒

唐津曳山鯛に飛竜に鯱も居る
化けそうな傘貸す山の和尚さん
酸欠を補い辿る九十九折

唐津市　福島紀一

不況風私の凧はいつ揚がる
消費税にくまれっ子が生き続け
妻の愚痴まだ諦めていないよう

岸和田市　寺田甚一

外人もちらほら混じる初詣
外圧に政治のかじを変えられる
あほなこと言うてしもたと悔いしきり

香川県　宮内沢恵

男っぽいってまあ私の事かしら
少し派手に母の形見の髪かざり

米子市　木村春枝

ふん切りがつかずに助走ばかりする
カップ酒単身赴任の膝を抱き

寝屋川市　後藤黎之助

風邪薬のんで寝ようかコマーシャル
枯葉散るバトンタッチをするように

鳴門市　八木芳水

バーゲンへ一人女の列に入る
盃へ遅参を責めた銚子来る

静岡市　増田扶美

一人来てまた一人来て日向ぼこ
素うどんの味が嬉しい三日過ぎ

熊本県　高野宵草

歯みがいてマニュアルどおり寝る深夜
そそくさと回る役場の広報車

熊本県　増田一乗

連合の舵取り天与か首相の腕
年重ね兄弟無欲の話する

寝屋川市　籠島恵子

無抵抗へ風もときどきちからぬき
つくづくと自分よがりのカレンダー

ご先祖も辿った坂を喘いでる　島根県　森　茂美

逢うときは君に貰ったマフラーで　高槻市　芦田静江

梶たしか八百号の花吹雪
八百号市長色そえ傘躍る　静岡市　浅子まつゑ

揺れている娘心に好きな人
言うほどの事もなかった軽い悔い　大阪市　池田一男

寝過ごして出勤電車ののろいこと
薄氷をわざわざ子供跳んで割る　大阪市　一本勇太

反骨の記憶めがねの奥にある
妻だけに響く太鼓を闇で打つ　彦根市　大平太一郎

程々の欲を笑顔で傘寿越え
逝く友にいずれあの世でクラス会　鳥取市　植田一京

見送って別れたくない月の夜
うまいお茶飲む名水を汲みにゆく　和歌山市　山根恵美

駅前にパン屋の匂ある平和
留守電が夫婦の城を守ってる

券売機お釣りの方を先に取る　大阪市　中井正秀

喜寿が来てやっと本音で物を言う　高槻市　乙倉武史

親権の乱用問われる子の名付け
おみくじが大吉嘘でも信じたい　兵庫県　安達厚

温泉の朝湯で幸せかみしめる
大根のうまさ味わう暮れの鍋　鳥取県　橋本孝原

天国へ行っても迷う私です
父と子の晩酌男同士なり　唐津市　山門幸夫

噴煙を流して身震いする普賢（島原市で迎春）
埋没の家に虚な老いた犬　唐津市　江川春琴

もの淋し電話のベルに救われる
川柳の「ネタ」をばら蒔く孫娘　八尾市　生嶋ますみ

まな板の音がしている母元気
あれた手でまるめた餅の荷がとどく　静岡市　片平静代

降る雨を感謝している久しぶり
白壁に赤い蔦の葉しがみつき

泉佐野市　大工静子

黒檀の簞笥も今年六十歳
明けにけり七回目の年女

海南市　谷口義男

忘れねばならぬ事ほど憶えてる
ライバルが有るから今日もファイト湧く

大阪市　川原章久

子供には見られたくない汚れ役
あけ荷担ぐくわい頭が浴衣着て

枚方市　八田敏

誕生日孫が東京から誘い
都合よい占いだけは信じてる

富田林市　山原昭水

朝昼晩おいしいお茶で日本人
逆立ちをすると約束してしまい

今治市　村上久美子

説教は頭の上で聴く二十歳
伝達か謀反か蟻のまわれ右

羽曳野市　山本たけし

退校時溜り場にするたこやき屋
雪柳ふくらみ見せて土手の春

神戸市　岩田信義

居眠りに肩貸していて乗越し
気が抜けたビールで酔えぬ野暮話

寝屋川市　豊福路子

子がくれし年玉母に供えたり
赤い実のひときわ染まる寒の入り

鳥取市　中西智恵子

書き初めへ夢と希望を筆に込め
消しゴムで消せぬ想い出今日も抱く

岡山市　山磨行子

いつか来る孫の旅立つ日がこわい
魚拓にも自慢話があったろう

流山市　神田治

告白はやめる卵の割れる音
好きになるいずれ別離のある怖さ

茨木市　久保田恵美子

一本の松を配して渡月橋
橋渡し男の背中突いておく

香川県　高橋宅

酌み交わす酒より好きなコップ酒
冬眠を家族揃ってしてみたい

唐津市　市丸晴子

はるばると旅の土産に重い風邪
野に下り遠吠えだけがうまくなり

唐津市　浜本治幸

環境汚染　地球が病めば人も病む
キャンバスに試行錯誤を繰りかえす

角さんの良くも悪くもえらかった
大阪市　平井露芳

富士さんを眺めによその山登る
河内長野市　水谷正子

よい事の無かった青春なつかしい
妻の客　音一つせず気が揉める
藤井寺市　川端六点

雪解けに食欲が出た妻の箸
まだ惚けてないから世辞も愚痴も言う
兵庫県　玉田三重

碁敵が来ればその日の幕を引く
氷詰めカニが粗品で届く家
兵庫県　中野とよ子

アメ一つ買わぬ女はけちかいな
限界と知りつつ昔よみがえる
枚方市　濱田良知

一幅の軸に床の間初春迎う
諦めが悟ったような顔になる
姫路市　小井里兆

晩酌が旨いあしたへ夕茜
枯れ野からきびしい声で叱られる
唐津市　岩崎實

椿咲く庭になりゆく冬うらら
ぜひせねば思う矢先の雨となる
箕面市　木村天弘

雅子妃のおめでた待機宮内庁
コーヒーがお茶に変わった会議室
大阪市　乾哲静

晴着着て泣いて笑った七五三
鍋一つあって親子の話し合い
綾部市　藤田芳郎

一本の藁に始まる裏話
尾と鰭を取ったら埒もない話
豊中市　月原方郎

わが家今人間二人犬二匹
老いの足かばう仔犬が後先に
泉南市　坂根流水

宵戎　笹をかざして福もらい
実のない政治改革はかなくて
和歌山県　村中悦男

孫出して肩までつかる一人風呂
職引いた私を孫が追いまわし
島根県　安部美恵女

外は雨孫と折紙する炬燵
おみくじを枝につるして娘の笑顔
大阪市　出山美津枝

お雑煮を義理で食べてる現代子
持病より解放されて安らかに（神保拓生先生に）

鳥取市　山本正光

今年またお坊さんから賀状来る
野良猫も甲羅干してる春の午後

羽曳野市　徳山みつこ

殿町に幼き鷗外歩かせる（津和野）
百枚皿太古の刻がする宴（秋芳洞）

松江市　安食友子

僕よりもスピッツの方がいいらしい
逢えるのに見過ごしていたラッシュアワー

寝屋川市　坂上高栄

山彦の答える山が一つ消え
朝夕に答えぬ写真に語りかけ

田川市　松元寿永

口だけのお詫びと腹は読めている
プライドを捨て地下足袋で稼ぐ金

八幡市　鈴木政子

贈賄者かけこみ寺に医者が居り
仲人抜きハワイで式を挙げました

静岡市　柳沢たま

明日ありと思う心で九十年
うちの嫁普段着姿良く似合う

出雲市　荒木恵美子

白い雲乗って行きたい遠い国
誕生日大きい箱が良いと孫

鳥取県　橋谷静江

処世術話し合ってる老夫婦
ライバルと出掛ける時は厚化粧

島根県　三代朝子

学生が教師を評価する時世
初恋の彼神妙に同窓会

唐津市　山口ふさ子

産声と逝く人のあり年の暮れ
ユーモアの友の賀状に初笑い

島根県　岩田三和

熊の皮腰に巻きつけ山に生き
文明化野性の愛にまけている

東大阪市　松山隆

自分史のエピソードには嘘がある
チマチマと貯めて冥土で使えない

姫路市　服部一典

悲しみが多い人ほど優しさあり
親の見栄客多すぎて疲労宴

鳥取市　谷口侑里

大臣になって白髪が増えました
飲酒運転吐いた息から見破った

島根県　大坂藤子

趣味二つ三つ夢も広がる八十路
国会の論議つづいて不況風

秀句鑑賞

―水煙抄

―二月号から

新　正子

はかないものをずっと抱いていたようだ
時計屋の時計はみんなさびしがり

蔦沢　翠

悠久の時間の流れと、失ったものへの哀悼の気持が伝わって来ます。大人の句です。

難しい話へそっと目をつむる

流　奈美子

そっと目をつむるところに、作者のやさしさが感じられます。

どうしても思い出せない傘がある

牧渕　富喜子

広がりのある句。私が、あなたの忘れていた「傘」を思い出させてあげます。

年寄りが逢いたいなんて言えるかい
疑えば海の碧さも空の蒼さも

永田　暁風

言わなくても　分かってくれと男は思い、口に出してハッキリ言って欲しいと女は思う。どうぞ逢いたいと言って下さい。私ならすぐに飛んで参ります。

裸婦像と同じポーズを取ってみる

木下　道子

裸婦にまだ対抗出来る道子さん。うらやましいなあ。ガンバって下さい。

良く目立つボタンをつけて淋しがり

長浜　澄子

目立つボタンに女ごころが窺えます。因に動物の世界では雄が目立っているようです。

ゆとりが出来て素うどんを食べにゆく

森安　夢之助

素うどんがおいしかったら、麺も出汁も本物と思ってる私。「おぬし出来るな！」思わず叫んでしまいました。

好きになる　やかん沸騰する速さ

岡本　道子

若い恋なのでしょうね。どうぞ、たくさん素敵な恋をなさいますように。

こつこつと働く姑へ逆らえず

西井　つや子

誠実でやさしい嫁姑の関係がうかがえます。どうぞこのまま、おしあわせに。

熱いお茶入れて風向き変えてみる

八木　芳水

肩の力を抜けば、回りを少し違う目で見る事が出来ます。一服のお茶の後は、あなたが王手をかける番です。

のど飴を夫は直ぐに噛みたがる

平川　幸枝

本当にせっかちなんだから、と言いながらもう一つそっと差し出す幸枝さんの手が見えるようです。仲の良いご夫婦でしょうね。

ふだん着のままの娘を見てもらう

生嶋　ますみ

まだ独身の娘がいる私。「そうだ。そうだ」と実感として読ませて頂きました。

つらいことあって仏を思い出し

鹿島　繭

本当に私って勝手。幸福な時は知らんぷりして、つらい時に仏さまに縋るなんて…。でも仏さまは黙って聞いて下さいます。

故里の山の形を子に伝え

高橋　宅

言わなくても分かっている事だけれども、言っておきたい事があります。私は子供たちとの電話の終りに、「愛している」と伝えています。

朝になるとせんじ薬が効いていた

岩田　三和

良かったですね。長い夜の後で見た朝の光は特別美しく感じられた事でしょう。

銀河系

河内天笑選

綾部市　藤田芳郎
熱いお茶久しく妻に礼言わぬ
口に出す愛ならたかが知れている
活造り地獄へ落ちるかも知れぬ

松原市　小池しげお
税務署のそばのめし屋はうまくない
あてこすり凄い美人と歩くなり
人格もバッジも夜は裏返す

鳥取県　石谷美恵子
大臣を真似て夫のうまい嘘
募金箱の前を素通りする勇気
不景気を横目にわたしまた太り

羽曳野市　吉川寿美
進むより引き返すのにいる勇気
忘れたいこと忘れ得ずもの忘れ
子離れが出来ない甘口のカレー

旭川市　朝倉大柏
弱虫のくせに勝つ夢ばかり見る
言いわけを自分の影に言い聞かす
真四角な人でお声がかからない

青森市　工藤甲吉
元日の雪は元日らしく降り
天地人が白一色となる吹雪
冬中は冬眠をする万歩計

西宮市　西口いわゑ
三次会もうこわいもの何もなし
流れ矢を躱し損ねてばかりいる
とっときの笑顔で銀行受け付け

堺市　高橋千万子
正月じゃ医者に内緒のあれやこれ
茶番劇続けて夫婦水になる
天使囲んで泣いた笑ったあくびした

倉敷市　小野克枝
古い駅舎だった　父の背中だった
腕組みの中にわたしの過去がある
日当たりのよい位置にある町役場

米子市　林荒介
春の岸まで犬掻きをして渡る
押しつけの好意は嫌い寡婦の意地
据膳へ言いたい事が消えてゆく

鳥取県　鈴木公弘
距離すこし置いてやさしさ取り戻す
故郷の風に仮面を解き放つ
溺愛と言われてもよい百度石

高知県　赤川菊野
嘘のように薬が効いてくる怖さ
ひと言が胸に刺さったまま春に
いらいらを雪玉にして投げつける

広島市　流奈美子
わがままな犬に繋がれ散歩する
働き盛りが先に逝く長寿国
戎さんへ正月気分捨てに行く

海南市　三宅保州
賽銭の額を神さま見てはった
春夏秋冬　母の匂は変らない
流されて時の移りにさからわぬ

鳥取市　西原艶子
方向音痴で母の森から出られない
B面が面白くなる夫婦独楽
別姓でスタートをする若夫婦

宝塚市　丸山よし津
不信感あらわに妻が聞き直す
大人びた孫と会話が難しい
プラスアルファーはささやかな潤滑油

岡山県　土居ひでの
声出してわたしの位置を確かめる
いい音をさせておかきを平げる
いのち抱く女美しくたくましい

出雲市　久谷まこと
八尾市　高杉千歩
姫路市　小井里兆
米子市　光井玲子
倉吉市　淡路ゆり子
唐津市　浜本ちよ

豊中市　田中正坊
子を背負う女近ごろ見かけない

米子市　林瑞枝
戦はむかしでJリーグが流行る

和歌山市　榎原公子
じいちゃんの迫力ばあちゃんに移り

吹田市　山本希久子
始まりも終りも恋は吐息から

和歌山市　古久保和子
軽いテンポで指切りをさせられる

米子市　さえきやえ
ボケ防止のくすりが野良に置いてある

島根県　岩田三和
おしゃべりに雀が三羽来てくれた

藤井寺市　川端六点
ジングルベルに合わなくなって来た歩幅

米子市　鹿島繭
ホルモンが足りぬか文句ばかり言う

米子市　中井ゆき
本心をポロリと盃に落とす

鳥取市　植田一京
あの世から迎えに来そう月が澄む

鳥取県　江原とみお
酒屋から届くタオルと請求書

唐津市　久保正剣
木に竹を接いで連立揉め続け

砂川市　大橋政良
右ひだりみんな見て見ぬ振りをする

大阪市　松尾柳右子
パチンコ屋ポケットベルが聞こえない

藤井寺市　高田美代子
遠浅の海に流した恋がある

和歌山市　楠見章子
ちっぽけな野心口紅塗りかえる

寝屋川市　岸野あやめ
バツイチはちょっと寄り道しただけよ

米子市　永井三津子
恋という文字がこのごろ目を覚ます

唐津市　市丸晴子
そっと乗る体重計の針無情

名古屋市　藤井高子
真心がはらり零れたのか涙

枚方市　海老池洋
あぶく銭にぎり貧乏ゆすりする

松山市　谷真風
正直がいい損しても気が楽だ

和歌山市　桜井千秀
向い風避けてスタミナ蓄える

泉佐野市　内田倫子
見栄張った小さな嘘にしばられる

鹿児島県　大山舞烏影
無職だと自己紹介でいえる歳

大阪市　桝本蕗児
星空をみつめ地球を考える

弘前市　一戸ツネ
さりげなく鱗おとして妥協する

大阪市　寺井東雲
視点変えれば輝く石になる

大阪市　大河未佐子
踊らされ笛が止んだら誰も居ぬ

河内長野市　植村喜代
咲いている日は枯れること知らず

寝屋川市　後藤黎之助
職退いて見上げる空の広いこと

倉敷市　田辺炎六
単細胞の男が嫌う助け舟

安来市　木村政子
いい姑になって心は荒れている

吹田市　西岡豊
道草の過去風葬にしてしまう

出雲市　竹治ちかし
知らぬ顔してジョーカーを持っている

米子市　木村春枝
会果ててむなしさ埋めるお茶をのむ

鳥取市　西村黙光
玉手箱イミテーションが多過ぎる

茨木市　藤井正雄
男には無念を溶かす酒がある

広島県　田村新造
バイキング好きな女の二重あご

倉吉市　最上和枝
ひと言が縺れて火の粉降りかかる

鳥取県　土橋螢
笑ったら五歳は若く見えるだろう

鳥取県　田村きみ子
以下余白一つの愛が消えてから

米子市　金山夕子
君がそこに居るから笑顔出てしまう

岡山県　江口有一朗
障害も一つの個性として生きる

羽曳野市　徳山みつこ
ブレーキの効かぬ寄り合い世帯です

奈良市　米田恭昌
朝帰り犬まで他人行儀なり

枚方市　前たもつ
ご近所は一歩下がって折れておく

鳥取県　上田俊路
間違って届いた花に罪はない

兵庫県　中野とよ子
けちりたくない懐が淋しすぎ

八尾市　片上英一
おおかたのからくりは見た万華鏡

仙台市　川村映輝
ロボットも失業するほどの不況

豊中市　安藤寿美子
考えを変えて治った肩の凝り

十和田市　斉藤劦
活けておく癖持つ花は癖のまま

岡山県　小林妻子
悪夢から逃げる寝返り打ちつづけ

吹田市　吉川渉
一芝居打つか女の厚化粧

米子市　茂理高代
菜園の花にたましいうばわれる

鳥取県　西浦小鹿
父さんの飲む胃薬を僕も飲む

和歌山市　山田高夫
左遷した椅子へ栄転来て座り

和歌山県　杉山精子
きっかけを摑めぬままに冬の闇

八尾市　大内朝子
行きずりの子供へ孫をだぶらせる

今治市　矢野佳雲
野良犬と距離置いている雨宿り

兵庫県　酒井靖子
口惜しさを噛みしめている不発弾

熊本市　遠山夏生
高くつくけれど菜食しています

愛知県　吉本菁風
タレントが増えて役者が居なくなり

香川県　山地マツエ
万歩計弾ませ春を追っかける

和歌山市　細川稚代
やっちゃろかこの一言に賭ける新春

寝屋川市　江口度
行き先は互いに聞かぬ老夫婦

米子市　石垣花子
運一つ拾いに街へ行ってみる

出雲市　板垣夢酔
面倒みよいのがやはり市議に出る

出雲市　島祥庵
一陽来復六十路の坂を登り切り

姫路市　福島姫女
手づくりを贈るよろこび生き甲斐に

唐津市　福島紀一
同じ木の蜜柑の味もみなちがう

田川市　松元寿永
目覚ましの針も眠った定年後

大阪市　井上白峰
合格に親のふところ慌てだす

岸和田市　三輪通彦
他人ごとと笑っておれぬ紙おしめ

寝屋川市　堀江光子
娘の思う人も混じってかるた取り

池田市　岡本吉太郎
元旦や部厚い各紙買い集め

枚方市　森本節子
おだてられてるのを承知のってみる

岸和田市　田中文時
酒やめた男に精気失せてゆく

今治市　渡邊伊津志
機嫌取るように時々陽が当たり

十和田市　阿部進
喋るのに長けて聞く耳持ってない

豊中市　辻川慶子
先頭のひと声のこし雁渡る

枚方市　八田敏
誘い合う悪友もなし二度の職

弘前市　村田善保
地吹雪に負けぬ男の鼻袋

宇部市　中村三良
陽溜りに咲く野の花は一行詩

黒石市　相馬一花
ポケットに詭弁を詰めて口論す

米子市　小塩智加恵
言訳をすれば傷つく人がいる

今治市　渡辺南奉
真四角に役所事情を聞いてくれ

兵庫県　倉垣恵美
リフォームへ土蔵の奥が騒ぎだし

和歌山市　岩本美智子
亡き母に聞きたいことが溜まり出す

岸和田市　古野ひで
ブルドッグよくよく見れば味な顔

鳥取県　乾喜与志
八十路にてどちらが兄か弟か

熊本県　高野宵草
子の歳暮ちょっと淋しい有難さ

和歌山県　中後清史
来るはずの賀状へ安否問い合わせ

大阪市　中西兼治郎
家出の娘部屋そのままに母は待ち

寝屋川市　平松かすみ
ストライクさせてよろこぶお賽銭

大阪市　津守柳伸
麻雀も将棋も好きで呆けられず

大阪市　町田達子
冬銀河　遠い仏と対話する

姫路市　丁坪サワ子
寄り添った大樹が朽ちていた不覚

柏市　上鈴木春枝
佳い話だけを反芻させる耳

米子市　白根ふみ
Jリーググッズにラーメンも変わる

米子市　服部朗子
謄本が私の謎を解きました

米子市　足立由美子
新年も暮れもお酒でけじめつけ

大阪市　亀井円女
こだわりを持ち続けてる呆け防止

弘前市　岡本花匠
お団子の願い石仏笑み給い

香川県　たかはしたみ
ハチマキで搗いたお餅のおすそわけ

大阪市　中橋恵美子
異常なしをけげんに見てる診断書

泉佐野市　河原崎礼子
初場所の初日晴着で桟敷席

羽曳野市　酒井一壺
本心を打ち明けられた後ずさり

唐津市　筒井朴竜
目のいろで測る彼女の射程距離

西宮市　亀岡哲子
豪邸の風呂広すぎて風邪をひき

大阪府　籾山隆
お見合も二回目からは演技づき

静岡市　小木久子
物欲に負けエリートもする汚職

香川県　辻上よしみ
一言が荒んだ胸に灯をともす

鳥取市　美田旋風
ビジネスに友情混ぜていた誤算

和歌山市　内芝登志代
日本語が解るマルチーズは家族

神戸市　向井泰子
前向きに生きるとこわい夢ばかり

鳥取県　谷口次男
大臣も私もいずれ骨になる

鳥取市　岩原喬水
税務署も妻も恐いが逃げだせぬ

流山市　神田治
柳人のお墓はみんな句碑にしよう

鳥取市　近藤秋星
ため息の理由は妻も子も知らず

「銀河系」への投句は、同人・誌友・一般を問いません。必ず川柳塔用箋に3句を書き、毎月15日までに到着するよう川柳塔社事務所へお送りください。

（選　者）

女性コーナー

前香の花

八木千代選

紙に書くとわたしの闇が透けてくる

大阪市　北川　弘子

闇が透けてくるというのは、闇が明るくなるという事ではないと思います。自分の中の暗い濁った塊に鉛筆を当てて、切り裂きたくなるほどもがいて紙に書くまでの長い苦痛。実際にはどれほどの時間ではないにしても、内面から取り出して指に委ねるまでの過程は、ちょっとした踏み絵の心理だと思うこともありますもの。今までは正体のわからぬままの闇であったものがしだいに姿を現します。それに鉛筆の刃先を向けて闇を征伐しなければなりません。考えてみれば恐ろしい作業ですね。透けて来たのはシルエットでしょうか。恐らく闇の中に隠れて蹲ってるものは幾重もの衣をまとった闇の正体でしょうから。も少し透かして紙に書くことで対決しようとする作者でしょうか。

敵持たぬ人を信じてよいものか

大阪市　西出　楓楽

よくぞ言うてくださいました。信じていないわけではないけれど、その順風の快さには充分に感謝してはいるのだけれど、まれには抑えて抑えて周囲と調和しておられる大人も見受けますけれど、人間ですもの。当方といえば、目いっぱい未熟で老いても迷ったり腹を立てたりしたあげくに多少の思いも残して死にたいと願っているものにとって、それが礫にしても反応してくれる相手のほうが入って行けそうに思えます。敵を持つくらいの人なら一直線に向かい合えるでしょう。平易な語りかけで自由に会話が流れ合う感じが好ましくて、何となく連帯感が生まれてきます。

冬桜　土蔵は春に取りはらう　西宮市　秋元　てる
焼くものは焼いたが何故かうつろなり　米子市　光井　玲子
どうでもよいことだが風船の行方　島根県　松本　文子

朝陽見てからもうずい分になりますね　和歌山市　榎原　公子
おだやかに暮れる景色を残したい　米子市　足立由美子
寝太郎が起き出す思案付いたらし　和歌山市　古久保和子
石積んで積んでは風の沙汰を待つ　羽曳野市　吉川　寿美
のんびりは出来ぬ喪服の袖だたみ　和歌山市　福本　英子
句読点打てぬ日記を書いている　西宮市　牧渕富喜子
手塩に掛けた此の樹へ斧は打ち込めぬ　米米子市　石垣　花子
手のひらに水を掬うている未来　和歌山市　田中　輝子
それ以上　河がやせると骨になる　米子市　政岡日枝子
深追いはすまい大人の貫禄で　寝屋川市　岸野あやめ
リストから漏れた私を招く酒　和歌山市　宮口　克子
大空の赤信号は見えなくて　松江市　浦辺　静江
泉から掬う水なら気を許す　米子市　茂理　高代
パン生地が素直にふくれ私も素直　西宮市　奥田みつ子
いいではないか変えようのない三枚目　米子市　金山　夕子
すこし湿った恋を日向であたためる　西宮市　門谷たず子
束縛を逃れ自由というでなし　鳥取市　西原　艶子
くっくっと笑ってポトフ煮えている　和歌山市　木本　朱夏
奔放も私で制御できる城　米子市　鹿島　繭
パンのみに生きて疚しさ一つなし　和歌山市　桜井　千秀
画廊出て枯葉一枚目にとまり　八尾市　高橋　夕花
寒い日は酒といのちの話する　米子市　寺沢みど里
夫との割符わずかにずれている　茨木市　堀　良江
背で庇う者あり今日も出るファイト　米子市　新　正子
純白の花活けこんで無になれず　東京都　山口　新子
山茶花に蕾のたんとある安堵　西宮市　西口いわゑ

老いるとは片目を閉じて生きんかな
鏡閉じる日まで女を続けたい
母を越す下駄には鈴を付けておく
尻尾振る犬プライドを捨てている
跳びながら川で思わず躓いた
冬枯れをじっくり見せてくれる庭
あすのため鉛筆の芯とがらせる
朱の帯を結びおんなになっている
子や孫に語り継ぐのはきれいごと
今わたしガラスの靴を履いている
落ちこむ日の自分が怖く旅に出る
紙風船しぼむのを逆らわぬ冬
どこまでも杉に好かれて抜ける空
天国へ登る梯子の試作中
月光浴こころすみずみまで洗う
無駄なことなさらぬ神と信じます
雪しんしん枯葉大地を眠らせる
手も足も出ないだるまも生きている
傲慢に叱りとばしている命
大空に風には風の通る径
名残り雪　来年のこと亡母のこと
冬の天雲は芸術家と思う
ちちははに追いつくまでの鬼ごっこ
やんわりとこころ許した雲がとぶ
淋しいと銭湯へ行って見たくなる
成人式　空も晴着に味方した

岡山県　矢内寿恵子
米子市　青戸　田鶴
鳥取県　羽津川公乃
倉敷市　小野　克枝
米子市　野坂　なみ
吹田市　栗谷　春子
尼崎市　春城　年代
藤井寺市　高田美代子
米子市　小塩智加恵
和歌山市　玉置　当代
八尾市　宮西　弥生
和泉市　中川　楓
岡山県　土居ひでの
鳥取市　植田　一京
和歌山市　堀畑　靖子
弘前市　佐治千加子
豊中市　辻川　慶子
唐津市　浜本　ちよ
和歌山市　森　茜
出雲市　石倉芙佐子
大阪市　津守　柳伸
大阪市　町田　達子
今治市　野村　京子
堺　市　横田マリ子
大阪市　鍛原　千里
米子市　林　瑞枝

万両の赤い実うたがいなどしない
神様の森も冬の日暮れやすい
雪しぐれ　そこはかとなく歩きたし
何をためらう片隅に咲く野菊
花れんこん女の性がいとおしい
一人住まいに蘭の花ほころびぬ
紅すこしあなたの視野にいたいから
うしろ向きになればやさしい風あたり
許し合う心の襞の浮き沈み
似せようと小石せっせと磨いている
音立てて水子に回る風ぐるま
水仙の惑うことなし立ち姿
年金という小槌から玉の汗
水準が上がったらしい槌の音
山茶花が好きで冬陽へひなたぼこ
お浄土へ妻の採点ききにゆく
それぞれに一人の鍋を持つ家族
苦の種子も蒔いて孝行しています
逃げる道だけしか知らぬ白兎
どうしたら犬と仲良くなれるでしょう
淋しい日の胸で崩れる砂の城
プライドがせめて大きな「ハイ」を言う
渋滞の中を自転車抜けて行く
目標がだんだん遠くかすむ春
大波も小波も消えて夕茜

投句先　〒683　米子市花園町14

兵庫県　倉垣　恵美
大阪市　渡部さと美
和歌山市　杉山　精子
富田林市　片岡智恵子
羽曳野市　芦田　絢子
大阪市　鈴木　節子
松山市　竹田さやか
寝屋川市　籠島　恵子
八尾市　高杉　千歩
米子市　中井　ゆき
熊本市　永田　俊子
和歌山市　福井　桂香
米子市　白根　ふみ
香川県　永峰伽名子
和歌山市　内芝登志代
寝屋川市　豊福　路子
大阪市　本間満津子
鳥取県　石谷美恵子
大阪市　大河未佐子
鳥取県　さえきやえ
和歌山市　野々　圭子
柏　市　上鈴木春枝
宝塚市　丸山よし津
松江市　佐野木みえ
和歌山市　木村　初子

八木千代

ひみこさろん ワイド

―女に生れてよかったこと

女の舞　女のステージ

池　森子

人生は、大きな、ステージだと思う。そして、幕を区切るとすれば、四幕ぐらいではないだろうか。風景はきっと春夏秋冬だろう。演じるのは一人ひとり。

どう演出するかは、人生をどう生きるかである。ところで私を舞台にのせよう。

幕は三幕目、風景は秋。鬼千匹を飼っていた未熟な女は少しずつ影をひそめた。しかし、枯葉の舞う情景が近づいた事にも気が付いた。しかし枯葉の風景は、まだよそうと、演出家（もう一人の私）が言った。秋の季節は実りの風景でもある。実りと言えば、私は川柳という木を大切に育てている。川柳を育てながら「隣の席は、宝物」だと気づいた。

それは舞台が秋になったからだろうか。人は皆、一人では生きてゆけない。愛をもらいながら、支え合いながら…。だから「袖摺り合えば、関係を保て…」と思うのである。

そうだ、私は女でもある。

女とは人生の中で、妻、母の役割を引いた部分である。とすれば、女の花の時間は、短い。秋の舞台はなおさらに…。

ときどき私は、パレットに原色をのせてみる。その原色の一色一色は、私に向かって、個性を激しく主張する。その激しさは私の内面をも揺する。赤、白青黄黒。その主張するところを大切にしながら、着る物も選んでゆきたい。それもまた、女だからこその楽しみ方なのである。さまざまな、身近な事がらにもこだわりながら、短い女の秋をかみしめている。

やがて、冬、私の四幕目の開演である。

女に生れて

岸　桂子

小学校の四、五年生の時、男子生徒の猛烈な喧嘩を見た。鼻血を出し、口から血を流しながらの喧嘩に、私は家に帰り母に助けを求めた。母は、「男の子ならそのくらいでないと駄目だ。そのうち仲良くなるわよ」と取り合ってくれなかった。その時、女で良かったとしみじみ思った。次に長男出産の時である。十二時間と言う長い激しい痛みの中に、やっと「坊やですよ」と言われ、「ああ良かった。女の子なら今の苦しみを味わうだろうに」と勝手に思った。だがやはり、あの苦しみ痛みは、女でなくては味わう事の出来ない、尊いものかもしれない。

現在は均等法で男女の差がなくなって来つつある。したがって「粗大ゴミ」「濡れ落葉」などと言う言葉が生れて来た。ある句会で、女の人の句の中に、旦那のことを粗大ゴミ・濡れ落葉と言う句を作ったのがあった。私はせめてここの句会だけでも旦那さんのことをそのような呼び方は止めましょうと話し合っ

たことがある。確かに男性自身の威力も低下して来ている。どうか世の男性諸君、もっとたくましくなっていただきたい。〝不言実行〟私はこの言葉が好きだ。私には男の子が二人いる。常にこの不言実行を基に育てて来た。健康で働き者の夫と子供や孫たちに囲まれて、私は女であって倖せだと思っている。次の世も出来れば女に生れたいと思う。

馥郁と女で在れよ次の世も　桂子

女は損

高橋千万子

私は寺に生れ商家に嫁ぎ、姑と三十年、主人とは三十七年暮しました。主人が逝きました時、息子は一人前で嫁もおり、当然商売その他をゆずった次第で、私は表に全然出ずじまいです。

結婚して半期ぐらいの頃、主人から「女は商売の事に口を一切出すな」と言われ、その時は軽く「ハイ」と答えました。風呂ももちろん、食事・洗濯に至るまで何事も男が先。恥ずかしいですが、商家の嫁として万札を数えたことも握ったこともなく、台所の入用として少額受取るだけ、ガス、水道、電気、八百屋、魚屋その他ツケで買物。呉服なども月末小切手でした。友達に話すと「お金の心配がなくて気楽ね」とうらやまれましたが、私はその言葉を真に受けました。

ある時、不注意から魚を煮崩しましたので頭の方を自分におきましたところ、姑は黙ってとり替えました。一事が万事で、男女平等時代の皆様にはお笑いだろうと思います。何分四、五十年も前の事ですが。子供が年頃になった時、「オカアチャンはアホや」と何度も笑われました。もっと改革して行かんとだめだと言われても、今さら手のひらをかえすようなわけにも行きません。けれど、今思えばよく辛抱したと思います。戦前戦後のややこしい時、九人の家族（姑、小姑、夫婦、子ども三人、使用人二人）の台所と子育てに追われ、商売の売上、月末の支払、その他にはのほほんとした人形の奥様でした。気楽さもあったのか、肝心な商売のことも知らず、その日その日を送って来た人生です。何事もなくて良かったものの、あまりにも弱い女でした。

今は男女同権時代、男は男の仕事、女は女の仕事を十分生かし、損得も平等であってほしいと願います。

女だてらに

舟渡杏花

〝女だてらに〟もう今では死語に近い言葉。息子からこの頃特に齢を考えて行動をとしきりに言われているさ中、昨年暮れのこと。今春の法要を控えて壁の塗替えをと思い、本職の指示に従って違い棚の額を下したあとの一寸の油断から、六十センチ余りの高さから仰向けにドスン！　尾骶骨・背骨をいやと言うほど床面へ。その瞬間、呼吸も出来ず、声も出ない中に、妙に頭だけがはっきりしていて、ああこれで一巻の終りか。にんげんの一生なんてあっけないものだな…などなど。

幸いなことに隣組に外科医があり直ちにレントゲン撮影（四枚）結果はあーら不思議。あの世行きかと思っていたのに、骨折もひびもない。先生は打撲ですんだことを写真で説明しながら、驚いておいでの様子。その時、私は先生に四年前から週三回スイミングに行っていることを話すと、先生は「ははーん。その四年間の鍛練のおかげで骨折もひびも免れたのだ」と不幸中の幸いを喜んで下さった。

けれどあれから一ヶ月余り、まだ完全治癒とは言い難い。

失敗しても怪我しても、若い細胞は自然治癒力が著しいがこの齢ではそうはゆかない。

このたびのアクシデントは、私の心のどこかにおごりが生じていたのだろうと反省しきりの新年。

そしてこれくらいの打撲ですんだことを神仏のご加護とうけとめて、今年は〝老女だてら〟のこのことばを噛みしめねば…。

拙文をお読みの皆さまへ。私のこのアクシデントを警鐘の一つに加えて頂けたらと念じております。

男と女

中井ゆき

三月の声を聞くと、さすが山陰の重たい鉛色の空も、何処かに消えてゆき、切ないほどの美しい夕茜の空になります。

ところで女に生れて良かったか、の問いには、今までは勿論女でよかったと、言い切れましたけれど、この頃は女に生れたことが、淋しくて仕方なくなって来ました。美しい帯や着物、そして美しい花、すべて美しい彩にとっぷり浸って、子どもたちが巣立ったあとも、空しいなどとは思っても見ませんでした。

あるとき、ふっとあたりを見回すと、尊敬していた人も、好きだと思った人も、愛していた人も、男の人が一人ずつ消えて逝っていました。もう街角で心ときめかすことも、夕映えに思慕の心をゆらすことも、なくなりました。女性の交際相手は年上の男性と言う概念と戦争と平均寿命の差がプラスされて、こんな女ばかり残される世界になったのでしょうか。女性のやさしい性格をご存じの神様が無器用な男の人の面倒を見るようにとの、御配慮なのでしょうか。

この地球上の幾億の男性方よ、その英知をかたむけて、せめて偕老同穴の言葉のように女と同じ平均寿命まで、その生命力をのばしては下さいませんか。そして、ほんの少しだけ女性より先に逝き、私たち女性に、その終焉を見とどけさせて頂けませんか。

手前勝手な都合のいい願いなのですが、もしその願いが叶えられたなら、私はまた、来世も女に生れてきたいと思います。

今年こそ青春しようか古希の春　ゆき

なんとなく、やけっぱちの自嘲が漂っている句になりました。

女に生れて良かったこと

松井かなめ

学生時代は色が白いから七難隠すよとか、首に衣裳黒子があるから幸せねとか、親類や近所の人からよく言われていました。

その頃は、そんなことはどうなるものでもないと深く考えませんでした。長ずるに及んで、友達が金釘の誰がどうやとか、言葉をかけられたとか、話を聞いて何だか私も気になるようになりました。

生んでくれた親を恨む気持がないわけではないけれど、人目を引かない存在で半ばあきらめていたのですが、年頃になると縁談を持って来てくれる人がありました。最初は蒟蒻と豆腐を製造販売している方でしたが、この職業は毎日朝早く起きなければいけない。それに自信がないのでお断りしました。それから戦後のドサクサで少しあいて、二、三話をいただいたが、縁がなかったのかまとまりませんでした。時を経て今の主人と結婚することになり、飽きられることも飽きることもな

く、現在に続いています。

女でよかったと言えば嘘になります。戦後の誰でもそうでしょうが、楽しい幸せと感じる日が少なかったことです。「綺麗な花に刺がある」のたとえの如く、家には難しい昔気質の姑がおりましたし、子どものしつけがろくに出来ていないことも悔いています。

幸せは自分が築くものでしょうが、今度生れて来る時には、夢ですが出合い頭に振返ってくれるような、顔もスタイルもずば抜けた、気も心もやさしい女になってみたいと思います。でもこの性格で生れて来るのなら、男の方がよいのかも。

気がついて見れば戻れぬ老いの坂　かなめ

女の幸せ

宮本　欣史子

「女の幸せ」を考える時、私はいつも子供の頃近所に住んでいた、一つ年下のYちゃんを思い出す。Yちゃんは、小学校低学年の頃から大人同様の家事をこなしていた。

我が家に遊びに来ても、しばらくすると、「私、もう帰らんと」と言い出す。それで、彼女の家の玄関まで送って行くと、そこには木暮実千代に似た美しいお母さんが、年の離れたYちゃんの妹を抱いて、「Y子。早よ、お米研ぎなはれ！」と言って、仁王様（子供の私にはそう見えた）のように立っていた。冬の時季、Yちゃんはいつも血の滲んだ、軍手の腫ぼったい手をしていたのを覚えている。その手で、Yちゃんは家族四人分の米を研ぎ、食事を作っていたのだ。洗濯や掃除もYちゃんの仕事であった。私が退屈で「Yちゃん、遊ぼう」と誘いに行くと、黙って笑って首を横に振る。あの笑顔が忘れられない。

当時のYちゃんに、女に生れたことの悲しみや歓びなど、考えようもなかっただろうが、秘かに我が身の不幸を嘆いていた事と思う。Yちゃんが五年生になった春、急に一家は何処かへ引越して行った。美人の母親に男が出来て、父親の仕事も行詰り、妹は母親が、Yちゃんは父親が引取って離婚したらしいと、大人達が言っているのを聞いた。以来、Yちゃんとは一度と会えずにいるが、彼女だけには幸せになっていて欲しいと思う。

いや、彼女なら子供を深い愛をもって育てあげ、今はきっと幸せに暮していると思うことにしている。

創立65周年記念
去来川巨城会長賜盃受章記念

ふあうすと川柳大会

とき　**4月24日**（日）午前10時開場
ところ　神戸市立勤労会館7階大ホール
（JR三宮駅前・神戸新聞会館東隣）
宿題と選者（各題2句・欠席投句拝辞）
「迷　」　小松原　爽介　選
「笑　話」　大野　風柳　選
「月　日」　橘高　薫風　選
「小　説」　池田　可宵　選
「屋　根」　北川　絢一朗　選
「前　」　渡邊　蓮夫　選
「旗　」　礒野　いさむ　選
「昇　」　去来川巨城謝選
会　費　2000円（記念品・軽食・発表誌）
○前夜祭　6000円
○宿　泊　7000円
○祝賀会　午後6時から
（会場　グリーンヒルホテル）

ふあうすと川柳社

陽

奥田みつ子選

脱ぎ捨てた孫のセーター陽の匂　三男
冬枯れの心陽に干し陽と遊ぶ　とし子
太陽の拍手ひまわり咲き揃う　哲子
陽を食べて仙人掌の花ふたつみつ　螢
陽を浴びています私もばらの木も　希久子
お陽様を信じて春の種を蒔く　玉恵
太陽を屋根の布団がひとり占め　(吉)寿美
陽だまりに奥尻島の春思う　貴代子
春の陽へ妻と二人の万歩計　義美
戦争は太陽までも曇らせる　雅城
偉人伝　陽の面だけ書いている　博史
太陽もゴッホとムンク差別する　舞烏影
元旦とみそかで違う陽の光　辰男
陽炎と遊ぶ園児の赤い靴　(藤)正雄
少年のリンゴの頬が陽を弾き　佳雲
陽は幾度沈み大人に成りきれぬ　芳郎
陽焼けした掌からこぼれる土の唄　清芳
太陽の位置で鍬立て昼にする　兼治郎
陽の匂沁み込む父の作業服　白峰
一陽来福　取り越し苦労止めにする　富喜子
底抜けに陽気でそそっかしい妻　通彦
太陽に女はどっと物を干す　俊子
陽を受けた大根簾春を呼ぶ　和枝
農政の無策　陽やけが報われぬ　あずま
陽の当る場所にいけずが一人いる　たつみ
陽の当る場所に酔ってたボクだった　英一
しあわせと虚しさがある陽なたぼこ　保州
陽のあたる道で去勢をされている　重人
陽だまりに鳩と小犬と老いた人　倫子
宍道湖の夕陽をいつも自慢する　文子
太陽が笑う　太郎が笑う塔　正坊
飛鳥路の遺跡の謎に陽が当たる　よし津
太陽に恥じぬ日銭のあばら骨　勇太
陽が沈む父の道にはまだ遠く　まこと
檄文は陽のあるうちに書きあげる　しげお
母さんの笑顔太陽だなと思う　颯云児
陽だまりの中　老いてゆく音を聞く　日枝子

佳

残照のいのちが光る塔の先　宵明
春の陽は幾つになろうともやさし　典子
捨てがたい軍手が冬の陽を浴びる　劦
視野一ぱい春の陽ざしの中に居る　遊峰
沈む陽へ感謝しながら鍬洗う　鉄治

人

背なに陽を受けて生きてるなと思う　あずき

地

太陽がいっぱいレコードが回る　杜的

天

太陽になれと娘を嫁がせる　新正子

軸

陽ざしキラキラ影があるから美しい

パン

細川稚代選

祖父だけがパン食でない朝の膳　兼治郎
パンくずをベランダに撒く都市砂漠　みつこ
餡パンの餡だけほじる紅葉の手　晋
ナース聞くどちらにします粥とパン　英一
マジックのパンは帽子で作られる　忠雄
パン一枚焼けぬ不器用なパパがいる　愛論
戦火の日まだ憶えてる乾麺麭　正坊
三ヶ日もトーストの味を恋う　あずき
パン残す一人ぐらしが侘しくて　日枝子
ケーキより餡パン好きなお爺ちゃん　恭昌
パンこねるように子育て出来ないか　貴代子
焼き具合好みが違うパンの味　まこと
パンの香にジャンバルジャンがふとよぎる　照子
口コミで旨いパン屋に人の列　タミ
空襲に備えて焼いた野菜パン　遊峰
毎朝の戦　新聞　パン　時計　宵明
私の殻フランスパンの固さほど　希久子
ポケベルでパン屋へ寄れと指示が来る　恵美
給食のパンを残して叱られた　螢
自家製のサンドイッチがよく喋る　達子
今日生きるパンを漁った終戦時　義男
アンパンが好きな男で憎めない　公乃

地下足袋の父の口には合わぬパン　玉恵
控え目に自己主張するパンの耳　彩子
パン齧りかじり興した日本だ　宵草
フランスパンの長さに明日がある若さ　(吉)寿美
妥協してパンがこんなにほろ苦い　重人
サンドイッチ気取ってつまむ初デート　春枝
パンくずで庭の雀と対話する　有一朗
離乳食この子パンよりうどん好き　隆
パンを焼く匂が届く位置に住む　明水
嫁さんの焼くパン少し塩からい　高代
トースターがはねる戦のはじまりに　寿恵子
核持った国でパン買う列つくる　鉄治
パン焼けるまでに言い訳考える　諷云児
ネクタイを締めてパン屋の列にいる　英子
パンの耳積もる話を聞いている　しげお

測る

小林トメ子選

憶測の中で発酵する噂　洋
予測した通りいきなり怒鳴られる　よし津
人の業測れなかったアダム　イヴ　ただし
倖せを測る物指し見付けたい　諷云児
人測る基準は父と母にする　武史
どの足が測ったのやら駅五分　鉄治
切り落とし測り違いがくやまれる　悦男
足跡を他人はきつい目で測る　旋風
ふと漏れた言葉を恋に測られる　宵草
内堀の深さ測っている味方　保州
頃合いを測って母の助け舟　(吉)寿美
定年も間近　測れない愚妻　明光
目測が違う親父と子の歩幅　朴竜
血糖値測った帰り御座候　良知
別々に内外測るからずれる　やすお
憶測で人を斬ってる恐いペン　勇太
終焉の予測のつかぬ火の柱　久仁於
衆生には測り知れない弥陀の慈悲　虹汀
きっちりと測って母の味が出ず　正剣
怠慢を体重計がはじき出す　晴子
若木植え百年先を推し測り　シマ子
水量を膝で測って渡る川　清美

虚と実を測る踏絵を置いてみる　俊子
目測がはずれ難からのがれてる　千歩
生き残る距離保険屋に測られる　白峰
透析へ体重測る日が続き　秀峰
測量がはじまり森がまた消える　新造
ノーと言う返事をかえす間を測り　佳雲
倦怠期ある距離おいて測る愛　英壬子
物差し折って人間らしく生きている　日枝子
ライバルの知恵の深さが測れない　京子
土地の値を聞いてなかった測量屋　しげお
母の愛測りきれない泉湧く　寿恵子
よいとこへ来たと巻尺持たされる　實
古い尺で部下を測って疎まれる　波留吉
臆測で吠いた言葉に寒い風　遊峰
無表情心のうちを測りかね　倫子

評論家予測はずれて減らず口　辰男
妻のこころ測れぬままに真珠婚　正坊
掌で水を測った知恵が生き　たもつ
体重計乗せた嬰児に夢ものせ　ツネ
憶測のそこから真実無視される　宵明
偏差値で国背負う子が測れるか　芳郎
ものさしを替えると空が見えてくる　重人
いざこざもきっちり測り皆平和　寺井東雲

初歩教室

題 ― 魚

吉岡美房

いつも言うことですが、課題吟の場合、第一着想は捨てよと言われます。今回も、

○活け造り恨めしそうに目が睨む

というような、同傾向の句が圧倒的に多く、魚の種類では鯛の句が一番多く作られていました。これからも、常に新しい着想を見付けるように努力して頂きたいと思います。

同想の句の多くは、やはり訴えるものの少ない、底の浅いものであったようです。

それでは添削句から発表します。

スーパーに地球の裏の魚共　高栄

（スーパーで地球の裏の魚と会う）

日本海魚を拒む核廃棄　芳水

（魚にはない拒否権に核を棄て）

ふるさとの小川も目高住めぬ里　秀香

（ふるさとは目高も住めぬ川にする）

故里の川へ目高に会いに行く　絢子

（ふるさとにやっと目高に会えた川）

魚には国境なんてありません　辰男

（魚まで国境つくる国のエゴ）

政治家もどじょうも濁り水で活き　きぬ

（政治家も泥鰌も好きな濁り水）

正札をつけ泳いでる錦鯉　春枝

（買う人があるから造る錦鯉）

魚と書ききれいな水が欲しくなる　(塩)よしみ

（七不思議川に魚が居るニュース）

活き造り鯛の目玉に睨まれて　タミ

（活け造り生きて鯛の目が睨む）

一匹のニラミ鯛分けおめでとう　隆

（睨み鯛囲み新年おめでとう）

可愛そうで喰べられませぬ活造り　円女

（可哀想だけどおいしい活け造り）

おどり喰いうらめしそうな身のこなし　幸雄

（おどり食い命が喉を越えて行く）

愛も魚も崩れぬように焼いている　ひさ子

（焼きすぎぬように魚も愛情も）

魚焼く匂いの向う猫の顔　フク子

（魚焼く窓の向うで猫喘う）

肉よりもちりめんじゃこが好きになり　フミ

（肉よりも好きな魚で老いの幸）

パック詰め顔も知らずに魚買う　たもつ

（パック詰め顔も知らない魚買う）

お刺身にされそう魚反って跳ね　瑠美子

（俎の鯉ではないと鯛が跳ね）

宅配で嫁のやさしい寒ブリに　俊一

（寒鰤と嫁のやさしい便り着く）

応援に目高も魚と泳がされ　三重

（何時の日か鯉になる夢見た目高）

父さんの夕飯時の骨の魚　宅

（父さんが魚の骨をとってくれ）

年金の暮しに秋刀魚よく似合う　君枝

（年金の暮しに合わせ秋刀魚買う）

活け造り震える鰭に箸竦み　幸夫

（活け造り最初の箸に要る勇気）

鰤の眼が私をにらむ大根だき　トミエ

（大根に程よく染みる鰤の味）

目の色で生きの良し悪し区別する　義男

（目が生きていると魚屋意気で売り）

島育ち魚料理はあたりまえ　泰子

（島育ち魚さばける嫁の腕）

活きのいい魚隣へおすそ分け　君江

（釣って来た自慢とともにおすそ分け）

魚のいのち今日ももらって生きている　(中)弘子

（お魚の命貰って生きている）

金魚へ留守番たのみ出かけます　(藤)弘子

（留守番を猫と金魚に頼んどく）

戎、大黒おわす神棚に鯛供え　(古)正子

（戎　大黒　鯛を供えて福頼む）

七輪で焼いたさんまの御招待　(楠)章子

（七輪で焼いた秋刀魚で招かれる）

屠蘇の膳鯛は主役でにらんでる　美寿子
（屠蘇の膳鯛の主役は動かない）
ちり鍋の家族団欒雪の華　美智子
（ちり鍋を囲む団らん外は雪）
朝市の符丁の声で跳ねる魚　さち子
（朝市の声で魚が生きかえる）
朝市で見る魚ははねて客を待ち　志重
（朝市の魚は跳ねて客を待つ）
冷凍魚夢と希望は捨てません　ツネ
（冷凍魚夢も一緒に凍りつき）
店先の水槽で待つ死刑執行　九
（水槽で生かされ死刑待っている）
一箸の鰻猫よろこびの瞳　(犬)静子
（一きれの鰻を猫に分けひとり）
寒くとも我慢で冬を越す金魚　武春
（冬を越す金魚と共に春を待つ）
一夜干し旅の朝餉に添えてある　嘉子
（宿の朝昨日の一夜干しが出る）
水槽でふるさと偲ぶ熱帯魚　はる子
（ふるさとの話で弾む熱帯魚）
鉢巻きで威勢を飛ばす魚売り　清美
（鉢巻きの威勢で魚買わされる）
小鮒消え子は塾通い春こない　半畳
（小鮒消え子等塾通い遠い春）
生命かけ子供をつくり魚果てる　黎之助
（産卵へ生命を賭けた鮭の川）

花も実もある魚になって人はよる　孝原
（食べられて食べて魚にある輪廻）
うらやまし肩書き多い出世魚　旭
（次々と肩書き変る出世魚）
朝市の魚潮の香添えてくる　ミツオ
（潮の香と共に朝市魚買う）
おいしそな魚偏並ぶ鮨処　りつえ
（活きのいい魚偏並ぶ鮨処）
魚の名すしや湯のみで指をくる　義子
（魚偏がどこまで読めるあがり出る）
身をかくすタコ海底で名演技　美恵子
（海底の忍者は蛸の名演技）
モロコまた琵琶湖の味で日本一　太一郎
（味自慢琵琶湖のモロコ日本一）
養殖魚お前も波のりしたかろう　行子
（養殖魚波の揺り籠知らず生き）
開発の波間に魚影うすれゆく　方子
（開発が鮎ののぼらぬ川にする）
年越しの鰯こんがり焼けている　ふゆ子
（年越しの鰯祈りを込めて焼く）
魚拓見せ顔を天狗に釣自慢　姫女
（魚拓見せ長い講釈聞かされる）
つりきちが魚拓片手に酒を酌む　三津子
（大物の魚拓肴に酒を酌む）
釣り帰り今日魚屋に用はない　一壺
（魚屋に今日は用事のない獲物）

太公望やすらぎを釣る糸を垂れ　一乗
（一日の安らぎもらう糸を垂れ）

着想・表現ともに立派な句

群なして鰯は今日を生きのびる　とし子
魚から見られて遊ぶ海遊館　一壺
寒鮒を配り息子の手柄顔　忠男
寒鮒に酒は菊正妻の留守　(古)ひろ子
切り身なら出来る娘の魚料理　あずま
妻の留守楽しい自炊秋刀魚焼く　方郎
飽食の日本津和野の鯉に似る　みつこ
冷凍魚意地で容易に戻らない　(坂)静子
子等巣立ち鯖一匹をもてあます　三千子
俎の魚の涙見てしまう　幸枝
魚棲める海に万歳したくなる　ふさ子
鯖半身猫と分け合う老夫婦　ますみ
魚釣りの朝は勝手にとび起きる　(辻)よしみ
初孫へ明石の鯛を提げて行き　春風
雑魚放す子供の十指みな光る　キヨエ
魚屋の猫で魚の番をする　恵美

私の句

日本語を覚え帰れぬ熱帯魚
箸置いて魚の涙拭いてやる

◇

題「**眼鏡**」―3月15日締切（5月号発表）

宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11―4
吉岡美房

川柳塔800号記念川柳大会

平成６年１月16日　なにわ会館　金剛の間

記　念　式　典

開会のことば	川柳塔社副主幹	黒　川　紫　香
あ　い　さ　つ	川柳塔社主幹	西　尾　　栞
川柳塔のあゆみ	川柳塔社理事長	橘　高　薫　風
表　　彰	感謝状の贈呈・功労者の表彰	
祝　　辞	㈳全日本川柳協会会長	仲　川　たけし氏
	作　　家	田　辺　聖　子氏
お　は　な　し	川柳「塾」塾長	寺　尾　俊　平氏

記念川柳大会

「こ　こ　ろ」	川柳塔社主幹	西　尾　　栞選
「眼　　鏡」	川　柳　塔　社	小　林　由多香選
「似　　る」	都大路川柳社	奥　山　晴　生選
「　母　」	川柳展望社	時　実　新　子選
「ジャンプ」	時の川柳社	小松原　爽　介選
「　酒　」	ふあうすと川柳社	田　中　好　啓選
「　旅　」	北国川柳社	山　田　良　行選
「　鏡　」	番傘川柳本社	礒　野　いさむ選
閉会のことば	川柳塔社副主幹	野　村　太　茂　津

懇　親　宴

「傘おどり」弓削川柳社・「銭太鼓」川柳塔きゃらばくほか

記念式典

川柳塔社が昨年以来、総力をあげて準備をすすめてきた八〇〇号記念川柳大会は、平成6年1月16日、なにわ会館・金剛の間で盛大に開催された。

この日は絶好の晴天に恵まれ、開場の午前10時前から続々と詰めかけた四百二十七名の参加者によってさしもの大会場も満席となり、正午には出句が締め切られ、司会の西田柳宏子副理事長の開会宣言によって、大会に先立つ記念式典の幕が切って落された。

会場正面の金屏風が照り映える舞台の中央に設けられた演壇の向って右側には、麻生路郎の胸像が飾られてこの日の盛儀を見守る中で、はじめに黒川紫香副主幹が開会のことばを述べた後、西尾栞主幹が大要、次のとおりのあいさつを行った。

西尾栞主幹のあいさつ

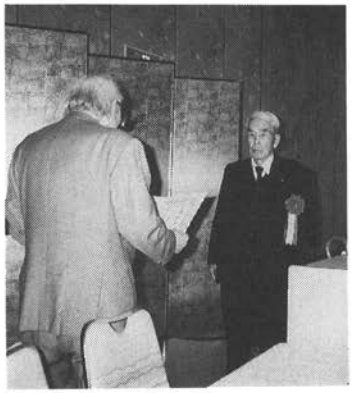
「昔から同人雑誌は三号雑誌のたとえがございますが、脈々八〇〇号の誌寿を数えることができましたのは、路郎先生が〝川柳は人間陶冶の詩である〟という語録をもって指導され、また、それを金科玉条として守り、命ある句を創ることによって豊かな人間性を涵養してきたお陰だと信じます。昭和40年7月、先生が〝雲の峯という手もありさらばさらばです〟という辞世の句を残してあの世へ旅たたれましてから、はや三十年の月日が経ちました。その後、曽孫弟子いや鶴の孫弟子、亀の孫弟子が増えてきました。そして路郎先生ならびに葭乃先生の謦咳はもちろん、お姿さえ知らない弟子たちが沢山おりますので、本日の記念品は両先生のおしどり句集を差し上げることにしました。本日はかくも多数、ご臨席くださり、大会をにぎわしていただき、まことにありがとうございました」。

降壇する栞主幹の姿は、心なしか花道を下がる名優のような印象を与えたが、次いで橘高薫風理事長は「川柳塔のあゆみ」と題して「大正13年1月19日、大阪南堀江の書林倶楽部で川柳雑誌の創立総会が開催され、2月15日、『川柳雑誌』が創刊された。①川柳の社

橘高薫風理事長

会化②古句の研究③初心者の指導を目途に、菊判32頁、定価30銭の月刊誌が、川柳塔八百号の源です。それから七十年の歳月を短い時間で話せるものではないので、路郎先生の精神を一つ二つ述べるに止めたい」とまえおきし、「路郎先生は売れる雑誌を目標にされたというのが第一番のことで、雑誌の名をズバリ『川柳雑誌』となさった。それを阪井久良岐が、自分のとこだけを『川柳雑誌』とは僭越だと抗議文をよこされ、それが先生の部屋の壁に掛けてあった」というエピソードを披露、また、「発想がユニークなところは生活の上でもしばしば見られ、野党的反骨精神も旺盛であったが、心の持ち方や他人への気配りのできた先生だと私には思われた」として、舞台に初代柄井川柳翁の画像の軸が掛けてあり、路郎・葭乃両先生がその前へ進んで、献花・礼拝される間、ワグナー作曲の歌劇「タンホイザー」のメロディーが流れた『川柳雑誌』四〇〇号記念大会の模様を紹介し、このようにしばしば、「これが路郎や、これが路郎や」と路郎先生の精神を感じながら多くの薫陶を受けたことを述懐するとともに、川柳塔一〇〇〇号に向って発進する決意を明らかにした。

ここで表彰の行事にうつり、長年にわたって『川柳塔』の表紙を毎号、水墨画で飾っていただいている日本南画院理事長の直原玉青画伯、「川柳の群像」をはじめ数々の評論やエッセーに健筆をふるっておられる相談役の東野大八先生、さらに『川柳塔』発刊以来、引き続いて印刷にあたってこられた藤原童心社の藤原儀春氏に感謝状が贈られた。時間の関係で玉青画伯には来賓控室で手渡され、会


感謝状の贈呈

場では壇上で栞主幹が感謝状を読み上げ、記念品とともに東野大八氏に贈呈された。

また、永年にわたって川柳塔社同人あるいは役員として発展に貢献された特別功労者として、大坂形水・工藤甲吉・月原宵明・二宗吟平・藤井明朗・本田恵二朗・正本水客・松村迷観子の八氏の表彰が行われ、代表として月原宵明氏に表彰状と記念品が授与された。さらに一月号に発表した「八〇〇号記念全国誌上川柳大会」の各題特選句の作者十七氏に賞状・賞品が贈られ、同人の藤解静風氏が代表して受賞した。

大会参加者には、選者として招いた礒野いさむ・山田良行・田中好啓・小松原爽介・時実新子・奥山晴生各氏のほかに、仲川たけし全日本川柳協会会長はじめ去来川巨城ふあうすと川柳社会長ら各柳社代表や作家の田辺聖子さんも来臨され、また、麻生路郎の五女、西村梨里さんも来会、東野大八氏はじめ旧知の人々と歓談するという場面も展開された。そして来賓を代表して仲川・田辺両氏が祝辞を述べた。

仲川会長は、昭和十七年に満州から病院船で帰り、現在、日赤大阪病院となっている大阪陸軍病院で療養中、慰問指導で来院した麻生路郎から川柳の手ほどきを受けたことを回

想するとともに、「今日、日本の川柳界で川柳塔がいかなる位置にあるかは、私が申し述

向って左から仲川たけし・田辺聖子・東野大八・西村梨里各氏

べるまでもない。先般も青森や鳥取で川柳塔の皆さんにお会いしたが、全国を網羅する大吟社の一つとして日川協を支えていただいている。いま川柳はブームを起こしていると言われているが、何としてもよりよき川柳界をわれわれの時代に作り上げるべく、全柳人が起ち上がっていただきたい。特に今年は、〝川柳を教科書に〟を合い言葉としているが、これにもご協力をお願いし、八百号を契機として今後いよいよ立派な川柳塔が実ることを心からお祈りし、お祝いのことばとしたい」と激励のメッセージを述べた。

さらに花やかなドレスに身を包んだ田辺聖子さんは、式典のはじめから栞主幹の披講が終わるまで席に着いていたが、仲川氏につづいて壇上に立ち、次のような心のこもるあいさつを行った。

「私は小説書きで、川柳については全く門外漢だが、若い時から川柳が好きで、古川柳から入った。その後、現代川柳にも触れ、これは大変な文学だと思った。川柳が教科書に扱われていないのもさることながら、日本文学史の中から川柳が落されているのが私は不満である。先に私は『古川柳おちぼひろい』『川柳でんでん太鼓』にも書いたことだが、二十一世紀には川柳が日本民族と言うよりも人類の文学的遺産にまでなっており、日本文学史にも川柳に大きくページが割かれるに違

田辺聖子さんの祝辞

祝辞を聞く参加者たち

いないと信じている。

『中央公論』に私は今、〝道頓堀の雨に別れて以来なり〟という題で岸本水府先生のことを書いているが、これは水府と番傘だけではなく、大阪に起った三つの大きな波―岸本水府・麻生路郎・椙元紋太先生、さらにそれを広げて川柳界のあけぼのと先生方の面影を文字の上で再現できればと思っている。

私は川柳は好きだが、自分で作ったのは二つしかない。〝そんなことないとおなかの底で言い〟と〝きばらんとまあぼちぼちといきまひょか〟で、この二つを頼まれると得意になって色紙に書いていたが、これにはとんだ失敗談もある（中略）。それで私は、皆さんの作品を楽しませてもらうに止めている。

水府・路郎のことを調べるために、存命の古い川柳家の話を伺ったが、驚くことに頭脳明晰、精神活発で、これはやはり川柳の持つ批判精神と言うか、ユーモアを愛する心が人々に活力をもたらすのだとしみじみと思った。それにつけても人と人との和を尊び、平和を楽しむ精神が人々の心を明るくする原動力のような気がし、そういう意味からも川柳はこれからの文学であると思う。私も及ばずながら川柳のよさをたくさんの人にお知らせするお力になればと思っている」。

川柳をこよなく愛する高名な作家の飾らぬ話が満場の大きな拍手につつまれた後、司会が祝電を披露し、川柳「塾」塾長の寺尾俊平氏から「一句とふたり」と題して別項のようなおはなしがあり、深い感銘を与えた。

入選句の発表（前半）

入選句の発表（後半）

川柳大会

この後、休憩に入り、午後2時から司会が河内天笑句会部長にバトンタッチされて入選句発表となった。記録（脇取）の前半は宮園射月芳・奥田みつ子、後半は岩佐ダン吉・河内月子のコンビで、西尾栞主幹による事前投句「こころ」の発表からはじまった。

四百余人の出句に対して事前投句は五十句、その他の課題は各六十句という厳選で、途中に休憩をはさんで二時間余にわたって披講が続けられ、野村太茂津副主幹の閉会のことばで大会の幕を閉じた。

（田中正坊記）

真剣に作句する参加者の皆さん

一句とふたり

寺尾俊平

川柳「塾」の寺尾俊平であります。『川柳塔』誌齢八〇〇号、まことにおめでとうございます。創立の大正十三年は、昭和天皇のご成婚の年であり、かつ、私がわがたらちねの母の胎内に入った歳でもあります。その私が数え年で七十歳になりました。長い歳月であった気がいたします。

私が川柳を書きはじめたのは、昭和二十八年の後半で、当時、私は大蔵省印刷局、つまりお札を製造する役所に在職していました。私がそう申しますと十人が十人、「へえ、ニセ札だっか」と返事がきます。そして私は、ニセ札造りでなく、ニセ札防止のための研究実験をしておりました。その室に私の外に二人の青年がおり、ちょっと前からその二人が川柳をはじめました。笑ったり、真剣な顔で考えこんだりしていますので、「俺も川柳をやるぞ」と言ったのがはじまりです。

翌年一月、句会なるものに初参加いたしました。ところが驚くべきことに、その会場にキラキラするような若い女性が五人も座っていたのです。どうやら友人たちは、川柳よりも美人たちに関心があってのことでした。以後、川柳が何たるものか漠としたまま、美人の拍手がほしいばかりの二人と少し変った私が、それなりの句を書いていましたが、そのうち、川柳はこれだけのものかと思いはじめ〝もう、川柳はやめよう〟と考えていた時、友人の一人がボロボロの大学ノートを持ってきました。ノートを開くと、いくつかの作品が書かれてありました。

二階を降りてどこへ行く身ぞ

の一句を見つけて、びっくりしました。〝これは詩だ。一行の詩ではないか〟と思い、その一行を信じました。私の父がやっていました冠句の久佐太郎という作家の句に

バカ野郎お前一体どこへ行く

というのがあり、妙に印象強く少年のこころに残していましたが、「二階…」の一行はさらに凄いと感じたのであります。そして、

君見たまえ菠薐草が伸びている

お父さんはネ覚束なくも生きている

などの句がこころに突き刺さりました。この時、この句が麻生路郎の作品であることなど知る由もなく、「こんな詩みたいな世界だったら私にも書けるかもわからん」と川柳に自分の思いを書きはじめました。

そして約一年後、丸山弓削平さんにめぐり逢いました。俳優の信欣三に似た飄々とした風貌から、火のような言葉が飛び出してくるのです。「句会で句が抜けるようでは駄目」と言って私を迷わせます。さらに「私は川柳評論家になりたかった。しかし馬鹿正直だから路郎の句も批判の対象になることもある。恩師である路郎にそういうことはできないから、私は作家の道を選んだ」と言われます。

私が凄いと思う弓削平さんが尊敬する路郎はさらに偉いのだと思いましたが、それと前後して、「二階…」の句がその路郎の句であることを知り、少し震えがきたものです。

そうした時、さらに鮮烈な印象で私の前に現れた人物が東野大八さんです。野武士的風貌で、弓削平さんと全く対照的に開放的な方であり、かなりのことを平気でおっしゃる方

です。まさに蘊蓄を傾けての滔々たる評論たるや、聞く者をして快哉を叫ばしめ、胸のすくような舌峰が私を魅了したのであります。

これはずっと後でお聞きしたのですが、終戦後、若い私たちが憧れた文芸作家に大江健三郎・開高健・壇一雄・坂口安吾らがいますが、大八さんは壇一雄らと交流があり、志と夢を同じゅうする酒徒で、言わば私らの及ぶべきもなき大豪傑であったのです。「句を作るだけでなく、論じるべし。その論を書くこと」と教えられたのは、本誌に「川柳の群像」を連載されて数年後のことでありました。

何事によらず、初心時代は何かに触れるとこころが躍るものであります。その躍るこころの中で触れたことは、生涯変らぬ感動として残るものです。やがて私は、大山竹二に触れ、終生の師、川上三太郎にめぐり逢うのですが、川柳をやめないで、それらの方々にお会いできたのも、この一句

二階を降りてどこへ行く身ぞ

なのであります。一つの真理を持つこの句に莫たるものを感じながらも、果してこの句を理解し得たかどうか、自信がございません。路郎大正十五年の作、私は満一歳であります。

後年、橘高薫風編『麻生路郎』の書簡集に路郎から大八さん宛の便りが再録されています。路郎の大八さんへの並々ならぬ敬意が、丁重な文体で書かれております。私が岡山でしばしば聞いた傲然たる路郎観と全くかけはなれた路郎像がそこにありました。私は不遜にも、そんな大八さんを

大八の馬鹿山茶花の馬鹿旅をせり

など書きましたが、実は優しい大八さんを私のこころに記録したかったのであります。

路郎先生にすごく気難しい面があったことも事実でしょう。大八さんの毒舌も石丸弥平の罵り以上に相当なものです。しかし、その内面は実にデリカシーなこころを持った方々であります。わが丸山弓削平も川柳を論じ、夢を書き、そして川柳に溺れた夢多きロマンチストでありました。私の初心時代はそうした経過の中で、やがて橘高薫風、時実新子の両氏を識ることにより、絢爛たる川柳の人生が展開されていったのであります。

『川柳塔』八〇〇号のお祝いの壇上で光栄あるおはなしの役をおせつかりながら、私の初心時代のことを中心にお話させていただきました。私の幻のお父さんのような西尾栞主幹と川柳塔社のみなさんにこころからお礼を申し上げ、同時に『川柳塔』の一〇〇〇号にむかってさらなる思いを捧げつつおはなしを終わらせていただきます。

『川柳塔』800号記念句集

夫婦句集

旅人　麻生路郎

福寿草　麻生葭乃

発行　川柳塔社　**定価 1500円**（〒240円）

句集「旅人」などから400句、同「福寿草」から300句を収録し、表記を現代仮名遣い・新字体に統一した新訂版としました。

★ご注文はなるべくグループで2冊以上のご注文は送料不要、10冊以上の場合は送料不要の上1割引で頒布いたします。

懇親宴

懇親宴は午後6時から大会と同じ会場で開かれ、開会あいさつの後、河内天笑・木本朱夏の名コンビの進行によって弓削川柳社の皆さんの勇壮な「傘おどり」でスタートした。「千号へ踏み出す確かなる歩幅」「八百の絆話と和と輪でつなぐ」「八百の重味で回る傘踊り」の川柳を書いた垂れ幕が次々と下げられ、「お粗末さん！そやけど心こめて舞い」と締めくくる趣向に大喝采であった。

川柳大会と一味ちがった和やかな熱気が会場いっぱいに広がり、「楽しい。八百号の歴史も感じるし、多くの仲間にも会え、五万円遣ってきたかいがある」とは、島根の柳友の弁だったが、つづくだし物のシルクハットの衣装もさっそうと踊る澤田千春・木村富美子さんにアンコールがかかる汗びっしょりの熱演。薗田漠沓さんの「駿河の景色」、三幸川柳教室の「ぶんだら節」、吉岡きみえ・尼れいじさんの「安来節」、ささやま川柳社の「でかんしょ節」と多彩な出演がつづき、会場は「やあやあ」と抱き合って再会を喜ぶ人や田辺聖子さんを囲んで記念写真をとる人など、全国の柳人による一大交歓の場となった。

シャンソンに聞き入る参加者

『川柳雑誌』時代からの古い同人の藤村〆女さんは「ひところはガリ版だったこともあり、頁も薄くてねえ。とてもここまで来るとは…」と感慨にふけり、ひさしぶりの西村梨里さん、黒川紫香さんと写真におさまっていた。また、怪我もすっかり治った西田柳宏子さんがいつもの柔和な顔で「八百号、うれしいね。今日は森中恵美子さんが〝元気な姿に会えてよかった〟と涙を流してくれてありが

たいことや」と笑っていた。他柳社からの出席も多く、片岡つとむ番傘川柳本社幹事長は「いやあ、楽しい会で、さすが川柳塔です。関西では、ふあうすと川柳社、川柳塔社とうちとの三大柳社が仲良くやっており、川柳の〝西高東低〟をさらに立証したい」と話していた。

舞台では、松永会美さんのプロはだしのシャンソン・ラビアンローズが会場を圧し、河内月子さんのハワイアンダンスに寺尾俊平氏に橘高薫風理事長まで飛び入りするという珍プレーとなり、最後のザッザッと響く川柳塔きゃらぼく十八番の「銭太鼓」には、ウエートレス嬢も足をとめて見入り、「こんな楽しいパーティーははじめてですわ」と感心していた。

さしもの友情と熱気の宴も午後7時半に閉幕したが、ロビーでは別れを惜しむ人たちが立ち去りがたくて話し込んでいた。この記念式典・川柳大会、そして懇親宴を実行委員長としてとりしきった黒川紫香副主幹が一言、「よかった。やれやれや」とつぶやいていたのが印象的であった。

（岩佐ダン吉記）

司会の天笑・朱夏さん

きゃらぼくの銭太鼓

田辺聖子さんを囲んで

梨里・紫香・〆女さん

川柳大会入選作品

事前投句

こころ

西尾栞選

たぬきそばそうかそうかと言うこころ　森田　熊生
わたくしのこころはどんな色かしら　宮尾みのり
自画像は心美人と言われたし　人見　翠記
寛の音自問自答するこころ　板尾　岳人
あなたならこころも命もみな上げる　山添　眉水
桜一樹心の景を動かない　八木　千代
新刊書こころ豊かな灯をともす　安藤寿美子
不幸せな話喜んで聞くこころ　村山勇太郎
敗者復活こころは広く持ちたまえ　門谷たず子
晩酌は神のこころになって寝る　月原　宵明
こころのかたちでシューズが脱いである　外山あきら
野仏に平常心を教えられ　上田　佳秋
風は旅人こころ変わりは赦される　桜井　千秀
真心をおき忘れてきた通過駅　木本　朱夏

木のこころ山の心の紀州っ子　内芝登志代
あとがきにしみじみ書いてあるこころ　小出　智子
まごころを頂く花をしかと抱く　梶川雄次郎
他人様の心読むことだけに長け　奥谷　弘朗
花鋏花のこころを断ちかねる　波多野五楽庵
川柳即宗教こころ豊かに人愛す　藤井　明朗
岩田帯こころ豊かに潮が満つ　吉岡きみえ
心をこめてもワープロは冷たいネ　柳楽　鶴丸
シベリヤのこころの傷を持って逝き　石垣　花子
温泉にこころが二つ浮いている　上島みゑ子
法悦やすっと消えゆくふたごころ　野村太茂津
先代のこころ無視したばっかりに　大坂　形水
札束に揺れるこころを持て余す　玉置　重人
こころまで老いたくはない本を買う　竹森　雀舎
その立場身に置きかえて知るこころ　久家代仕男
ふたごころどうにもならぬ独り言　井上多加江
さりげない言葉の裏の下こころ　島　翔竜
親看取るこころはひとつ姉妹　宮西　弥生
陶匠のこころを見たり古陶展　佐藤　一粒
献体へこころも共に申し込む　冨山ルイ子
散る散らぬ花のこころは犯すまい　井上　信子
定まらぬこころを写す水鏡　河内　天笑
晩年のこころときどき陽に当てる　北川　弘子
こころ期す男無口になっている　岩佐ダン吉
痩せカエルこころ此処にはないジャンプ　稲葉　冬葉

莫山のこころが滲む太い文字
ふる里にこころ温もる詩がある
はぐれ鳥心閉ざして孤を充たす
母の心にまだ追いつけぬにぎり飯
大馬鹿が上についてる親ごころ
お手玉のように心をもてあそぶ
良心をたかめる脱皮くり返す
すばらしい数字が並ぶのもこころ
つづり方にこころの痛む共稼ぎ
一輪の薔薇を真心だと思う
うしろ暗いこころを見抜くあおばずく
笑っているピエロの心知るピエロ
冷え切った心を抱いてUターン

佳　作

大海原のようなこころに溺れそう
こころ静かに愛の扉は叩くもの
木鶏の心求めた双葉山
雑巾を縫うて静かになるこころ
キッチンに愛のこころを計る匙

人

秋深くこころに落ちる水の音

地

わたくしのこころよ金を欲しがるな

天

蟋蟀が僕のこころの中で鳴く

芳地　狸村
吉田　とも
千原　理瑛
矢内寿恵子
木村あきら
印藤　智子
江口　度
森中恵美子
藤田頂留子
吉岡　美房
結城　君子
楠　昭子
赤川　菊野
野田素身郎
山本　礫
北畑　金治
原　宣子
亀岡　哲子
田中　薫
新家　完司
小島　蘭幸

眼　鏡

小林　由多香　選

新しい眼鏡で君を捕まえる
隅々が見えなくていい色めがね
母さんの浄土が見たい遠眼鏡
雑踏へ自分を消したサングラス
眼鏡かけずに見える不思議な母の勘
行き先は知られたくないサングラス
夢のないプレゼントです老眼鏡
思い切り変身したいサングラス
見えすぎる眼鏡で姑もしんどかろ
お互いの眼鏡比べて見たくなる
嘘ひとつつくのに眼鏡かけ替える
老眼鏡掛けて昔の夢を見る
まなうらの彼女に眼鏡かけさせぬ
真実が消えゆく街だ眼鏡拭く
ノーベル賞もらってもよい眼鏡です
とんぼ眼鏡の御伽ばなしは眠くなる
ひとすじに眼鏡へかなう影を抱く

浅野　房子
池永　正雄
門谷たず子
宮前　秀子
田頭　良子
山田たみゑ
大内　朝子
谷岡　福子
竹田さやか
楊井　二南
田中　薫
福田　悦子
八田　敏
平山　繁夫
瀬戸まさよ
瀬尾　照一
西原　艶子

遠眼鏡側の私も見てほしい　金子美千代
寝るときの眼鏡は何時も定位置に　林　荒介
老後まだまっすぐ見たい眼鏡拭く　神夏磯典子
企みを持つと眼鏡が曇りだす　森井　菁居
虫眼鏡で部下を見るから疎まれる　北岡波留吉
敵方へ眼鏡にかなう人がいる　古本　修六
姑になるふるい眼鏡はかけかえて　西出　楓楽
会議中眼鏡ばっかり拭いていた　土橋はるお
安売りの眼鏡で命あるかぎり　田中　亜弥
度の合わぬ眼鏡まわりを丸くする　江原　秀夫
コーヒー館お洒落な眼鏡よくしゃべる　西口いわゑ
世渡りの下手なめがねを手放せず　土田　欣之
眼鏡はずすと妻が美人に見えてくる　春城武庫坊
はんこ押す眼鏡は別に持っている　藤解　静風
存在感大きな眼鏡かけていく　海老池　洋
欲捨ててからの眼鏡は曇らない　石垣　花子
ボクの眼鏡は明日を確かに見るために　政岡日枝子
ポケットの方の眼鏡で確かめる　青木　良一
サングラスかけて苦手な人と会う　小畑よし子
残高を一番気にしている眼鏡　恒松　叮紅
情けには弱い眼鏡を拭いている　八木　千代
コンタクトとばしたままの負けいくさ　笠原　吸江
新しい暦に眼鏡合わせよう　寺沢みど里
明日までは見せてくれないコンタクト　尼　れいじ

涙もろい父の眼鏡はすぐ曇る　川島諷云児
ときめきを映す眼鏡を買いにいく　土居ひでの
公用と私用のめがね使いわけ　佐藤　一粒
見えすぎる眼鏡はずして生きている　岩佐ダン吉
眼鏡変えると許せることばかり　黒田　能子
胴上げに眼鏡とばして青い空　山崎　君子
眼鏡では見えないものを聞いている　牧渕富喜子
過去隠し通して冬のサングラス　鍋島　十歩
よく見える眼鏡が邪魔になってくる　小西　夏子
冬を越せないままにサングラスも恋も　池　森子

佳作

こころとは別な眼鏡の京言葉　宮西　弥生
眼鏡拭く君に幼い顔がある　月原　宵明
眼鏡を拭いて命名の墨をする　江原　夏代
抽象画具象画めがね掛け替える　高田美代子
サングラスひとりの刻が充実す　木野由紀子

人

花に水わたしに眼鏡生きかえる　森田　文

地

他人には喜劇に見えるサングラス　三宅　保州

天

拝啓と書いては見たが眼鏡拭く　藤井　正雄

軸　吟

真実に合わす眼鏡の度をはかる　小林由多香

似る

奥山晴生選

虹色のひと彩だけが似る暮し　横田マリ子
初恋のひとに似てくる冬メロン　辻　一弘
中流でみんな似ている都市さばく　山本　義子
わたくしに似た子は金輪際いらぬ　中井　彗梢
私に似てくれないと困ります　中尾　藻介
寅さんに似た浮き雲を追いかける　寺尾百合子
似すぎても困る似ないのも淋しい　黒田　能子
似てはならないものに似てくる影法師　西出　楓楽
似たような身の上と組むかごめの輪　寺沢みど里
いつか失くしたよく似た傘が置いてある　北川　弘子
骨格は父似ですこしさびしがり　河内　月子
私も九官鳥もオンチです　玉置　重人
わたくしに似る人もなし雪日和　池　森子
カメレオンに似て来て髭をそり残す　大森　一甲
冬彦さんに似た子ばかりが闇歩する　土居ひでの
あわ踊りの足に似てくる自画像だ　須場　秋寿
自分似の人には少し距離をとる　久保田恵美子

似たような話聞いてる屋台の灯　前上　英一
平成の夫エプロンよく似合う　辻川　慶子
逃げたくていつか似てくる足の裏　田中　薫
町並みの格子が亡母の里に似る　森田　文
似てるだけ僕が盗作するもんか　岩井　三窓
そう言えばアンパンマンに似てる雲　小林　幸子
犬に似て吠えているけど弱いんだ　政岡日枝子
母に似て強い女になる予感　福田　悦子
似たものが寄ってはだべる喫茶店　高田　博泉
四天王寺老母によく似た人に遇う　宮前　秀子
どれが私か泥にまみれた落椿　伊佐岡よし子
過ちが似ていて急に近くなる　牧渕富喜子
白ばらに似た人だった冬の章　西口いわゑ
父に似た貨車が真冬の駅に着く　平山　繁夫
定年の挨拶出征するに似て　松田　俊彦
遺伝子の怖さ息子の三拍子　岩内　外吉
声かけようか声かけようか似てた人　宮口　笛生
今日も又似た者同士の木偶の舞い　山本　玉恵
右へ倣えのあの翼賛に似る政治　波部　白洋
冬の駅父の背に似た人と会う　古市　幸子
似て非なる樅の木残す父だった　去来川巨城
夕暮れが似合う荷車曳いている　神平　狂虎
笠智衆みたいな親父さんだった　小出　智子
黄楊の櫛やっぱり亡母に似てしまう　井上　信子

面影は兄に似ていた金魚売り
ブルドッグもトドも私に似ています
女系家族の箸も似ている小豆粥
団十郎の隈取りにまだ似てこない
似合いすぎないか父の冬帽子
借り物の帽子が似合う冬女
技芸天のポーズで骨を抜きにくる
わたくしによく似た南瓜煮ています
亡父に似た柱時計に叱られる
心貧しく友情の似て非なる

林　荒介
小島　蘭幸
上島みゑ子
中原　讒人
中井みきお
藤岡　花梢
藤井一二三
林　瑞枝
桝本　露児
杉野　睦朗

佳　作

父に似た足で直線だけを踏む
僕に字が似て来た女房が好きだ
近頃は人間もどきが増えました
似たような過去で小鳥を飼っている
父に似た男を選っているらしい

高田美代子
河内　天笑
都倉　求芽
松本　文子
江原とみお

人

俺に似たボロ雑巾が干してある

新家　完司

地

身の上が似てあたためるにしんそば

森中恵美子

天

日本列島月夜の蟹に似て軽し

原　章峰

軸　吟

広目天に踏まれた邪鬼が僕に似る

奥山　晴生

母

時実新子選

階段の下から母が呼んでいる
母が待つ唯それだけで汽車に乗る
母になる予定日のあるカレンダー
ありがとう言いなさんなお母さん
腕白の傷によく効く母のつば
姿見に亡母かと思う年齢になり
家中で一番小さい母の靴
男運母とおんなじ血が流れ
つい母をなじってしまう手くらがり
いまわの際の母は半分仏さま
花野はむかし母を逃がしたまま雪に
豆殻を燃やすは母かかげろうか
母逝けば母という字のあたたかさ
森で遊んできたが母さんにはないしょ
母のこころにあかない窓はいくつある
亡き母もきつかったやろ老いの坂
席ゆずる僕にも故郷にこんな母

外山あきら
小西　夏子
里　小路
板垣　草丘
小山いわお
垂井千寿子
城山　道子
玉置　重人
西出　楓楽
中田たつお
池　森子
江原とみお
木本　朱夏
波部　白洋
山本　礫
板東　倫子
長谷川春蘭

その恩を返さぬままに母送る　堀江　光子
菩薩さま亡母は達者でおりますか　山本　義子
いつからか母が小さくなっていく　西原　艶子
母を追うただ一筋の田舎道　黒川　紫香
母が死んだらきっと後悔するだろう　小出　智子
裏切りは母にもあった寒の月　小西　小雪
母さんより良い母さんになってやる　原　宣子
母おわす枯木のようにそれでよし　森井　菁居
娘には母の欠点よくわかる　金井　文秋
幸せの坂の途中で母が逝く　榊原　彗心
冬かげろうよ私を母にしておくれ　島村美津子
川音にいつも小さい母が佇つ　東野　大八
この次は聞いてあげよう母の愚痴　金子美千代
大切な母ですおんぶしてあげる　丹波三千子
墓洗う母の知らない人連れて　橋本　弘美
わたしの母は三十七で死にました　船津とみ子
眠っていると母が出てくるので眠る　青戸　田鶴
故郷からの電話淋しい母に会う　古本　修六
母さんとウリ二つだと子は嘆く　中川ヒサ子
ヌード集母の鑑賞眼やさし　礒野いさむ
亡くなってやっと身近になった母　宮尾みのり
長持ちの底から母が飛びだした　澤田　千春
母だから言ってやらねば諭さねば　茂見よ志子
菜の花に埋もれて母は泣きどおし　笠嶋恵美子

大根がことこと母の唄がある　森田　熊生
母一人残して離陸特攻機　野田素身郎
まだ母はわたしの中のともしびだ　光井　玲子
夕焼けに染まる貧しい母が好き　遠山　可住
おふくろが半分くれる上まむし　水谷　正子
母はひっそりとしていて愉し　寺尾　俊平
ふいに亡母が恋しくなって熱い粥　横田マリ子
家事みんな下手で手紙のうまい母　亀岡　哲子
母はいつも耳の形を褒めてくれ　奥田みつ子
母の墓今更何を出来ようか　大村美千子

佳作

パチンコをしないで死んだお母さん　中尾　藻介
被ったり脱いだり母が嬉しがる　松本　文子
冬彦と言われて母と二人いる　大家　風太
このごろは母が甘えてくれている　河内　月子
母であるかぎり私はアホである　中井　彗梢

人

冬みかん喉のあたりで母と会う　田中　笑風

地

恐ろしい顔して母が立っている　小島　蘭幸

天

許せないけど一人しかいない母　岩内　外吉

軸吟

私を生んだことが終生母の恥　時実　新子

ジャンプ

小松原　爽介　選

跳びながら大事なひとが逃げていく　松田　俊彦
ジャンプする子には苛酷な北斜面　山田　高夫
ジャンプするときを静かに待つ冬芽　福井　桂香
ジャンプしてさて足跡を消し忘れ　山本　玉恵
ジャンプした形のままの過労死よ　牛尾　緑良
逃げ足の早い奴だよジャンプ傘　細川　稚代
ジャンプしていけないものを見てしまい　辻　一弘
成人式ジャンプの助走路に並ぶ　岩内　外吉
ジャンプして僕から逃げる鳳仙花　外山あきら
八起きめのジャンプをくれる蕗の薹　江口　度
断崖の松よジャンプをするでない　東狐恭仁子
ジャンプ台　名利愛憎些事の些事　去来川巨城
六十のジャンプを笑う昼の月　前　たもつ
赤い服買ってジャンプをしてみるか　石垣　花子
生きることばかり思っているジャンプ　後藤　正子
向う傷舐めてジャンプの刻つかむ　山本ひさえ
ジャンプなどしない女の停止線　児玉　歌子

大根が好きな男のジャンプ台　大森　一甲
煩悩を切りたいジャンプくりかえす　中林　酔虎
明日ジャンプするスニーカーの良い乾き　三笠　緑
限界をジャンプで知った皮下脂肪　坂本　和樹
ジャンプする着地にあった私小説　東野　大八
ジャンプしたツケが重たいマイホーム　榎本　吐来
時々は生きる証にジャンプする　綿野　春香
もう少し愚かになったときジャンプ　林　はつ絵
うしろ指気になりジャンプまだ出来ず　坂本　雪路
ジャンプしてレモンのごとき少女去る　山本　礫
悔しさをしっかり抱いたジャンプ傘　中川ヒサ子
記録へのジャンプへ哲学があった　江原　夏代
跳ぶ度に私を裁く水溜り　吉岡　美房
ジャンプするときに大きくなる孤独　森中恵美子
ドッグフードへジャンプ忘れた犬の足　河島いち子
一銭五厘でジャンプして来た男達　小林　妻子
モチーフは愛でジャンプをくり返し　田頭　良子
2で割った若さジャンプをこころみる　津守　柳伸
これからはみんなを敵にするジャンプ　小池しげお
ジャンプして墨絵の中の朱になろう　小西　雄々
繰り返すジャンプに神の掌が触れる　土田　欣之
饒舌なジャンプが好きな花の種　松本ただし
ジャンプした男の皿が浅すぎる　西原　艶子
ジャンプする老いに残尿感しきり　藤解　静風

ホップステップそれから向かい風になる　三宅　保州
ジャンプした女は元へ戻れない　宮園射月芳
運否天賦と書いてあるジャンプ台　江原とみお
曇り硝子の向こう見たくて跳んでみる　木本　朱夏
北風へ父という名のジャンプ台　垂井千寿子
ジャンプする情熱がない尾骶骨　恒松　叮紅
子を産んでからのジャンプは期待せぬ　田中　好啓
エリートのジャンプに慣れた生き字引　瀬戸まさよ
ジャンプして仕止めた椅子のきしむ音　青枝　鉄治
呆けたどうしで話がジャンプして困る　湊　修水

佳作

軒先の星がほしくてジャンプする　松田　巌
ジャンプする毬ちちははを置き去りに　大村美千子
どんぐりよジャンプもせずに落ちるのか　小西　夏子
ジャンプして天女の裾を摑まんか　新家　完司
ジャンプしているのは敵の影である　平山　繁夫

人

ジャンプするときは退路を絶つときだ　中尾　藻介

地

ジャンプしてジャンプして涙を乾かそう　田中　薫

天

花カマキリのジャンプ花にも許されて　池　森子

軸

いつかジャンプを考えているぬるま湯で　小松原爽介

酒

田中好啓選

飲み屋から香奠とくる請求書　田中　太音
迎え討つ酒はぬるめにしておこう　森中恵美子
バラいろに染まるあなたと酌みかわす　河内　天笑
かりん酒を酌む青春は遠くとも　奥山　晴生
藍染にお酒入れるも艶のこつ　森田　華子
墓へ酌ぎ弱者だったと寝雪みる　去来川巨城
深酔いの果ては死にたい人である　北川　弘子
シャンデリアがゆれるすこうし酔うたかな　波部　白洋
端然と酒　明暗に傾かず　八木　千代
雨宿り酒屋の軒は深かった　山添　眉水
齢かいな明日に残る酒となる　宮口　笛生
わかれ言葉と酒を泳いでいるわたし　池　森子
治ったら主治医を飲みに誘いたい　三宅　保州
酒飲んで毎晩天下取っている　宮園射月芳
わが恋は酒飲む如し酔うている　板尾　岳人
盃を持てば御意見無用なり　新家　完司
明日からの部屋の広さよお立酒　門谷たず子

今日酔うて明日は酔われぬ年酒受く　長谷川春蘭
ほろ酔いの女がからむ癖をもつ　吉岡きみえ
国訛り地酒の味を深くする　松本ただし
友が逝きひとり手酌の夜が更ける　村上　剛治
友達をほしがっている酒の瓶　小出　智子
あれ以来寝酒欠かせぬ胸のうち　平田　香子
プロポーズされそう今日の飲みっぷり　井上多加江
白酒とあそぶ桃色首かざり　山田津多江
狂わせたのは弥勒菩薩か火の酒か　林　はつ絵
指切りの炎が熱燗にしてしまう　小西　雄々
なんでやろ不肖の息子下戸二人　大塚　節子
桜の樹から酒の招待状が来る　政岡日枝子
戦争を語るに酒が熱すぎる　林　荒介
眼の座る酒とは知らぬのですすめ　里　小路
なあ酒よお前は謀叛起こすなよ　春木圭一郎
傷口に触れてくるのか冬の酒　後藤　正子
命知らずの男に朝酒が旨い　田中　輝子
ひとり消えふたり帰ったあとの酒　井上　信子
蟹みそと一升瓶を友にして　小林　幸子
羞じらいは女になった祝い酒　大森　一甲
バッカスを薬師如来にする男　うつみ仙吉
禁酒したそうな入院したそうな　笠原　吸江
怪気炎飲めない奴に娘は嫁らぬ　秋元　てる
飲めぬ酒飲んで女に嫉妬する　池田　淑子

残されて酒に傾く老父となり　野坂　なみ
杜氏の唄は音痴で酒がまるくなる　瀬尾　照一
酒が好き人間が好き爪のびる　桝本　露児
熱燗がほしいとおもう鬼瓦　辻　一弘
能面のようなお酒で人ぎらい　岩内　外吉
にごり酒言いたいことを言いそびれ　奥山美智子
水槽でいわしが光る縄のれん　田中　笑風
酒少し患う父の昏に　寺西　文子
汲めどもつきぬ酒へおぼれる月無明　高杉　千歩
大津絵の鬼と夜通し酌み交わす　牧浦　完次
初春まぶしモネの睡蓮酒に乗る　芦田　静江

佳　作

李白らと尺貫法の酒飲まな　寺尾　俊平
酒やめた男は近よらぬように　岩佐ダン吉
酔うて候　坂口安吾懐に　木本　朱夏
酒臭い男に太い骨がある　西原　艶子
松茸を一本もろて酒にする　遠山　可住

人

こころ許して酒は翁の面になる　上島みゑ子

地

災害に備えて酒を買っておく　氏林　洋敏

天

酒に溺れる父を冷たく見たことも　島村美津子

軸　吟

酒というものありて医者と手が切れぬ　田中　好啓

旅

山田良行選

旅に行く約束を待つ千羽鶴　小川しんじ
添乗員に見とれてる間に旅終わる　鈴木　可愛
何もかも勿体ないと旅の母　宮前　秀子
一泊の妻の旅から指示が来る　前　たもつ
旅人と思えば楽し通勤車　宮園射月芳
単身赴任　見飽きた旅をくりかえす　中田たつお
ひとり旅あぶない店へ飲みに行く　新家　完司
旅に出てどっさり読めた週刊誌　波部　白洋
料理法メモに残して妻の旅　長谷川宇情
一泊の旅でも母のうれしそう　井上　直次
年金の軽い財布と旅に出る　川島諷云児
寅さんにあこがれ小さい旅にでる　寺尾百合子
ええ加減にしなはれテレビのグルメ旅　松川　杜的
老姉妹　話ばかりの旅の夜　柿花紀美女
すれ違う旅人　李白　杜甫　王維　寺尾　俊平
旅慣れてひと駅前に目が覚める　保木　寿
急がない旅も日暮れは落ち着かぬ　秋元　てる

ひとり旅人の情けと酒の味　村上　剛治
グループの横に座った一人旅　町田　達子
片足は家に置いてる妻の旅　山田　高夫
「めし」の字に心やすらぐ旅の町　澤田　千春
着いてみりゃパンフの宿と大違い　濱田　良知
おとろえる脚がせかせる旅心　菱田　満秋
旅行なら真っ赤な服も着てゆける　三笠　緑
出張という名の旅に恵まれる　寺西　文子
不況などどこ吹く風と空の旅　山口三千子
旅先の朝市主婦の顔で見る　青枝　鉄治
恥かいた旅を生涯忘れない　稲葉　冬葉
グルメ旅行すこし太ったかも知れぬ　瀬尾　照一
花あまた地酒とりどり旅ひとり　井上　信子
フルムーン行く先ざきでもめている　橋本　弘美
旅ぐせがついてしまったおばあさん　田中　亜弥
鞄買うことにはじまる母の旅　常見はる枝
旅先の魚市母の目が光る　佐藤　誠一
そこまでの旅でも妻のイヤリング　山根　恵美
へそくりを増やして旅も派手になり　笠原　吸江
成田着　日本語ばかりほっとする　水谷　正子
いい日旅立ち富士山が晴れている　遠山　可住
どういう気旅のみやげの出刃庖丁　田中　太音
解放感　旅で女を意識する　黒田　能子
清張のポケット版と旅を行く　福浦　勝晴

時刻表開いて旅を組立てる　三輪　通彦
空港で忙しい旅の荷をほどき　濱野　奇童
息抜きを嫁にさせたい旅に出る　小西　雄々
一日の旅でもカエルコールする　黒川　紫香
鈍行で駅名拾う旅が好き　園山多賀子
旅に出てきつねうどんのうまさ知る　川原　章久
イソップのキリギリスです旅が好き　恒弘　衛山
旅帰り妻がだんだん派手になる　山田　福世
羽づくろいしては旅立つ渡り鳥　佐橋　雀汀
煙吐く汽車に会えたと旅日記　細川　稚代

佳　作

賽銭も沢山もって京の旅　吉田　とも
犬小屋の犬を起こして旅に出る　中尾　藻介
コインロッカー味方になってくれた旅　平松かすみ
据え膳でこのまま居たい妻の旅　中尾　飛鳥
期待したこともなかった一人旅　三宅　保州

人

旅先で転んだことは話さない　吉岡きみえ

地

てのひらの旅を眺めている仏　土田　欣之

天

手を振って旅へ出たまま帰らない　松本　文子

軸　吟

旅人の目に美しい雪景色　山田　良行

鏡

礒野　いさむ　選

初鏡今年もよろしゅう頼みます　坂上　高栄
宿ゆかた主婦を忘れて見る鏡　吉田　とも
神鏡を拝んで糺す深い罪　北岡波留吉
歎異抄閉じて鏡と対峙する　奥田みつ子
想い出がある慰安婦と姫鏡　岩井　三窓
水鏡澄んで火宅を抜けました　矢内寿恵子
鏡の中の銃口ぼくに向いてくる　横田マリ子
バックミラーに時どき映る苦い過去　岡　良三
不倫の夜鏡に詫びるニナリッチ　大家　風太
望遠鏡ぼくは雀のウオッチング　波部　白洋
鏡にはいつも味方をしてもらい　河内　月子
姫鏡ははと美しさを競う　小島　蘭幸
鏡まで悪役向きの顔と言う　小畑よし子
今日からは二十歳の顔で見る鏡　川原　章久
試着室　鏡と意見まだ合わず　河井　庸佑
夜更かしをしたなと鏡こわいこと　米田　恭昌
寝たきりの妻は手鏡忍ばせて　宮園射月芳

鏡だってイエローカードの二三枚　宮前　秀子
お買得すっきりしない試着室　宇久はる子
み仏が鏡に映るまで磨く　土田　欣之
外米食べた顔を鏡に見てもらう　土橋はるお
ミラーボール愛はくるくる進みそう　小西　雄々
真夜中は鏡も魔性おびて来る　庄野　澄子
八咫鏡以来おんなは踊り好き　上島みゑ子
楽しみは鏡開きの初稽古　三輪　通彦
デートの日朝の鏡に浮かぶ虹　妹背尽呂久
逢える日の鏡へアカンベーもして　遠山　可住
ブティックの鏡はとても褒め上手　坂野はつこ
美女募集　鏡よく見てあきらめる　後藤　正一
鏡視るわたしの絵巻悔いばかり　野々　圭子
水鏡富士のお山もナルシスト　柴田英壬子
賞味期限を鏡に問うて逢いにゆく　小林　幸子
バックミラーの視野に手配と同じ車種　常見はる枝
変身が早過ぎないか万華鏡　小池しげお
鏡は生命　死ぬまでどうぞ女です　中野　欅子
引き揚げて買った鏡のわが笑顔　森　正
混浴をあたふたと出て鏡見る　古川喜美子
山田五十鈴の種も仕掛けもない鏡　津守　柳伸
会うた日の火照り鏡の中の顔　冨山ルイ子
おんな妻自問自答で拭く鏡　寺尾百合子
鏡だけ知る自分史の一ページ　原　宣子

鏡さん悪女に化けるゆるされよ　油谷　克己
疑心暗鬼覗いてごらん顕微鏡　指宿千枝子
鏡うつくし明日死んでもいいですか　小林　一夫
なあ鏡世辞を言う気になれないか　藤田頂留子
この笑顔鏡に凍結しておこう　楠　昭子
ぼっちゃんを読む鏡に遠くなる女　森中恵美子
過去になる鏡にしよう悪魔君　須場　秋寿
バックミラーぴたりパトカーつけて来る　八田　敏
鏡の中の俺は確かに狸だな　梅田　宣司
使い捨ての美学を問うてきた鏡　前　たもつ

佳　作

変身へ鏡の前の無言劇　住田英比古
水鏡露伴の塔がゆれている　中田たつお
明鏡止水そして燃えたいなと思う　三宅　保州
吉日の鏡　初心になれという　竹森　雀舎
鏡の中にお洒落狂女を棲まわせる　中尾　藻介

人

隈取の鏡今年の抱負など　片岡つとむ

地

新宮殿へ鏡が移る儀が進む　梶川雄次郎

天

人情が映る鏡を娘に持たす　尾宮　弘治

軸　吟

社の鏡くもり不況を脱けきれず　礒野いさむ

参加者の感想

暖かい人脈

恒松町紅

なにわ会館の窓から見る大阪の朝は、山陰と違って、今日の大会を祝福するかのように透き通るような青空だった。会場が同じホテルという安心感があって、ゆっくりと朝食をすませることが出来た。開場の十時前にはもう受付は大混雑で、再会の喜びが張る挨拶がそこここで交わされていた。会場の金剛の間にはステージに金屏風が据えられ、その上には河内天笑氏のプロ級のレタリングによる大会字幕が吊られ、川柳塔旗がステージを一層引き立てていた。

司会は西田柳宏子氏によってプログラムどおりに進行、黒川紫香副主幹の開会のことばに始まり、西尾栞主幹のあいさつには、人は惜しまれるうちに花道を去るという言葉の引退表明があって、会場は一瞬、寂となる場面があった。橘高薫風理事長の川柳塔のあゆみ、仲川たけし氏、田辺聖子さんの祝辞、おはなしは川柳「塾」塾長寺尾俊平氏の笑いも交えての話術が会場を魅了した。

第二部の入選句披講は予定時間を十分ほど過ぎていたが、ユーモアのある河内天笑氏の司会で、終了はきっちり予定時間どおりであった。呼名が小さかったのは、出句八百五十句余の中からよもや自分の句がという驚きと感激で声が出なかったのか。出席四百二十七名というこの人数を惹きつけたものは一体なんだったのか。川柳に魅せられたというばかりでなく、川柳塔社の暖かい人脈による情合いではなかっただろうかと、そんなことを考えながら新大阪発十九時六分ひかり55号の客となった。

いらっしゃいませ

桜井千秀

「いらっしゃいませ」一人一人に声をかけお名前を確認、記名欄に丸印をつける。「懇親宴」の券を渡し、会費を頂き、「ありがとうございました」の繰り返し、こうして私は、記念句会当日懇親宴の受付を仰せつかった。

冬葉さんをチーフに千歩さんと三人。さすがお二人は顔が広い。すぐお名前が解って、てきぱきと行動、私はまごまご「誰方様ですか」と尋ねなければならず、「済みません」とお詫びをしながら緊張のしどおしだった。でもお二人から「いらっしゃいませ」が明るくてよかったと褒めていただき、救われた思いだった。合計高はどんぴしゃりで、三人とも胸を撫でおろす。

やがて会場へ。「川柳塔八〇〇号記念川柳大会」の横断幕の下で、田辺聖子先生がお話の最中、「きばらんとまあぼちぼちと行きまひょか」とユニークな内容に耳を傾けつつ、正面の麻生路郎先生の胸像をじっと見つめる。

古稀はよし弟子に孫弟子ひ孫弟子　路郎

私達三幸教室の創立者、故三幸主幹は和歌山へ始めて川柳塔を紹介したとのこと、柳誌「七面」はこの一月に三百五十八号を迎えた。療養中の智水庵主幹の代理で、今私がこの席に畏まる。感無量とはこのことか。この後、懇親宴で進行係の天笑さん、朱夏さんにより各吟社の華やかな催しが繰り広げられた。当教室は恵美・さち子・嘉寿子・章子・恵子さんの五名が和歌山郷土踊り「ぶんだら節」を披露。懸命さが滲み出ていて美しかった。

川柳塔八〇〇号記念川柳大会をこうして盛

り上げるひ孫弟子達を路郎先生、とくとご覧あれ、そんな思いで私の胸は一杯になった。

素晴らしい花道

田頭良子

出かける帯が、一度で形よく鏡の中で納まったときほど嬉しいものはない。その朝は袋帯だったので、なお更である。こんな時はポンと帯じめの下の硬いところを叩いてみる。その感触で今日一日が分かるのだ。

こんな気持ちで出かけた会場、松飾りの取れた今日も、ここには松の内気分が流れ、華やかなムードが漂う。

正面の舞台上には、麻生路郎師の胸像が厳粛な香を放っている。

ところが開会直後、私の朝の気持ちとは、うらはらなことが起こったのだ。あいさつの中で西尾主幹が、ご自身から勇退を発表されたのである。思いもよらぬことに、今日一日の中で、このことが私の脳裏に鮮やかに焼きついて生々しい。

どんな時も、にこやかにウイット溢れる挨拶をされる主幹が、ことばもとぎれとぎれとなり、声もいつもに似合わず小さい。マイクのせいだろうか、私の席が最後列だったからかと、懸念しつつも、司会者が、万感胸に迫るものをこらえられた結果、と表現されたのにハッと事実を知った。突然の表明とはいえ役員や周囲のかたがたの、温かい肯定の結果であろう。

長い主幹のお人柄と功績に、こんな素晴らしい花道を用意された皆様。そして自ら、この栄ある八〇〇号記念大会の佳日を選ばれた西尾栞主幹。正に一巻の美学という他ない。

そして、路郎師の胸像に深々と頭を下げて去られたそのお姿に、讃辞は尽きない。

（番傘川柳本社）

川柳塔ありがとう

政岡日枝子

川柳塔八〇〇号記念川柳大会に出席しての帰りのバスは、今、雨の中国縦貫道を走っている。聞けば米子も雨だという。

雪でなくてよかったと、心地よくバスにゆられながら、身も心も、まだあの金剛の間での光景に酔っているかのように、フツフツと浮かんでくるのである。

三回目のなにわ会館は、親しそうに私たちを迎えてくれた。実は私たちのきゃらぼくは今回「恋の季節」と「銭太鼓」をさげての上阪である。

半分は固い決心をして、半分は開き直っての出席であったのに、会場に入ったとたん、銭太鼓の事などすっかり頭から消えていた。

あの広い会場を埋める人人人……。日本全国からの方々に支えられての大盛会。

私はというと、全く小さな点になってしまって諸先生方のお話に聞き入っている。

「川柳を教科書にのせましょう」とおっしゃった仲川たけし先生、「21世紀は人類の文学的遺産になっていくにちがいない」とおっしゃった田辺聖子先生、「愛を込めて進もうではありませんか」とおっしゃった寺尾俊平先生。八〇〇号のその刻に、そこにいたからこそ、このような素晴らしい言葉を頂くこと

踊る田頭良子さん

が出来たのだと感激のしっぱなし。

銭太鼓はというと、練習の甲斐もなく、というところでしたが、立派な応援に支えられて、私たちも熱くもえました。みな川柳塔のおかげです。ありがとうございました。

ますますの隆昌を

木村　あきら

七五三飾りの下りた一月十六日、なにわ会館で開催の川柳塔八百号記念大会につたない句箋を提げて参加した。一階ロビーで野村太茂津副主幹のお出迎え。四階会場に本社首脳陣挙げての歓迎。関西一円から参加の懐かしい顔…握手が忙しい。受付に美女、美女、お顔とネームが一致しない。お見かけしたお顔だと思っていると、「私、小出智子です」。ウァー隣席に稚代さんのネーム、「あなた稚代さんですか」。ここで私が最初に恥をかいた。会場で楓楽さん、お孫さんのある顔と違う。隣の人に確認してやっと納得する。路郎師の胸像の向うに路郎師の娘さんのお顔。田辺聖子さん、寺尾俊平先生のご講演やら各大先生の披講。私の心を捕えて放さない。

十七日は、薫風理事長に伴われて西尾主幹宅へ。おっぱこ吟社のご厚遇と松村迷観子会長の表彰お礼に参上。十分くらいで退出予定のところ、ジパング日本海で歓待を受け、無神経な私も消え入りたい気持。ご本宅で四ヶ月ぶりに奥様にお目にかかり、具妻（愚妻ではありません。具わっている妻の意）のお話をして大恥をかいて辞去。その時、ふと鬼遊先生作？「長生きをして未だ恥をかくつもり」。これは、私をモデルに作られたものでしょう、きっと。

十五日上阪の折り、尼崎市の紫香先生句碑を拝見し、尼崎に一泊したところで大恥もさらし、十八日に無事、愛猫「チコ」の待つ我が家へ帰着した。

川柳塔社のますますのご隆昌ご発展と全国柳友、諸賢のご健勝ご健吟をお祈りして拙い文をおく。

とび入りもまじって

祝電拝受（順不同・敬称略）

NHK学園理事長中野正之・久世川柳クラブ会長二宗吟平・ふあうすと川柳社・番傘川柳本社・全日本川柳協会・水粉千翁・鵜かご川柳社・だいとう番傘川柳会山本翠公・斎藤大雄・いずも川柳会・高橋夕花・川柳展望社石倉芙佐子

本誌購読のお願い

今回の『川柳塔』八〇〇号記念川柳大会には、同人・誌友のほか、他柳社や一般の方たちが多数ご参加いただきました。厚くお礼申し上げます。

ところで本誌は、大正十三年に創刊された麻生路郎の『川柳雑誌』を継承して発行している柳誌で、各種の投句欄や多彩な読み物があり、みなさんの作品の発表と鑑賞の場として、さらに川柳研究にもお役に立つと存じます。

誌代は一冊六百円（送料六十四円）ですが、半年分三千八百円（送料とも）をお払い込み下さった方は、本社規約による誌友としてお迎えいたします。同封の振替用紙ご利用の上、お申込み下さい。

八〇〇号記念川柳大会参加者

総数　四二七名
府県別・順不同

【青　森】浅田隆樹　波多野五楽庵
【東　京】河井正之
【神奈川】大木俊秀　奥原雨人　菱田満秋
【石　川】山田良行
【岐　阜】東野大八
【静　岡】薗田獏沓
【愛　知】大栗　要　大澤富男　稲垣カナエ
奥村和代　国枝徹雄　佐藤一粒　井上多加江
佐橋雀汀　島　翔竜　城山道子　金子美千代
田中太音　森　正　吉田とも　多和田鉄平
吉田幸子　永井さかゑ　長谷川宇情
山田たみゑ　山田津多江
【三　重】木野由紀子　古市幸子
【京　都】井上信子　奥山晴生　上島みる子
小林英子　小林幸子　山海友熙　宇治田志寿子
田中笑風　辻　一弘　都倉求芽　玉野可川人
中林酔虎　花崎スエ　保木　寿　中井みきお
前上英一　松川杜的　松川芳子　中井三重子
松田俊彦　山本　礫
【大　阪】浅野房子　芦田静江　安藤寿美子
油谷克己　天根夢草　池　森子　池田寿美子
池田淑子　板尾岳人　稲葉冬葉　伊佐岡よし子
稲本凡子　井上直次　今西静子　儀野いさむ
岩井三窓　岩内外吉　印藤智子　指宿千枝子
上村和子　内田一弥　内田倫子　妹背尽呂久
江口　度　榎本吐来　江原夏代　岩佐ダン吉
江原秀夫　海老池洋　大塚節子　宇久はる子
大内朝子　大家風太　岡　良三　うつみ仙吉
岡本久峰　奥田良子　納　糸葉　大河未佐子
笠原吸江　片岡湖風　金崎峰子　岡本吉太郎
河井庸佑　金井文秋　河内月子　小川しんじ
河内天笑　川原章久　川見絹子　柿花紀美女
北　勝美　北川弘子　北畑金治　梶川雄次郎
橘高薫風　木村一笛　楠岡房子　笠嶋恵美子
楠　昭子　栗谷春子　小出智子　川島諷云児
小出雅恵　児玉　蛙　後藤正一　神夏磯典子
小西夏子　小西小雪　小林一夫　鴨谷瑠美子
近藤　一　酒井一壺　坂上高栄　北岡波留吉
坂本和樹　里　小路　佐藤誠一　木太久正一
沢田和子　塩満　敏　直原玉青　久保田恵美子
執行稲子　清水利武　庄野澄子　小池しげお
鈴木可愛　瀬尾照一　田頭良子　小林トメ子
高杉鬼遊　高杉千歩　高田博泉　坂野はつこ
竹森雀舎　田中正坊　谷　文枝　柴田英壬子
玉置重人　辻白渓子　辻川慶子　島村美津子
土田欣之　津守柳伸　寺井東雲　住田英比古
冨上光代　都倉謙三　豊福路子　瀬戸まさよ
中井彗梢　中尾飛鳥　中尾藻介　高須賀金太
中川　楓　中野欅子　鍋島十歩　高田美代子
西尾　栞　西川景子　西出楓楽　高橋千万子
西村梨里　橋本弘美　長谷川彰　辰己きよ子
波部白洋　濱田良知　原さよ子　丹波三千子
板東倫子　福田悦子　藤井正雄　常見はる枝
藤岡花楢　藤村亜成　藤村〆女　冨山ルイ子
福浦勝晴　古本修六　芳地狸村　中田たつお
堀　良江　堀江光子　前たもつ　西尾美与子
牧浦完次　桝本露児　町田達子　西田柳宏子
松田　巌　松永会美　水谷正子　西村左久良
宮崎弘直　宮西弥生　宮前秀子　平松かすみ
三輪通彦　村上剛治　籾山　隆　藤井一二三
森下愛論　楊井二南　安永暁子　藤田頂留子
八田　敏　山下途子　山添眉水　福元みのる
山本半銭　山本三郎　結城君子　古川喜美子
吉岡美房　吉村一風　吉村雅文　本間満津子
世森幸雄　綿野春香　宮崎シマ子
宮園射月芳　宮本かりん　村上ミツ子
望月友紀子　茂見よ志子　森川まさお
森中恵美子　藪内千代子　山崎寿々子
山下美津留　山本たけし　横田マリ子
吉田あずき　和田維久子

【兵　庫】青木公輔　秋元てる　去来川巨城
上田佳秋　氏林洋敏　大森一甲　岩倉キク子
小倉　藍　尾宮弘治　亀岡哲子　奥田みつ子
黒川紫香　黒田能子　児玉歌子　奥山美智子
杉本克子　椙元世津　須場秋寿　小畑よし子
住谷石舟　田中　薫　田辺鹿太　門谷たず子
田辺聖子　谷岡福子　寺西文子　河島いち子
時実新子　遠山可住　中田純次　久保まさお
長浜澄子　林はつ絵　原　宣子　小松原爽介
吐田公一　平田香子　平山繁夫　嵯峨根保子
保西岳詩　三崎規正　湊　修水　東狐恭仁子
山口美穂　山崎君子　山本義子　中川ヒサ子
良知良枝　西口いわゑ　春城武庫坊
船津とみ子　前川千津子　牧渕富喜子
松本ただし　山本ひさゑ
【奈　良】伊藤定子　榊原彗心　大村美千子
杉野睦朗　天正千楠　坊農柳弘　片岡つとむ
宮口笛生　米田恭昌　長谷川春蘭
【和歌山】青枝鉄治　池永正雄　岩本美智子
牛尾緑良　神平狂虎　木本朱夏　垂井千寿子
楠見章子　後藤正子　桜井千秀　野村太茂津
田中輝子　玉井豊太　野々圭子　山口三千子
福井桂香　福本英子　細川稚代　山裾嘉壽子
堀端三男　松原寿子　宮口克子　吉村さち子
三宅保州　森口恵子　山田高夫　山根恵美
【鳥　取】青戸田鶴　石垣花子　岩田輪多朗
奥谷弘朗　金山夕子　小西雄々　江原とみお
澤田千春　新家完司　武田帆雀　木村富美子
田中亜弥　土橋　螢　中原汲香　小林由多香
中原諷人　西原艶子　野坂なみ　寺沢みど里
林　荒介　林　瑞枝　光井玲子　土橋はるお
森田熊生　森田華子　八木千代　春木圭一郎
政岡日枝子
【島　根】尼れいじ　板垣草丘　久谷まこと
小玉満江　岸　桂子　坂本雪路　小白金房子
恒松叮紅　恒松素子　柳楽鶴丸　園山多賀子
原　章峰　藤井明朗　松本文子　舟木与根一
森　茂美　吉岡きみえ
【岡　山】青木良一　芦田照子　小山いわお
今井奎子　上原昌江　小林妻子　貞岡信太郎
田中好啓　越尾一男　恒弘衛山　寺尾百合子
寺尾俊平　浜野奇童　山田止水　土居ひでの
山田福世　山本玉恵　布元ふくみ
野田素身郎　長谷川紫光　矢内寿恵子
【広　島】小島蘭幸　藤解静風　流　奈美子
森田　文　槇田英詩　森井菁居
【香　川】三笠　緑　木村あきら
【愛　媛】月原宵明　竹田さやか
仲川たけし　宮尾みのり
【高　知】赤川菊野　町田尚友　柳川その
【福　岡】梅田宣司　外山あきら　井崎ミサ子
【佐　賀】仁部四郎　山門幸夫　山門タミ

ご芳志御礼

（順不同・敬称略）

木本朱夏・堀端三男・桜井千秀・三幸川柳教室・大坂形水・田中好啓・黒川紫香・奥谷弘朗・土橋睦子・佐藤奏月・川柳塔おっぱこ吟社・松村迷観子・中田たつお・波多野五楽庵・宍戸千草・上原逸・佐野白水・いずも川柳会・久家代仕男・薗田獏沓・寺尾俊平・ふあうすと川柳社・川柳塔とっとり・藪内千代子・川柳塔わかやま・藤井明朗・奥原雨人・西宮北口川柳会・翠洋会・竹原川柳会・新家完司・天根夢草・丹波三千子・弓削川柳社・白石春嶺・稲葉冬葉・大木俊秀・時実新子・保西岳詩・小西雄々・川柳塔まつえ・井上信子・川柳塔鹿野みか月・中原諷人・奥山晴生都大路川柳社・中尾藻介・森中恵美子・川柳塔唐津支部・鵜かご川柳社・川柳藤井寺・仲川たけし・番傘川柳本社・城北川柳社・本間満津子・神夏磯典子・片岡つとむ・礒野いさむ・山田良行・椙元世津・佐藤一粒・わかくさ川柳会・西村佐久良・時の川柳社・小松原爽介・北川弘子・川柳塔きゃらぼく・池田寿美子・田辺聖子・うみなり川柳会・月原宵明尼崎いくしま川柳会・藤本静港子・藤原童心社・西村早苗・内芝登志代・石倉美佐子・二宗吟平・佐伯みどり・橘高薫風・西尾栞

大空のこころ (39)

橘高薫風

この頃、女流川柳人も増えて十数名が葭乃選の「光耀抄」に投句、三句から七句ほどずつが掲載されている。

松山・武子、魚崎・吟女、大阪・寿枝女、大阪・勝女、松山・柳女、大阪・房子、岐阜・誼女、愛媛・愛女、大阪・スエノ、松山・白梅女、大阪・よし江、大阪・縫子、竜田・はつ女、といった名が列なる。

大阪　葭　乃

元日の風は真白に地をすべり
きり〳〵〳〵きり〳〵〳〵と姉の羽根
争闘を忘れず卓を囲む子等
　亡き父に（五句）
ウォッチも動かなくなったが父も死んだ
父はあらず壁ばかりなる父の部屋
死出の旅にも日本酒位あるか知ら
今ぞ知るかたくなな父慈悲の父
交々に孫がしかえる巻線香
　母の三十三回忌に父逝く
父と母同じはちすを疑わず

昭和七年の新春特集号は二百頁。「日本柳壇（百人撰）」と「私と○」の特集が出る。

「私と○」　世界は「私と○」で出来上っている。その○が何であるかが問題である。そこで同人社友にその○の解放を求めた。

私と本　　麻生　路郎

私が本に二千円の保険をつけてから、もう十幾年になる。焼けたら二千円は愚か一萬円でも買えない本もあるのに、一体これはどうしたことかと考えるとおかしくなる。命にさえ保険をつけていないくせに。

私と川柳雑誌　　橘本　緑雨

川柳雑誌の仕事は、本職で月給貰ってる方よりもずっと仕事は多い。私に不向な通信は日に十数本書かねばならぬし、訃弁と外交のヘタな私が交渉にも行かねばならぬ。編集、校正、会計等との仕事はどれもみな不向な事ばかりを黙って引受けてるが、これは路郎先生と本誌を思うからです。尚、物質援助や編集校正その他の雑務を喜んでやって頂く同人社友諸君の努力を思うと、奮起せずには居られませぬ。（このアンケート46人が書く）

日本柳壇百人撰　1931年の収穫

大阪　麻生　路郎

恋の罠あの眼だろうか眼だろうか
なあちろりこれから秋に親しもう
酒とろりとろり大空のこころかも

大阪　岸本　水府

大阪は号外配る旅戻り
妓一せいに鮎の骨をぬき
いさかいのまだひと言は午前二時

東京　川上三太郎

友だちのうしろ姿の有難味
嬉しやな子供を抱いて陽を探し
赤ん坊の正月は只陽が当り

東京　前田　雀郎

転寝の夜あたたかき松の内（喪中迎春）
熱の子にみんな居るよと云いきかせ
手の筋も淋しい時の足しになり（貧愈々酷）

東京　村田　周魚

家に居て飲んでればいい星まわり
叱られても雪やこん〳〵子の素足
硝子戸のくもりピアノも冬の音

神戸　椙元　紋太

神様へ親子五人と申し上げ
借金を思い出したり忘れたり
ストップに出過ぎた線へ立すくみ

他に阪井久良岐、井上剣花坊ら94名掲載。

川柳と固有名詞

川柳こぼれ話

田中正坊

大阪市都島区に鳴るギター

かなり以前のことと思うが、中尾藻介さんにお会いした時、この句をつぶやいたところ、「あんた、よう知ったはりまんな」ということになった。『中尾藻介川柳自選句集』によると、昭和42年作となっているが、おそらく昭和20年ごろを回想した句ではなかろうか。その頃の都島区には伝統を誇る都島工業と工専、阪大工学部のキャンパスがあり、北大阪らしくない〝文教地区〟であった。私はそこに住んだことはないが、仕事の関係でしばしば訪れたことがあり、都島という固有名詞からこの句が印象に残っていたのだと思う。

天王寺駅に待たせてある男

東能勢村の郵便受おもう

美しいひとに会うなら神戸線

自選句集をパラパラとめくっただけでも、固有名詞を使った句が多く、人名もある。

高村光太郎わが凡々の日に死せり

宇野千代のように生きても同じこと

大山竹二とおんなじ咳をする男

古来、俳諧では蕪村が数詞と固有名詞の名手として知られる。

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉

はその両方を含む秀句であり、数詞はさておき、地名・人名を詠んだ句が多い。

池田より炭くれし春の寒かな

絵団のそれも清十郎にお夏かな

ところで、川柳と固有名詞については、故亀山恭太氏が『番傘』に連載した「初心の方のための川柳作法」に二回にわたって書いている。「(固有名詞)と句の内容がマッチしたときは、複雑な内容を短い言葉で表すことができ」、メリットとして、①現実性を帯び、句が生き生きする②そのふんい気によってムードをかもしだす③作者の好みや心理状況が強調される—を挙げている。

実例も示したこの解説には、付け加えるなにものもなく、人名としては作家、画家、音楽家、俳優と作中人物・劇中人物があるとしている。そして、気を付けねばならないこととして、①動く句にならぬよう②報告句・説明句におわらぬよう③ひとりよがりに陥らないよう、戒めている。

著作権　芥川家の子は育ち

これは、固有名詞の使い手として知られる磯野いさむさんの作品で、次の句もある。

坑夫だった人に職あり城東区

中之島わたしの若い日の童話

杉村春子の気ままが通る文学座

大阪の地名・人名ばかりを集めたものとしては、藤沢桓夫・橘高薫風共著のカラーブックス『川柳にみる大阪』がある。

道頓堀の雨に別れて以来なり

田辺聖子さんの『中央公論』連載のタイトルにもなった岸本水府の句だが、その中からいくつかを紹介しよう。

思い出の橋ばかりなり水都祭　麻生路郎

大阪に花の里あり通り抜け　本田渓花坊

逢う場所は少しキザだが紀伊国屋

三句目は、故谷垣史好さんである。実は私も、数詞とともに固有名詞を詠み込むのが好きで、『なにわ川柳—私の百句』のうち、二十二句もある。統計的に処理しやすいので、この句集を挙げたが、つまり二二パーセントである。例によって〝我田引水〟の私の句。

ネオンの灯わがふるさとは中央区

ヒロシマの時計が指している数字

モナリザの微笑は何の返事だろう

秋はやも入江侍従長が逝く

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月**25日**締切・30句以内厳守。二百字詰
原稿用紙に清記をお願いします。**編集部**

佐川川柳　赤川　菊野報

川下り舳先のしぶき虹が立つ　恒子
団らんに温みを運ぶ母の顔　竹萌
笑顔しか思い出せない人が居る　佳風
留守番の電話へ口調改まり　功
父と子の心をつなぐ糸電話　幸泉
指切りを守る小指がいじらしい　千鳥
長電話鍋を忘れていた不覚　快風
水音を立てる蛙がいなくなる　義晃
あの日から受話器とるのが怖くなり　菊野

岩美川柳会　羽津川公乃報

娘の自慢せずに犬だけ自慢する　孝由
お隣が犬のビフテキ買っている　照女
愛するもの孫より犬ときめている　美代子
犬連れて走る暇もない生活　睦子
番犬も黒いお金に尻尾ふる　公乃
野良犬が人を信じぬ目で睨む　単車
冗談もうかうか言えぬ犬がいる　芳江
飼い主によく似た犬でよく吠える　希久代
朝飯がまずいと犬に攻められる　大漁
善悪を犬がクンクン嗅ぎまわる　喜与志
回覧板が犬の機嫌をとっている　はるお
飼い犬に噛まれた傷が治らない　忠良
夫より犬を愛して叱られる　きみ子
負け犬へ秋が深まり行く孤独　美恵子
米泥棒に噛みつく犬を飼っている　螢

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

瀬戸の海春夏秋冬つつがなし　ひかり
禁煙と書いてキセルをプレゼント　くに子
不況不作財布に聞いてショッピング　ふみ
良いように頼むと明治座を外す　吟笑
ああすれば良かったなどと過去思い　迷貫
寒風に心打たれてアッタマル　小6なみ子
車ではくなとお酒が出るらしい　あきら
捨てて来た仔犬気になる虎落笛　マツエ
てっぺんは知らぬが裾野よい暮し　かおり
兎小屋未来にかける太い夢　マサエ
お多福も身体は舶来ありがとう　チカエ
不況風ボーナス何所かへ飛んでゆき　正雪
亡くなった母の大きさ身に滲みる　よしみ
紅葉を引き立てて居る滝の水　治延
島一つ海に浮かべば絵にもなる　文仙
パチンコで勝ったら島を一つ買う　白柳子
アルバムの島の娘は妻の座に　放任
バスツアー窓から見える瀬戸の島　いさむ

川柳後楽吟社　従野　健一報

オーロラの中で赦し合うふたり　草風
男の靴は罪のかたちにちびてゆく　拓治
家風にも馴染んで箸はよくしゃべる　美智子
合いの手がぴったり揃って共白髪　たけ志
酌ぎ上手ピッチ早めて酔わす気か　哲郎
豊作を頼んまっせと初詣　秋月
靖国の社頭最後か戦友会　柳五郎
一本の茸と流れてゆく懺悔　正秀
究極に話題が過去を例に取る　博友
ポケットに入れると僕の凄い夢　道博
大過なく人生という群れを過ぎ　佐加恵
日焼けした父の笑顔を待つ夕餉　桃風
高齢の職は汚れた靴が合い　青銅
神だけは愚痴を言わぬと信じてる　吉則
髪赤く染めて女の城築く　鮫虎狼
火の矢飛ぶ苦境乗り切る父の腕　照路

岸和田川柳会　田中　文時報

叱ってる方が心で泣いて居る　文時
サイレンが野次馬連れて火事現場　朝一
お隣へ止ったらしい救急車　月子
サイレンが師走の街を突っ走る　勝晴
きっちりと尺とり虫は寸きざむ　京
音楽を入れて寸劇生きてくる　さよ子
寸借の孫には弱くなる祖父母　浪速子
大寸の間抜けな顔がうえている　狸村
亡き友をしのびアルバム整理する　昭二

忌が明けて母の遺品を整理する　通彦
写経して心の整理するつもり　萬的
相談される内が花よと聞いてやる　甚一
人生相談ここにも僕に似た男　ダン吉
雑兵の相談今夜飲む話　東雲
青い空だ恋の相談でもしよう　一弥
人生相談暮しの恥部をさらけ出す　白光子
相談に乗る気がしない得手勝手　二南
肝臓と相談をして飲んでます　天笑

川柳岩出　児島与呂志報

きっかけを心の奥で暖かく　悦男
きっかけは頭ひとつを下げただけ　綾子
この一年始末するには多すぎる　幸子
バリケード組んで足ぶみする庶民　春子
始末書の真意は言わぬ貝の口　精子
きっかけをくれた恩師の温いペン　和子
不況下で足踏みならまだましか　紳一郎
仲直り飴玉ひとつ持って出る　千鶴子
後始末終えて安らぐ忘年会　英子
あと始末誰かがすると垂れ流し　正直
足ぶみで霜焼けの足こらえてる　正義
不況風足ぶみもせず駆けてくる　重徳
福寿草足ふみながら春を待つ　保子
きっかけをくれた貴方は福の神　昌子
きっかけを逃がしてばかり青い鳥　愛子
偶然のきっかけ旨く話成る　瑞穂
始末書でかたがつくなら安いもの　忠雄
一年の始末つけとく鐘をつく　与呂志

川柳東大阪　森下　愛論報

旗まいて男は傷の深さ知る　信治
返り血を浴びた男の旗がある　湖風
安っぽい正義感だと旗は知る　恒明
フルムーン夫婦仲良く五十年　真柳
フルムーン今宵は妻の酒の酌　太一
フルムーン送る家族のVサイン　隆
星が寒くて街は不況に慣らされる　作二郎
星くずを集めた魔女はいくのかも　度
斬られ役顔に似合わず人情家　高尚
ストレスを酒でまぎらす斬られ役　章久
一瞬のアップにかける斬られ役　美子
斬られ役屋台で政局斬っている　猪太郎
飽きるほど添うて味出る夫婦仲　信博
もう飽きた変わった齢聞きたいな　東雲
飽きられないようにたしなみ忘れない　文秋
飽食の子へ読んで聞かそか方丈記　文子
しみじみと妻を見直すフルムーン　頂留子
星空が好きな女と腕を組み　愛論

三幸川柳教室　三宅　保州報

内気ではないがやんわり猫被り　昭枝
見合いではのの字も書いた妻だった　正雄
言い難いことをあっさり言う内気　かなめ
内気でも釘刺すこつは知っている　嘉寿子
腕白も内気も我が家みな宝　よし子
一言が言えぬ人生空回り　町子
内気と内気まとまりませんこの話　千枝子
ペン持てば仕事の鬼となる内気　鉄治
火の章を綴る内気な子の日記　朱夏
敷かれてるふりして添うている役者　悟
バラ一輪添えて手紙がもえている　桂香
添い遂げるつもりが揺れる火の出逢い　みね
甘い顔見せれば無心言い添える　由梨
やんわりと言い添え釘を刺しておく　千秀
地唄舞老いの深みが花添える　茜
手を添えて矯めて巣立を送る母　初子
もっと元気な顔しろと言う鏡　美寿子
フィアンセとポチも一緒にいる鏡　満州子
本心を聞いてしまったコンパクト　当代
真夜中の鏡へつづくサスペンス　章子
過ぎ去ればきれいにみえる万華鏡　三千子

佳句地十選（2月号から）

秋元てる

賄賂とは書いてないけど判るはず　一閑
誠実に生きて指先太くなる　恵美
夢を買う列から離れパンを買う　美子
百姓の味方で少し胃が痛い　叶
別姓のままで二次会三次会　あずき
来年の約束をして風邪をひき　しげお
遠眼鏡　余計なものを見てしまう　六点
ここからは白紙の地図を子に渡す　春枝
時刻表　男は風になりたがる　拓治
家計簿は小さな嘘を知っている　りつえ

逢えなくて鏡の中に雨が降る　親路
もういちど輝きたくて拭く鏡　恵子
デフォルメの女写している鏡　高夫
乱反射ばかり反抗期の鏡　百合子
甘えてるひとへ妬心が燃えてくる　美智子
ときどきは甘えて夫婦丸く住む　恵美
おとなしい地球に甘えすぎている　保州
肩書きの甘えにあった落し穴　公子
鍵っ子がまとめ甘える日曜日　和子

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

ずっしりと重いあんぱんいつも買う　冨美子
様々なパンに平和をかみしめる　朗子
幸せもゆとりもくれるパン屋さん　恵子
笛吹けどおどらぬ雀一羽いる　八重子
笛吹けば坊やも犬も振り向いた　時子
花いちもんめ笛の音色がやせていく　花子
笛を聞く亡母の躾を思い出す　てい子
秋いっぱい笛はいまだに鳴りやまぬ　亜弥
物真似の笛に個性がでてきたぞ　夕子
傾いた廂を笛は出て行かぬ　荒介
ひとときを幸福駅で立直る　玲子
駅一つ一つまた越え旅つづく　春枝
うどん屋も兼ね村の駅生き残る　天雀
足早に無口が消える無人駅　千春
始発駅の別れのブルース鳴り止まぬ　瑞枝
駐車場が出来たら汽車に乗りやすい　正子
冥々と終着駅は確かなり　ふみ
青春が落ちてる駅に降りてみる　高代
雑踏の駅は想いを受けつけぬ　ゆき
改札にお礼をいって駅を出る　まゆ
駅から届いた一枚の招待状　日枝子
いろいろな顔が出て来る朝の駅　弘子

川柳塔唐津支部　久保正剣報

帰省ラッシュ若者消える大都会　ふさ子
山茶花の散るを見つめる北の宿　喜久亭
煙草税とんだところに火をつける　紀一
通院を続けて薬依存症　治幸
無心にはなれず無心と書いてみる　青琴
話下手に糸口見つけ水向ける　ちよ
向う岸おいでおいでの灯が紅い　四郎
幽玄をしばし味わう今朝の霧　實
金のなる木蔭で出来た巨大ダム　幸夫
初春の白い心に紅をさす　晴子
日輪へ合掌一家恙なし　虹汀
土いじり何時にお茶を飲みますか　旭恒
夢をもつ犬の尾っぽは動かない　久仁於
鶴達に国境もなくビザいらぬ　タミ
訪問の教師へ庭の柿をもぎ　高明
佳い年を召せと宅配運気そば　杜竜
判決を躊躇していた計の安堵　正剣

南大阪川柳会　金井文秋報

生かされていると思う日花を買う　楓楽
胃カメラで覗いてみたい敵の肚　寿美
美化の波うちのぼろ家ほっとけず　秋子
取りあえず汚いものに囲いする　直子
掘炬燵妻のみこしが上がらない　志華子
子どもより大人の躾出来て美化　庸佑
夕焼けになって臨時の仕事する　真柳
山小屋で雪崩の音を聞いている　度
姑の一語で胃痛起こり出し　真砂
故里は美化などいらぬ土の道　千里
なにもかも美化されている未来図で　恒明
酒好きへ胃カメラ恐いことを言う　文秋
身動きの出来ないような嘘を言う　咲
嘘がかたまり身動き出来ぬお父さん　東雲
生きる欲今年もつくる予定表　勝美
ゲートボールに生きる喜び見つけたり　文枝
漂流物つかまり生きて自信つけ　明星
足止めくった臨時ニュースの旅鞄　シメ子
身動きをしたら幸せ壊れそう　三男
不況風臨時雇いの寒い首　柳伸
臨時ニュース茶の間の心揺れている　悟郎
臨時収入つましい夫婦のフルムーン　トミ子
生き甲斐を旅にもとめる知らぬ土地　シマ子
米輸入臨時と言わせぬ足がかり　正好
身動きが出来て再起の予定立ち　信博
生きる道運と宿縁待っている　清水
御堂筋美化を手伝う彫刻家　岩信
仕方なく病気と仲良くして生きる　久子
ありがたい長寿社会を生かされる　智久

川柳塔わかやま吟社　宮口克子報

ひと間からはじめた妻に無駄がない　豊太
約束を果す封筒軽くなる　度

海峡を越えて涙を振りはらう　寿子
招かれて途方に暮れる福の神　二南
福笹に今年を賭ける男坂　白光子
お多福の妻でも俺の宝物　稚代
福耳の嫁が新風持ってくる　紀美女
昨日敵今日は味方の旗を振る　正博
願い事まだ一つあり鈴を振る　信子
もう赦すつもりで首をたてに振る　英子
ご近所を振りまわしてる軽い口　裕美
封筒の押し花旅の日の余韻　一二三
封筒をトイレで開ける事がある　射月芳
寿の封印嬉し角封筒　三男
封筒を開けず読みとる母の勘　三千代
身上げ未だ付いたはじめて着た晴着　呑天
ときめいてはじめて出合うような海　公子
試行錯誤はじめて描く無題の絵　輝子
はじめから出直す決意山動く　栄美子
はじめから決めた道ですひと筋に　光代
愛からのはじまる日記愛で閉ず　紀久子
ことはじめ流れて過去となる速さ　好笑
一輪のバラから始まる恋日記　佐代子
つまずいてはじめて知った人間味　三枝子
十年もたてばはじめた事の良さ　克子

いずも川柳会　園山多賀子報

神さまと握手してくる初詣　叮紅
初出勤きびしい春が始動する　明朗
初春も母の味から明けてくる　芳枝
初活けの小菊ひと役買っている　きみえ

喜んでやがて他人になる宴　章子
喜びに他人ばかりが酔うている　水煙
いい話なくて喜劇が好きになる　ちえ
初せりに活気つけてる祝酒　きよし
喜んでくれれば満ちる僕の海　ちかし
喜びの涙は涸れることがない　与根一
喜びは一合飲めるほどに癒え　一葉
喜んで友の厚意を着て歩く　清子
きざはしの高さに祈り深くなる　多賀子
我儘な祈りへ神もそっぽ向く　れいじ
人に生れて祈る言葉を与えられ　文子
ひたすらに安産祈り産着縫う　愛子
毎日が平和で視力衰える　雨学
父さんの背丈を越えて家平和　満江
大根が崩れず煮えた日の平和　草丘
書き初めに自信たっぷり書く平和　蘭水
朝毎に蛇口に水が出る平和　寿美
共稼ぎ家事も分担平和です　茂美
明日生きるためのお米を二合磨ぐ　青湖
健康で生きる証の米を研ぐ　房子
米を研ぐ母のリズムが乱れない　鳳笙
米飢饉悪い奴ほどよく肥る　義朗
米櫃の米に命を睨まれる　圭詩朗
新米をふっくら炊いて仏さま　三代
米一合炊いて生活の糧にする　代仕男

ほたる川柳同好会　井上直次報

狛犬も何か言いたい〆飾り　明光
初明りまず愛犬におめでとう　博史

野を走り夜空に吠えよ僕の干支　馬洗
犬にまでベンチャラをして貰う椅子　万之助
飼主を物語ってる犬の糞　清史
袋持ち散歩に出るが飾りだけ　洋子
子が育ち夫の愚痴を犬がきく　しずえ
犬と猫仲良く眠るうさぎ小屋　紫水
当てにせぬ願かけて来た初詣　眞郎
木枯しが初雪さそう過疎の里　一笛
大吉が出るまで粘る初詣　英子
初春を食べて量りを狂わせる　幸子
初雪の早やさらさらと樋伝う　昭子
京の春かんざしゆれて初の舞　恭子
歳月が足をからます舞扇　福一
宙に舞う時は監督冥利尽き　純次
発表会群舞の中の孫探す　正安
竿のシャツ母子揃うて舞うている　竹二
お神楽の巫女はきりりと舞納め　保子
雪が舞う全て包んで無に返す　(藤)桂子
親しみを込めた視線で安緒する　吉太郎
親しげに手術しようと言う主治医　直次
ヤングとは親しくなれぬまま老いる　方郎
父よりも母と親しい息子たち　祥司

尼崎小園川柳会　立谷勇次郎報

新しい靴真直ぐに歩いてる　夢之助
青い海輝く日の出漁に汗　十四郎
四季四季に趣向を変えて飾る窓　紫香
合格証飾る場所だけ空けて置く　弘治
飾り気のないカアサンで力もち　向西

初孫を飾って見たい雛祭り　フクヨ
二日酔い飾る言葉も忘れてる　ミサ子
先生の新年やる気を飾り見る　美々
見栄をはりサイズに合わぬ注連飾り　尚利
子沢山リフォーム上手で皆おニュー　幸代
頭切り落す包丁妻がもち　定人
頭から噛まなくなって父も老い　鹿太
飾ってもあんたあかんと影が言う　勇次郎

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

買い替えた毛布で初夢二度も見る　一笛
くるまった毛布で妻と寝正月　尚利
お隣と同じ毛布が干してある　すみ
悲しみの涙と知っていた毛布　芳子
人生のはじめはみんな素っぱだか　まさお
はじめから気乗りがしないボールペン　鹿太
枯野の風は別れ話に触れたがる　タカ子
本物の心なかなか触れられぬ　キク子
慰める言葉も肩に手を触れる　白渓子
バイキングついつい皿に盛り上がる　吉太郎
うっぷん晴らしの的にされてるかけた皿　昌子
ひびのある疲れた皿が捨てられず　伊三郎
気短と勝気が割った皿の数　勇次郎
父祖からの皿が出揃うお正月　栄
子の夢を盛るには小さい父の皿　〆女
お子さまは日の丸立てた皿が好き　修水
子らよりも小さく盛った母の皿　諷云児
欠け皿でよしお地蔵さまに花がある　杜的
例年のとおりでよろし祝箸　正子

自販機に仕事をさせて寝正月　石舟
七福神　枕の下で知らぬ顔　美江子
東宮のお庭に待たる鶴　フク子
遮断機で同じ思いの目を合わす　正治
病癒え医師と患者の税談義　渉
やがて娘は巣立つ私に戻らねば　澄子
あの人を待ちこがれてる柳箸　英子
子がくれた蘭を朝夕置き換える　行隆
注意し給えコンニャクに角がある　しげお
宙づりの演技で終るこの世紀　正一
怖れつつ妻の乳房の一周忌　よしお

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

冬休み餓鬼大将が見栄を張る　孝由
どの部屋も灯りがついた正月だ　弘子
モンペはくポーズが母によく似合う　信江
温かく見守るひとの中に居る　野草
鼻ぐすり届いたらしい効いている　喜与志
年金の範囲を越そう越そうする　由多香
お手並みの鮮やかなひと褒めちぎる　睦子
蟹づくしむさぼる口が話せない　正恵
凜と咲く花が生きろと言っている　瑞枝
リハビリへ犬も一役散歩連れ　孝男
てっぺんに届く笛なら吹いてみる　一京
三宝の呼び声となる鐘の音　隆風
子の夢を生む羽子板の絵がゆれる　八重子
羽子板で遊ぶ私は少女になる　節子
羽根をつく音の余韻が耳にある　かつ乃
寒い日のメニュー今夜もまた鍋か　秋女

寒いことなどつらいとは思わない　艶子
夜の樹に凭れて鈍器寒かりし　荒介
寒の水まだ長寿するために飲む　汲香
大寒だ雪の情緒がほしくなる　智恵子
炬燵から寒いニュースを聞く蜜柑　くに子
寒風に晒して欲を削ぎ落とす　完司
三文判で上手に宝隠している　富恵
奥底に宝をみんな持っている　しげる
夕焼けの浜に千鳥のわらべ歌　三千代
鳴り砂に影を重ねて千鳥聞く　孔美子
千鳥足隣の犬と喧嘩する　実満
行きはよいよい帰りは千鳥足になる　はるお
忘れ得ぬ女は千鳥の帯しめて　武子
さよならと千鳥に言ったのは誰だ　螢

京都塔の会　松川　杜的報

品のよい女の風に流される　諷云児
取替えはご免と書いた見切品　ただし
品を変え手を変え刑事攻めたてる　倫子
夜鳴きそば笛がわびしい暮れの街　〆女
暮れるのを待って屋台のラーメン屋　芳子
鬼笑う話が続く暮れの市　武庫坊
道連れの遍路と暮れる寺に着く　紫香
戌年に期待をかける除夜の鐘　英子
言い訳は今年もおなじ年の暮れ　英一
真相を少しおくれて知る世間　求芽
渡る世間仏も鬼も居て面白い　杜的
切り出せず世間話をして帰る　正坊
あなたのもとへ走ろう世間体など捨てて　礫

世間並と言う言葉にはひっかかる　栄
過去の貌世間は寡黙になるばかし　真柳
世間体構えば金が消えて行く　圭坊
悪い事出来ぬ世間の狭さ知る　庸佑
恵まれた世間の風に生かされる　年代
世は不況いい話などない世間　飛鳥
よく似てる話世間にたんとある　白渓子
地下足袋で歩く世間が性に合う　しげお
散らかった何時もの部屋で息をつく　てる
深み行く秋へ日課の落葉はき　笑子
過去払うようにはらはら大銀杏　達子
雪が舞うこころありげに雪が舞う　水客

西宮北口川柳会　丸山よし津報

山小屋のサービス囲炉裏の火が温い　武庫坊
喝采の未練が耳の底で揺れ　〆女
期せずして葬の列から出た拍手　富喜子
花束も拍手もないが元気です　房子
乾杯の拍手にまじる紙礫　たず子
時々は自分に拍手してあげる　みつ子
神様が転び拍手をしてしまう　鬼遊
産声と共に拍手する廊下　紫香
そんな事誓えまへんと飲むお酒　キク子
その度に誓う男の細い首　ひろ子
宣誓す決意の中にある闘志　春蘭
もう逢わぬ誓いが胸をしめつける　諷云児
ほのぼのと花びら餅は春を呼ぶ　義子
ペン先へ今ほのぼのと夜が明ける　はつ絵
産声もまじりほのぼの年が明け　能子
ほのぼのと椿が白い床柱　絹子
数え唄孫とほのぼの柚子の風呂　哲子
寝たきりへほのぼのとした噂選る　てる
初夢の亡母とほのぼの長話　佳秋
ほのぼのとサンパツ代を払ろてはる　しげお
ポツリポツリと父の本音が酒に出る　澄子
犬と散歩犬とお喋りして帰る　ルイ子
初詣たこ焼食べ食べ帰り道　江美
鍋磨くとても淋しい夜のこと　いわる
缶ビール妻の寝息が気にかかる　芳子
針千本飲むと言うたは誰でした　杜的
根回しが足りずチャンスまだこない　正とし
世間の目気にして見栄を少し張る　道胤
どぶ板を鳴らして友が来てくれる　鹿太
孫の絵が描き添えてある年賀状　正坊

川柳ささやま社　酒井靖子報

鬼さんの手のなる方に甘い汁　とよ子
腰ぴたり決って冴える大太鼓　純子
困ったらきっとおいでと言うたきり　恵美
神さまのような人にも裏表　ふゆ子
八十の峰暦足場にして登る　素水
あと一歩ゆずれば風のおだやかさ　貞子
生きる証ほしくてこつこつ積木つむ　ヒサ子
交友のかけ橋友が待っている　和子
厨の灯こつこつ拾う老いの朝　とみ子
こつこつと生きる笑顔の車椅子　八重子
こつこつと積んだ墓標は崩れない　冨美
惚けたかな日めくりの丸解らない　芳郎
暦には載らぬ二人の祝い事　市三
交流のどっちも過疎の空が澄み　可住
花ごよみ繰ってわくわく種を蒔く　靖子

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

泥舟と知って乗るのも母の愛　〆女
乗りやすいたちで病いを吹き飛ばす　年代
乗り換えのきかぬ路線をひた走る　武庫坊
風に乗る噂は軽いシャボン玉　よ志子
五寸釘おだてにのったことがない　しげお
波に乗れなくて作り笑いをする蟹よ　恵美子
やさしさの裏を返せばお人好し　漠沓
優しい友に押されて学ぶ車椅子　波留吉
優しいが命令してる妻の顔　彰一
鯉に麩をあげる優しい顔をして　紫香
魂胆があって優しいのは困る　白渓子
優しさを繕っている娘の日記　節子
優しさをわけるみかんを半分に　スミ子
脇役で通した母の背の丸さ　芳子
花手桶亡母の姿をまなうらに　英子
大津絵の鬼の姿に風邪を引く　瀧小
嘘もよし消しゴムで消せる嘘ならば　杜的
優しさが消えて世間は鬼だらけ　一閑
潮時に消えて拍手が幕を引く　ひでお
歳月の流れうわさを消しながら　英一
決断したらしい貧乏揺すり消える　太茂津
ご無沙汰を詫びてる妻の長電話　春風
開発に島が歪になる怖さ　かおり
心よりやはり美人がいいですか　ひかり

北風に裾なぶられる島遍路　あきら
伝言板文字が荒れてる怒ってる　庸佑
残照の墓温い家族とひとり言　静江
躓いた石で悟った母の愛　澄子
夕闇にまぎれる人間の背中　薫
悔い多く残し今年も夕ぐれる　諷云児

川柳大阪　川端一歩報

世直しへ「此処掘れワン」の欲しい新春　雅万
いぬ歳へこの一年も恙なく　笑風
母囲む膳は話題のあり余り　与呂志
揉め事を実家の母に知恵を借り　亮太
紅梅と松竹生けて屠蘇を酌み　東風
初詣今年はやるぞと願いこめ　涌一
一億円夢がはじけて年明ける　末坊
来年は実り信じて鎌を研ぐ　我勝
先輩が背伸びしなやと温かい　雅巣
愛過熱一人の息子枯らしてる　希久志
傘寿喜寿賀孫も交じえ祝膳　三十四
一生の心に刻む師の訓え　本蔭棒
真実を隠して嘘を言う勇気　柳昌
出たあとの電車待つ間に柳を詠む　美花
見かけない子どもも遊ぶお正月　てる佳
鍋底も年玉だけは削られず　好裁
受験生おとそ気分も三が日　まさお
四日目を書き終え閉じる日記帳　青道
戦争の実話をしたい生き残り　しげお
島原に実りのもどる日を祈る　まつお
ヤケドする前に財布は預けとく　川童

花も実もこれからですの心意気　鉄心
鍋囲む湯気に本音が解けて出る　金太
まだかいなの顔も囲んでいるベッド　重人
現実を静かに見つめ昼の月　洛酔
悪政に呑み屋の空気過熱気味　敏
恋してる女の顔は光ってる　柳弘
外国に囲まれ白旗あげるコメ　比呂志
実力は上だがいつも斬られ役　美津留
初夢は川柳大阪のジャンプ　一歩

川柳塔まつえ吟社　恒松叮紅報

まといつく捨て犬拾う雨の朝　米子
大年の飛翔へ旗は巻いておく　太泡
子が巣立ち犬に次男の名をつける　桂子
大年の故か私はよく吠える　清子
もの言わぬ犬が犠牲にさせられる　邦代
明けて戌幸せ願い夫婦旅　淳
頂上の優しい風に気を許す　昌枝
頂上を目指す靴紐締めている　芳枝
頂上でピッケル立てた日の歓喜　房子
頂上を極める茨道が長い　妻子
頂上の虹を求めて靴をはく　たつみ
頂上に立てば敵にもよく見える　茂美
可能性秘めた真白い暦はる　知恵子
不景気で暦も形が小さくなる　友子
暦めくれば私の明日がある　文子
聖書より暦のおしえ重くみる　雄々
折角の話に暦が邪魔をする　早苗
トイレにも車庫にも暦かけてある　満江

孫曾孫私を気遣う年賀状　長三
初恋の人の賀状が舞い込んだ　静江
先生がまだ生きていた賀状　義良
手に余る賀状頂く生きている　寿美子
友の訃を賀状の隅で知らされる　きみえ
晩年は恵まれている年賀状　与根一
めでたいと言う事にしてのんでいる　鶴丸
おめでたく出来て人間損ばかり　多賀子
めでたい日梅一輪を嬉しがる　静恵
めでたさも薄れて年のせいにする　みえ
めでたさと重ねる春がすぐそこに　畔
盃が少し度を越すめでたい日　叮紅

川柳塔とっとり　武田帆雀報

朝シャンで洗った髪が肩で舞う　崇
ものは言いよう角を洗えば丸くなる　揚芝
自分史に洗い流せぬ傷がある　山人
灯台を洗う男の海が荒れ　銀嶺
傷ついた泥を洗いに旅に出る　静生
ハンカチを洗って生れ変るんだ　しげる
身とこころ洗う大きな森へゆく　一京
大晦日こころ隅々まで洗う　圭一郎
鐘の音の永遠の別れに咽び泣く　黙光
鐘強くついて女の願いごと　孝由
道成寺悲恋の娘鐘をつく　一枝
二つ打つ鐘の一つはご先祖へ　友夫
山寺の鐘楼大根干してある　侑里
百八つ寝床で鐘の音を数え　輪多朗
警鐘が蟻の穴から鳴っている　帆雀

火のドラマ大きくなれと鐘を打つ　螢
世の乱れ鐘は何千撞くもよし　大漁
主婦の椅子こわれてばかり修理する　正恵
主婦と主婦　笑顔で憎み合うことも　享
妻病んで主婦の重さが身にこたえ　多可志
ふっくらと豆を煮る日の主婦の幸　明美
特売へ主婦専用の非常口　孝男
主婦降りて見れば淋しい暇ができ　喬水
スーパーで会う女医さんは主婦の顔　俊路
午前五時主婦の自覚に目が覚める　艶子
主婦の座にいて消費税許せない　由多香

サークル檸檬　小林　一夫報

その時は飛んで帰るという家族　智子
飛翔する天女の衣つかめたら　雅子
父はもう紙ヒコーキをとばさない　正坊
初春を海外へ飛ぶ一番機　慶子
ふと我に返り失速してしまう　あずき
愚かなのはぼくで飛ばない気球　薫
飛べない孔雀があんなに美しい　ゆかり
春の水キラキラ夢を語り合う　みつ子
日々好日いびつな丸を描きつづけ　喜美子
知らぬ間に年を重ねていくような　いわゑ
平凡だから平凡なこと悩む　智恵子
恋やせん冬には冬の花が咲く　希久子
コードレス軽い約束してしまう　楓楽
ざわざわと風　萍の闇あたり　千代
寒日や職人湯気立つ椀もてり　一夫
弟橘媛を恋せし日を覚え　薫風

はびきの市民川柳会　榎本　吐来報

長い目で見れば辻褄合うてくる　昭子
ライトアップ世界遺産に映る寺　昇
政治家をやめて浜幸丸くなる　聡
買って来た土産アベノで売っていた　志洋
お人柄だけではとれぬ国の舵　かつみ
ブルータスああお前もか自民党　夏秋
年賀状書いて今年も十二月　シマ子
休まずに出勤したい胸を抱く　治代
下戸なのよ忘年会は渋い席　忠宏
忘年会参加出来ない訳がある　厚子
乾杯の音頭が既に酔っている　二南
忘年会トリは旦那の黒田節　利武
忘年会リーダー達はよく踊る　美津留
ブレーキをかけて止まらぬ恋の路　秀夫
バス旅行急ブレーキから盛り上がる　扶美代
ブレーキの利かぬ男で一人者　一壺
ブレーキの時期むずかしい育児法　キミ子
ブレーキの利かぬお酒がうま過ぎる　悦子
二次会へブレーキのない顔揃う　吐来
奥さんに話せばすぐにカタがつき　重人
奥さんの機嫌明るい朝となる　ダン吉
草原に立てば優しい顔になる　泰子
ペンペン草もやっぱりチャンス待っている　美代子
曲げもせず本音で生きた平机　たけし
土壇場で男女の本音食い違い　敏
教養が本音の邪魔をして困る　晋
どこまでが本音笑顔に遊ばれる　絢子
更衣室制服脱いで出る本音　みつこ
意地悪は本音を曲げた青い恋　りつえ
人ごとのように本音を言ってみる　辰子

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

風鈴に野次馬も乗るヘボ将棋　末貞一
大器晩成やる気になって若返る　向西
透析の友がやる気の便りくれ　昌子
誘われてやる気になった趣味の会　尚利
影武者の手綱がやる気左右する　正治
あしたからやります主夫の割烹着　弘治
少年をやる気にさせる寒稽古　十四郎
呼ばれてはかさね言葉を叱られる　六浦
愉快さを赤児身体で物を言う　いわお
子育ての昔愉快に語り合う　よしゑ
窓あけて愉快なニュース待っている　夢之助
あべこべに着てはボタン掛け違う　勇次郎
ジャンボくじみごとはずれてつながなし　修水
座を沸かす真面目な人の隠し芸　まさ
被災地へ伸べる情けの手が温い　すみ
戌年と知って図太くなった犬　鹿太
もう俺の出る幕がない子の歩幅　石舟
手も足も出さぬダルマにある勇気　澄子
両の手をポケットに入れ野次ってる　紫香

城北川柳会　吐田　公一報

手鏡を覗いて齢の差を思う　トヨ子
人情が時代の波に消されそう　靖子
二次会を逃げて家族にすしの折　秀夫

年の差など言うて居れない深い仲　仙吉郎
かぶと虫一つゆずって仲直り　一枝
食えるものなんでも食った逃亡記　史風
両方に持たせてやりたい優勝旗　満津子
人情は薄くお腹は太ってる　ふみ
消しゴムで消して逃げたいかくれたい　昭子
人情家政治家にはなれません　政子
又一つ重ねる年の物想い　登美子
追いつける距離だけいつも負けておく　典子
虚礼とは思いたくない年賀状　倫子
衣きせた言葉に傷つく時もあり　あい子
死んでもよいとまた言うたはるおばあちゃん　柳影
流された位置で落ちつく河原石　白峰
亡き夫を偲ぶ夜長のコップ酒　八重
減塩減糖一さじ毎に愛を盛る　春蘭
旅の宿窓辺に樹氷咲いた朝　久留美
銀世界オリンピックの夢を見る　頂留子
噛んでみてやっぱり苦い糖衣錠　ただし
桜もう冬日に命抱いている　達子
仲直りした手の温さ残る今朝　公一

翠洋会　渡部さと美報

護衛つき免許切替殿の意気　綾子
ふるさとの訛りで祝う雑煮餅　光子
祝窯の筆もせわしい絆の輪　絹子
土砂降りの音でてんぷら出来上り　宣司
初競馬今年も馬がそっぽ向く　佳秋
大学で落語を習い卒業し　兼治郎
母元気見送るまでは負けないぞ　東雲

梅一輪香って冬は通りすぎ　一美
図書室にマンガ並べる世になって　叡子
対岸の火災と言えぬロス地震　久峰
佗助を生けて喪中に見舞書く　登志子
お元日さすがに父も叱らない　恭昌
攻めるより守る戦がむつかしい　正坊
ネクタイを締め直さねばならぬ客　正雄
骨ないがゆらり豆腐の存在感　さと美
大吉と風邪もろてくる初詣　蛙
美徳とはなにか消費か清貧か　英一
就職の依頼も書いてある賀状　ひろ子
白梅のひたすら白く白く咲く　みつ子
お日様と約束がある花の種　楓楽
賞罰無しまあるく生きた訳でなし　凡子
春の盃いのち寿ぐ如く干す　希久子
白は白悟れば何と生きやすし　千歩
肝心なことを忘れるお父さん　鬼遊

川柳たけはら　森井菁居報

なんべんもころげてスキーうまくなる　小5典之
夕焼けが凍りついたらいいのにな　中2史子
ポケットベルに救われる日もあるだろう　蘭幸
どうぞどうぞ門は大きく開いてた　比呂子
独り農業呑気に見えて無理があり　清水
保護色のわたし見つけて下さいな　千代美
シクラメン淡い思いを抱いて新春　房子
こぶしだこ座りだこくらべて夫婦　麻代
ジングルベルに老いの財布がくしゃみする　蝸牛
おかげさま七度巡る俺が春　夏喜

病床で一人しょんぼり句を作る　ヤスエ
木枯らしや鍋の温みと夫を待つ　汎美
笑えば罪は消えますか　浪子
柿の木をゆすると亡母の声がする　栄恵
いじらしさ幼いなりに気をつかい　愛子
余命いくばく実のなる苗木植えておく　静佳
鳥葬にする天辺の熟し柿　勲
み仏のきずな嬉しく稚児の列　喜久恵
我が恩師少女になりて旅立ちぬ　厚子
真贋は言わぬ私の好きな軸　一路
手術日へ母は準備を怠らぬ　菁居
捨てるもの捨てて落着く十二月　一枝
約束を破らなかった福寿草　喜美子
血圧がゆれる終りのないいくさ　貞子
運を天に任せたはずの胃の痛み　淑子
イヴの夜のとっても温い窓の灯よ　笑子
念じても咲かない花もあるのなり　静風
筆を持つ今日の証のためならん　臣子
子育てとどこかが違う孫の守り　笹舟
不景気がまともか飲み屋おとなしい　千年枝

川柳高知　川竹松風報

貧乏くじ引いた夫婦の正義感　京子
ある朝に夫婦茶わんが割れていた　幸泉
片方が欠けて回らぬ夫婦独楽　朱坊
パックした顔が無駄だと言っている　菊野
軸足の一つで守る勝名乗り　竹萌
指切りを守る小指がいじらしい　千鳥
こんな世にトンボを守る人がある　佳風

七〇で若さを保つつや話　功
長話鍋を忘れていた不覚　快風
無駄話ストレス捨てている女　幸
仲直り過去の話はもうしない　圭風
国宝の塔を訪ねた秋一日　さち
お守りの収集癖となる受験　春枝
米を研ぐ事を忘れた独り者　千恵子
曲り角福が来るとは限らない　憲一
形見分け故人と縁が少し切れ　松風

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

ラブコールすてきなそぶり青春譜　かつ子
あのそぶり喜怒哀楽を舐めた顔　聖子
出て見たが今朝のそぶりが気にかかり　好栄
裏方が見かねてついに顔を出し　ちよえ
ひとり言胸の痛みを吐いておく　英子
ダンボール野菜果物お棺まで　歳栄
ダンボール札束つめた夢だった　はるみ
単純派すぐにそぶりに出て困り　鈴江
思いきり崖から飛んだを思い出し　洞然
裏方はいやだ嫌だと影法師　博利
バーゲンにうっかり乗った使い捨て　清泉
裏方を信じきってる綱わたり　白汀

川柳ねやがわ　高田　博泉報

心配の種母に預けて呆けさせぬ　シマ子
乾杯のコップに沈めとく野心　あやめ
辞世読み先祖を偲ぶ墓詣り　一笑
ゴール寸前イエローカード渡される　時弘
あの妻が近頃とみに自己主張　勇太朗
いい考えをくれそうじっと雲を見る　一風
賑やかなとんちが笑いの種をまく　とし子
種袋振れば未来の声がする　高栄
野心家の部屋の灯はついたまま　欣史子
喜頓を偲べば髭がお洒落する　たもつ
ゴールイン二人を何が待とうとも　光子
よその子が炬燵で足を蹴り返す　菜月
風化して美化される人消える人　洋
男なら野心を持てとあおり立て　頂留子
微笑みの中に野心を秘めている　冬葉
母さんは我が家のゴールキーパーだ　かすみ
死亡記事ああまた俺より齢は下　黎之助
師走の中気付いてほしいびわの花　恵子
大黒の俵の中はタイの米　英明
美しいゴールでしたと通夜の席　波留吉
突然終った人生のあっけなさ　文秋
そっけない顔してとほうもない野心　一芳
友偲ぶ古里近くちかくなる　ルイ子
花の種もわたしもそっと咲くつもり　礫
ここまでは無事にクリアーした野心　庸佑
潮騒に古里偲ぶ独り旅　一途
次々と故障のぞみは未だ捨てず　柳宏子
野心家もぽっくり死ぬと惜しまれる　紫香
息子等にぶざまなゴール見せられぬ　度
称賛はいらないゴールまで走る　英壬子

打吹川柳会　奥谷　弘朗報

もう一つ坂でころんで翔ぶつもり　一保
思い出はドレスに残る酒のしみ　佳女
夫に手を引かれて登る老いの坂　みほの
人情へロシアの態度水をさす　雄々
人情の夫婦双六あつくなり　小生
人情にもろくて利用されどおし　信子
土の香を送り人情温める　野草
機械化は人の情けを薄くする　原兆
人情と道祖神とが残る故郷　松盛
半身ずつ濡れて情けの傘借りる　柳風
懐が寒いと人情まで寒い　喬水
人情は通天閣の下にある　仙岳
人情がふわふわ飛んでつかまらぬ　孝恵
横道がおいでおいでをして困る　よしえ
ホッペタにやさしく触れる横の道　みおき
人情に包まれながら生きている　節子
三つ目の横道からが我が傘下　幸子
あんちゃんの洋服を着てデートする　螢
傘斜め横道それる人に会う　ひさ子
うっかりと堕ちた横道の蟻地獄　とみお
何だ坂こんな坂もう日が沈む　玲子
人情がからむと票がややこしい　喜与志
ドブロクの上澄みをのむ祖父の杖　勝見
人情のみちた田舎がお気に召し　弘朗

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

宝船波にはばまれまだ着かぬ　美津留
この次の波であなたと沖に出る　透太
餅つき機まわし一服してるパパ　和子
まごころの餅が波乱の救急車　信博

餅つきも女一人で出来る今　雅恵
搗き立ての餅冷凍にする文化　柳伸
凶作の国にお餅があり余る　隆
絵に画いた餅がふくれていく期待　欣之
寒餅もついてほころぶ庭の梅　かつみ
餅焼いて賀状の来ない友思う　作二郎
街角の甘いささやき罠が待つ　龍
甘えん坊の娘が一人で翔んだ春　春子
サバンナに生れるいのち甘えなし　隆
リハビリの甘え許さぬ試歩の杖　ますみ
広い肩甘える場所があけてある　美幸
甘えてはおれぬ八十路の春化粧　弘直
クリントンと歩くマフラー演技かも　勝美
凜として甘え許さぬ鈴を抱く　年人
淋しさをかくす演技を見やぶられ　朝子
演技でもせねば喧嘩が治まらぬ　シマ子
腰もしゃん名妓に歳のない演技　頂留子
演技とは違う涙がとまらない　一風
口喧嘩してもライバル塩贈る　東雲
ライバルも同じラッシュに揺れている　三男
ライバルの絵馬がここにもかけてある　とみを
ライバルと坂の途中で手をつなぎ　夕花
ライバルの見舞の花が大きすぎ　度

川柳藤井寺　高田美代子報

今日は今日明日は明日の風まかせ　敬一
もう帰ろ明日も仕事せんならん　六点
明日なら縞の財布で払ろてやる　しげお
這えば立てはらはらさせる五歩六歩　三夫
はらはらと過去に似ているドラマ見る　治子
割れそうな位置に玉子が置いてある　和子
晩秋無題はらはら秒針が動く　美代子
みおつくしの鐘にあしたの捻子を巻く　寿美子
ふり袖の二十希望の鐘をつく　政代
梵鐘を諸業不況と聞く師走　史郎
除夜の鐘忘れたい事多すぎる　美房
お寺の鐘もあの子も召され征ったきり　淑子
鐘三つ鳴らせただけでプロ気取り　志洋
除夜の鐘鳴るたび増える年の数　キミ子
晩鐘の中でミレーが生き返る　悦子
大津絵の鐘打つ鬼は柔和なり　繁男
百七つあとの一つにある無常　和樹
弔いの一点鐘に秋深む　一屯
千人の千の祈りや古都の鐘　トミ子
来る年へ夢を持ち越す除夜の鐘　吸江
汽車動く涙はらはら立ったまま　宗一
どうしても切れずに絡む赤い糸　恒雄
九十のじいさん単車で初詣　利武
吹けば飛ぶような俺にも妻が居る　智久
目的が別にありそう初参り　みのる
大不況均等法が間に合わず　晋
ひと波乱あるな静かな眉動く　昭子
老夫婦添え木のように生きる愛　春蘭
十二月やっぱり笑い合える酒　与呂志

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

いい仕事するが怒らしたら怖い　しげお
生命までかけた仕事の退職金　満秋
発掘の土器を照らしている冬日　きく子
万全の防備の手からもれた水　庸佑
防げない老いにやっぱり竹を踏む　福一
防風林　母の民話を語り継ぐ　つえ子
男が酔うと女が予防線を張る　蕗児
消防のはっぴを着ると若い父　〆女
ライバルを防ぐスタミナ蓄える　慶子
アメリカとこっそり握手したロシア　博史
こっそりと出た旅先で嘘がばれ　登代子
飼犬が鳴くのでこっそり掘ってみる　杜的
こっそりと漫画読んでるお父さん　芳子
こっそりと母の口紅つけてみる　(小)英子
おさい銭集めがうまい戎さん　(玉)英子
冬の花　小春日和を恋しがる　富子
大阪弁　角立つ空気丸くする　悟郎
冬雲に耐える　珈琲茶碗の火の彩と　薫
初日の出　二階の窓から拝む老い　吉太郎
松の内　三日天下のにらみ鯛　一笛
犬の影消えてしまった都市砂漠　圭坊
真っ白な地図に男を賭けてみる　ただし
不況でも景気良かった戎さん　明光
子ばなれをした母さんが絵をならう　寿美子
橋渡る音で乗り越したと思う　紫香
気がつけば三日忘れていた日記　正坊
仕事の手つづけ見学気にしない　白渓子
忍従も限界があり仕事する　真柳

堺川柳会　河内月子報

石庭の石が世間を遠ざける　道胤

重い荷を持つ手に世間の温い風　泰子
丸腰へ厳しい風が吹く世間　かりん
世間など何だと稼ぐ丸い鼻　福一
木の家に住んで世間の風を聴く　美代子
どの重箱もばらに残るせち料理　春蘭
子に残る整形前の母の顔　彰
残すもの何もないから恐くない　小雪
逃げ道を少し残してとっちめる　菜々
残された命あるがまま生きる　一二三
残り火を消せないままの寒椿　途子
二人して半端埋め合いもたれ合い　楓
金のない男に愛をささやかれ　鬼遊
気後れが中途半端に終らせる　二南
水鉄砲中途半端に胸ねらう　岳人
新婚の部屋で金婚おめでとう　東雲
年賀状いろんな犬がおめでとう　頂留子
二人でも座り直しておめでとう　春香
おめでとう来年もまたその次も　彗楠
孫かえり残っていますごみの山　摩耶
親切が半端な差し出口になり　みずき
身に覚えないのに噂する世間　狸村
心残りあってこの橋渡れない　紀美女
おめでとうのうしろ救急車が走る　半銭
笑い袋の笑いを少し残したい　美子
イエスマンいつも半端な受け答え　寿美
お陽さまが昇ってくれておめでとう　天笑
残りものまた母さんが食べてはる　月子
風しもで舞うて半端な生きざまよ　寿恵子
世間から父は甘いと言われてる　妻子

ｅｉの会創立５周年記念川柳大会

―合同句集発刊―

と　き　**5月22日**（日）　午前11時開場

ところ　サニーストンホテル　吹田市広芝町10－3　☎06－386－0001
（地下鉄 御堂筋線「江坂駅」７番出口すぐ）

句　会

事前投句	「卑弥呼」	片岡つとむ 選
宿　題	「重ねる」	小出智子 選
	「　火　」	柏原幻四郎 選
	「はがき」	森中恵美子 選
	「すかたん」	岩井三窓 選
	「　朝　」	橘高薫風 選

◎各題２句　出句締切り　12時30分　席題はありません

事前投句　所定用紙で４月20日までに（欠席投句拝辞）
投句先　〒590-01　堺市桃山台２－15－10　長江時子宛

会　費　2,000円（合同句集・記念品および大会発表誌呈）

懇親宴　6,000円　同ホテルで開催（予約制）

その他　秀句には朝日新聞社から賞状ならびに楯が贈られます。

主催　川柳ｅｉの会
後援　朝日新聞大阪本社

本社 二月句会

二月七日(月)午後五時半
メンズファッションセンター

二、三日前の寒さは嘘のような、のぼせるほどの暖かさに、これでは名句ができないとの声があがり、暖房を切ってもらう有様。

出句締切後、黒川紫香八〇〇号記念大会実行委員長から、期待以上の盛会に終ったことへのお礼と感謝の言葉がのべられた。

「おはなし」は西田柳宏子氏。昨年六月末に足を怪我、四ヵ月にわたる入院体験談。氏の言によれば、せっかちな性分が禍したもので、雨の日に傘をさして、片手で自転車に乗り、道路を斜めに横断して、ころんだための骨折とか。最近の麻酔事情、大きな手術傷にもかかわらず、包帯もギブスもなしだったこと、紙オムツの体験、付添さんの行届いた看病の様子、リハビリの大変さなどの話に驚かされたり、感心させられたりした。

柳歴が古く、各地で活躍中の氏には、見舞の人や手紙がひきもきらず、その励ましが回復への強い支えとなったと聞き、出席の八十八名は深くうなずかされた。

初出席は、八十田清造(大阪府)一本勇太(大阪市)松尾正博(大阪市)の三氏。

月間賞は藤井一二三氏(堺市)に輝く。

(司会—東雲)(受付—智子・冬葉)
(記録—天笑・月子)(清記—楓楽)

席題「戻る」　岩内外吉選

満身創痍　家出の犬が戻ってる　道胤
弁当を忘れて戻る雪の朝　正博
戻り寒　母の持病へ手紙書く　典子
胸の信号　青になったら戻ろうか　寿子
吊橋が揺れる戻るに戻れない　千秀
喝采を浴びて戻れぬ橋渡る　楓楽
放火魔は必ず戻る群れの中　楓楽
子よ戻れ家で騒ぎが起きている　柳伸
原点に戻り賢治を読み直す　豊太
後戻りみな敗北と限らない　朱夏
戻れないとこまで女来てしまい　楓楽
ブーメラン必ず戻る訳でない　笛生
税金の戻り見越して飲みに行く　房子
戻るのが怖いちくちくやられそう　いわる
嫁ぐ娘へ戻って来てもよいと父　欣史子
還付税　元を正せば納めすぎ　(岩)美智子
キンキラキンの旗とふる里へ戻る　憲太郎
一人では戻る勇気の無い夫　美代子
男になって戻る上りのキップ買う　トメ子
もう戻れない花道に酔っている　重人
寺を出て元に戻っている迷い　保州
集金の社長　終電車で戻る　美房
これからはスイッチバックする余生　鬼遊
戻るあてないけどすこし貸してあげ　保州
戻るのが怖くて犬と遊んでる　天笑
妻の手にいずれは戻るブーメラン　紫香
戻るから心配ないと妻強気　たず子
戻らない包丁を待つ法善寺　雅文
ユーターンしてもやっぱり職が無い　英壬子
一回り大きくなった後戻り　諷云児
リレハンメル　メダル土産に戻ります　吐来
振り出しに戻ると怖いものがない　隆
戻るのを待ってたように妻が出る　しげお
軸　三男
船頭の数に白紙の福祉税　外吉

兼題「リモコン」　津守柳伸選

リモコンであした天気にしてあげる　(新)正子
遠くからあやつる妻のテレパシー　清史
リモコンで地球の裏に火をつける　花梢
リモコン元年　月給振り込みから始め　一二三
リモコン亭主ひとり歩きが下手になる　希久子
側近にリモコンされるおえら方　頂留子
人脈というリモコンに踊らされ　保州
リモコンにされてポケベルうとましい　憲太郎
リモコンをされてハイハイ恙なし　ルイ子
リモコンに錆びた頭が追いつかぬ　道胤
リモコンの電源を切る反抗期　外吉
リモコンを操るボスのうす笑い　吸江

リモコンとつくづく思う停年後　ルイ子
あなたからリモコンされてみたくなる　恵子
母さんにリモコンされるハネムーン　狸村
家中がママのリモコンなら素直　柳宏子
リモコンでベートーベンを聴いている　雅文
リモコンで端役にさせる綱渡り　満津子
リモコン操作したりされたりして夫婦　楓楽
リモコンに忠実だった過労死よ　昭子
リモコンで憎い恋しい操縦法　冬葉
私なりに生きてリモコン嫌いです　希久子
決めるのは私リモコンなど知らぬ　房子
リモコン不要　私の夫信じます　洋
リモコンで人の心は計れまい　雅文
天からのリモコンでしょうか間引かれる　昭子
リモコンが増えてとまどう台所　かすみ
リモコンが効かなくなった夫婦仲　月子
リモコンでリモコンの器具組み立てる　射月芳
リモコンが効かぬ競馬の脚ののび　武庫坊
リモコンより便利な妻にすねられる　(岩)美智子
リモコンで鬼一匹を飼い慣らす　諷云児

佳

遠隔操作　梅がそろそろ咲きはじめ　美代子
リモコンで動く恋ならしてみたい　柳影
運転士要らない電車事故をする　笛生
リモコンで夢の真ん中まで迫る　森子
霧が深くてリモコンが届かない　美代子

人

手練手管リモコンよりも凄い妻　千秀

地

リモコンの効かない位置で冬の薔薇　寿美子

天

リモコンの範囲で男泳がせる　諷云児

軸

リモコンで手繰り寄せたい春の恋　柳伸

兼題「浅い」　堀端三男選

スランプでなめられたのか浅い守備　文時
しがらみがあって渡れぬ浅い川　里兆
浅漬はグルメの果ての口直し　高栄
浅いつき合い成田で迷い出す　たもつ

洋

浅はかとあとでわかった只の酒　恵子
傷口の浅いところで迷う恋　楓楽
叱られる気配へ椅子を浅く掛け　たず子
浅はかで転んでばかり冬の坂　一風
恋の傷　浅いあさいと酌いでやり　諷云児
傷は浅いが心の傷が深すぎる　勝美
椅子浅くもう呑まれてる初対面　〆女
春浅し栄転左遷の風を聞く　寿子
浅い想いへ破調の音がしのびよる　靖子
浅い守備とられて闘志燃えてくる　美代子
浅い川で溺れる夢を見てしまう　(岩)美智子
浅知恵の身動きとれぬ泥の舟　武庫坊
女の謎が解けず眠りが浅くなる　いわる
浅漬けで夫婦の朝は満ちている　親踏
ゼネコンの社長は椅子に浅くかけ　花梢
経験は浅いがファイト炎えている　楓楽
堪忍袋の底が浅くて損ばかり　千歩
浅知恵で切りぬけてきたロバの耳　笛生
浅い処に大きな落し穴があり　正坊
肩書が重くて眠り浅くなる　鬼遊
洗い髪なさけは浅い方がいい　柳宏子
気を許す浅瀬に足をすくわれる　勇太
あげ底の知恵で河童の皿乾く　千秀
懐の浅さは見せぬ喉仏　一風
浅漬けがうまくて姑と仲がよい　武庫坊
浅い縁をとても大事に水子塚　たず子
人妻と浅い川瀬を渡りきる　庸佑
浅いから溺れないとは限らない　文子

佳

浅い眠りのままに根雪の溶ける音　千歩
ふりむけば浅瀬ばかりのまわり道　天笑
熟年の恋は浅瀬でけつまずく　太茂津
浅い眠りで母娘の愚痴を聞いている　朱夏
浅からぬ縁　枕がふたつある　三男

人

浅い眠りの中で走ってばかりいる　勇太

地

合掌の指からもれる浅い罪　雅文

天

愛が浅くて冬を越せない竹トンボ　森子

軸

札束に揺れる思想の浅ましさ　三男

兼題「合言葉」　宮口笛生選

合言葉一〇〇〇号めざしがんばろう　正坊
もう五キロ五キロやせたい合言葉　栞
カエルコールこれが私の合言葉　親踏

晴れた日にうれしい母の合言葉　螢
合言葉　靴は飲み屋へ向いている　昭子
合言葉いっぱい溜る花時計　かすみ
合言葉　時々すかたん言う夫　柳宏子
口笛を吹くと二階の窓が開く　白渓子
阿吽の呼吸　合言葉はいらぬ　朱夏
新婚の何やら怪しい合言葉　恭昌
彼女との合言葉なら決めてある　柳影
心斎橋の手すりで若い合言葉　一二三
合鍵は僕と君との合言葉　隆
合言葉　既に他人と言う二人　欣史子
合言葉ないが味方はすぐわかり　希久子
山と川ばかりが並ぶ泉岳寺　清造
小敵を甘く見るなの合言葉　豊太
うっかりと敵に漏らした合言葉　房子
補聴器へ念入れておく合言葉　千秀
手懐ける犬が知ってる合言葉　白渓子
裏切った仲間がつかう合言葉　鬼遊
合言葉　春は選抜から明ける　〆女
必勝を胸に刻んだ合言葉　柳宏子
甲子園　燃える球児の合言葉　道胤
合言葉なんかいらんとギャル笑い　愛論
春を待つこころにおくる合言葉　英壬子
合言葉忘れた猿は木から落ち　楓楽
合言葉なくとも息が合う夫婦　恵子
信じよう春には治る合言葉　美房
アンテナが動いて洩れた合言葉　寿子
合言葉が乾き花時計は無口　森子
やあ　おおで全て通じる合言葉　太茂津

ローン済むまでと夫婦の合言葉　美房
あきまへん大阪弁の合言葉　佳
肝心な時に忘れた合言葉　射月芳
ときどきは充電欲しい合言葉　諷云児
ある日からチグハグになる合言葉　花梢
オイと呼びアイと答えるめし茶碗　花梢
追いつけ追い越せ隣の国の合言葉　人
ファックスで時どき送る合言葉　一風
無理しない嫁と私の合言葉　地
合言葉　五時から男寄ってくる　天
まぐれですと言いつつ鼻が伸びている　軸
気まぐれに無沙汰へペンをとっている　信義
気まぐれと知っているから怒らない　花梢
まぐれでも亀は兎に勝てません　文子
気まぐれを許してあげる冬の蝶　文時
買わぬくじ当るまぐれを待っている　(新)正子
うしろから美人に声をかけられる　楓楽
まぐれあたりだんがなと大阪弁でよし　岳人
ひょうたんから駒がこぼれてからの乱　栞
一回のまぐれで泥沼に落ちる　朱夏
まぐれ当りというまぐれにも当らない　天笑
そのまぐれ夢幻となってよし　笛生

兼題「まぐれ」　高杉鬼遊選

国産のロケットまぐれと言うなかれ　雅文
まぐれだと思う男運女運　正坊
偶然の出会いをダシに飲んでいる　隆
山は気まぐれ友の一人を帰さない　諷云児
まぐれかも知れぬいのちを生きている　朱夏
妻だけがまぐれと口にしなかった　柳宏子
まぐれだと解っているので褒めやすい　欣史子
実力とまぐれ違えてからの闇　楓楽
自転車屋の前でまぐれでないパンク　しげお
まぐれなどあるので困るくじを買う　絹子
キューピッドまぐれに飛ばす矢が怖い　みつ子
気まぐれの証拠　他人に愛想よい　千歩
ホールインワン先月保険かけたとこ　洋
気まぐれの買いものカードがそそのかす　満津子
みな様のおかげまぐれはおごらない　雅文
まぐれ当りで鼻唄がとまらない　しげお
職安の椅子でまぐれを待っている　外吉
気まぐれな義理チョコ男迷わせる　千秀
信じてはくれぬまぐれにしておこう　冬葉
気まぐれな風を待ってる風媒花　千秀

まぐれなどあるはずがない兎跳び　佳
気まぐれに開いた本と心中する　重人
アルツハイマーなのか気まぐれ靴を履き　いわる
まぐれでも当る競馬が恐ろしい　太茂津
大輪の花がまぐれで咲くものか　紫香
まぐれ当りはひとつもないぞかたつむり　人
　地　金太
　森子

あすなろはまぐれまぐれの夢を見る　勇　太
　天
運の良い石だけ地蔵さんとなり　親　踏
　軸
百本の矢の一本を信じたい　鬼　遊

兼題「調　査」　橘高薫風選

調査してからと役所は謝らず　美　房
帳尻をなんとか合わせ待つ調査　諷云児
この調査　夫に内緒でございます　欣史子
何となく調査をされている気配　いわゑ
ここまで来た少年少女性調査　天　弘
月収を調べた上で好きと言う　文　秋
興信所でもわからない片想い　恵　子
私も同じ過去がある調査　昭　子
調査するたびに何かが出る飛鳥　紫　香
大物がからんで調査有耶無耶に　愛　論
事故調査お月さんだけ知ってはる　満津子
調査してお答えしますと拒否をする　信　義
サラ金は調査もせずに貸してくれ　諷云児
聞き合わせ世間は鬼と言うてはる　かすみ
遺伝子の秘密を探る試験管　朱　夏
つちのこの懸賞金を追っている　隆
なんの調査かアメリカでゴルフ　柳　影
初対面　身元調査はやめてくれ　正　博
ボランティアだから勤まる調査員　柳宏子
調査表　独りぐらしと書いてない　稚　代
国勢調査　寡婦と言う字にまた泣ける　恭　昌
矢印へ並んでいるとアンケート　かすみ
野次馬も一役買っている調査　吐　来
調査隊に調査隊が出る雪なだれ　栞　鬼遊
税務署がキラキラ光る眼で調べ　里　兆
調査員　我が家のことは知らぬなり　楓　楽
調査すると水も空気も恐ろしい　靖　子
わたくしを番号で呼ぶ調査表　良　知
税務調査終えて談笑する余裕　正　坊
如月や澤地久枝の調査メモ　美代子
発掘調査あしたは風となる骸　武庫坊
調査完了　素直に溶ける雪である　佳
白鳥泳ぐ水質調査した湖で　文　子
アンケート調査に軽いトンボB　希久子
あの世から調査されてる影ぼうし　(新)正　子
調査中はからずもでた定家集　栞
調査してひとつの夢を失いぬ　(新)正　子
　人
身上調査　父の無学は恥じてない　たず子
　地
国勢調査わが家のレベルなど思う　靖　子
　天

史跡調査　卑弥呼の祈る声を聞く　一二三
　軸
ネクタイにたたずまいあり調査官　薫　風

松村迷観子氏

（本社参与・おっぱこ吟社会長）2月18日、肺炎のため死去、82歳。告別式は翌19日、香川県大川郡白鳥町帰来の自宅で行われた。

川柳サークル卯の花 十周年記念川柳大会

とき　5月22日（日）午前11時開場　午後1時締切

ところ　高槻市現代劇場文化ホール（阪急高槻市駅・JR高槻駅）

会　費　2000円（昼食・記念品・発表誌）

おはなし　野村太茂津氏

兼題と選者（各題2句・投句拝辞）
「道化（ピエロ）」　河瀬芳子選
「Tシャツ」　久保田半蔵門選
「流　れ」　奥山晴生選
「犬」　高杉鬼遊選
「男」　山本翠公選
「左」　墨作二郎選
「罪」　永田帆船選
「道連れ」　黒川紫香選

主催　川柳サークル卯の花
　高槻市教育委員会
後援　高槻市文化団体協議会
　㈳全日本川柳協会
　川柳塔社

柳界展望

★いずも川柳会では平成5年度の受賞者を次のとおり決定、**1月9日**に表彰した

〈いずも大賞〉

嘘のない暮らしふっくら豆が煮え　小白金房子

〈いずも賞〉

疑わず手の鳴る方へ来て迷い　来海谷渓声

〈いずも奨励賞〉

蛇口全開そんな勇気が今欲しい　千田　久栄

〈同友大賞〉

何もかも許して月はまんまるい　今若　章子

〈同友賞〉

一瞬のときめきもありまだ女　永瀬まさえ

〈同友奨励賞〉

今ここで一歩譲れば座が和む　大野　幽里

★弓削川柳社は平成5年度の二賞を次のとおり決定。

〈紋土賞〉

今日も無事ありがとさんの鉦を打つ　清水悠貴女

〈弓削川柳社賞〉

飯茶碗どうころぼうと生きてゆく　中村　輝子

★『反戦反核詩歌句集第12集』が**3月20日**締切で原稿を募集している。川柳は1頁7句で参加負担金は3000円、送稿先は〒583羽曳野市高鷲8—31—11・塩満敏、編集・発行は核戦争に反対する関西文学者の会。

★川柳噴煙吟社の第22回涛明賞A賞に本社同人の大橋政良氏（北海道）が入賞。二兎を追うどっちつかずの影法師

野に下るデスクに折れた矢があった

なお、今年度の涛明賞は未発表雑詠、2句1組（1人1組だけ）、無料で参加できる。募集期間は10月1日から11月30日まで。

★日本現代詩歌文学館振興会が四年計画で進めてきた色紙収集事業をしめくくる川柳人の収集がほぼ終り、244点が寄せられた。

★宮本海人喜寿祝賀・柳歴65年川柳祭誌上大会が次の要項で行われる。課題と選者は、花＝土居哲秋▽鳥＝若草はじめ▽風＝八木千代▽月＝藤川良子（各2句）特別課題（1句）は土匪吟「宮本海人」で寺尾俊平選投句料1000円、締切は**3月31日**、賞は課題の総合1位に賞金1万円とトロフィー、15位まで呈賞、特別課題は特選3句にトロフィー、佳吟5句呈賞、投句先は〒711倉敷市児島下の町10—8—14宮本みどりへ。

★宮津番傘創立70周年記念川柳大会が**5月8日**、天橋立ホテルで開かれる。会費3000円、宿題と選者は次のとおり。朝＝天根夢草▽人間＝河内天笑▽流す＝原田北涯▽泊まる＝志水浩一郎▽神＝梶川雄次郎▽チャンス＝玉野可川人▽行く＝磯野いさむ。なお、事前投句「遊ぶ」は**3月20日**までに宮津市本町・大城戸悠水へ（いずれも各2句）。

★川柳サークル卯の花は**5月22日**、創立10周年記念川柳大会を開く。

★川柳木馬グループ創立15周年記念誌上川柳大会が次の兼題と選者で行われる。音＝古谷恭一・西川富恵▽帽子＝野沢省悟・渡辺和尾▽木＝桑原伸吉・今川乱魚▽珊瑚＝斎藤大雄・橘高薫風▽狼＝墨作二郎・寺尾俊平（各題2句）、投句料1000円、各題特選1句と秀吟3句に呈賞、締切**5月31日**、投句先は高知市福井町3079—2・北村泰章方・川柳木馬大会係へ。

▼訂　正▲

■**2月号**＝P70下段6句目の作者「酒井一壺」→「酒井一壺」▽P72上段9行目「引き算をしながらお世辞まいている」→「…きいている」▽P73上段末尾から2行目「喝采は終着駅に待たせよう」の作者は**木村春枝**さんでした。

▼訃　報▲

■朝山千世子さん（元同人で池田寿美子さんの実母）1月28日死去、92歳。

■時武敬次郎氏（本社同人山本希久子さん実父・京都市）1月14日、脳硬塞のため死去、90歳。

■久家鶴栄さん（久家代仕男参与の母堂）2月15日、老衰のため死去、90歳。

▽川柳塔碑基金△

■森田文・山地マツエさんから拠出いただきました。

3月各地句会案内

	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	1日(火)午後1時から 走る・白(共に共選)	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2−16−3　河内天笑
尼崎 いくしま	4日(金)午後1時から 陽気・起きる・花・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5−25−17　春城年代
川柳塔 まつえ	5日(土)午後1時半から 記念・芽・急ぐ	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
ほたる 川柳 同好会	8日(火)午後1時から 試す・芽・掃く	豊中市立蛍池公民館　阪急蛍池駅西へ150米 〒560 豊中市蛍池中町3−10−28　井上直次
八尾市民 川柳会	10日(木)午後6時から 飾る・すし・雛・他人	八尾市立労働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1−15　宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	13日(日)午後1時から 細い・凡人・本物	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111−2　牛尾緑良
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から カード・傾ける・おぼろ・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9−4　西口いわお
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木)　正午から 家路・損・刺す・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3−8−8　川島諷云児
富柳会	17日(木)午後1時から 償い・針・ほどほど	富田林中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4−1　池　森子
南大阪 川柳会	18日(金)午後6時から 栄養・気高い・責める・転機	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1−5−2　金井文秋
川柳 ねやがわ	20日(日)　正午から おしゃれ・保険・問題・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9−9　高田博泉
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から 豚・向く・滑らか・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5−801　田中正坊
東大阪市 川柳 同好会	23日(水)午後6時から ときどき・忙しい・童話・花	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3−21　片岡湖風
京都 塔の会	24日(木)午後1時から 菜・吹く・等分	京都府南労働セツルメント　近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41−1　松川杜的
はびきの 市民 川柳会	27日(日)午後1時から 事件・探す・キャンセル・会社・自由吟	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8−31−11　塩満　敏
岸和田 川柳会	27日(日)午後1時半から 提灯・月並・手入れ・同居	市立福祉総合センター　南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610−85　芳地狸村

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06−762−4408)へご連絡ください。

編集後記

★2月号の校正をおわり、ボツボツ3月号の編集にかからねばと思っていた時、『番傘』の岩井三窓さんからFAXが入った。集英社のPR誌『青春の読書』の2月号に掲載された田辺聖子さんの〝新春断想〟と題する文章である。「路郎のことが書いてありまっさかい」というご好意である。

★4ページにわたる長文なので、くわしくは紹介できないが、冒頭に「いつ死んでもいいと云うとこまでは来た」という路郎の破調句を掲げ、もう一つ、晩年の「しがみつくほどのこの世でなかりけり」を引用している。

さらに「雲の峯という手もありさらばさらばです」の辞世句を挙げるとともに「部分品がもうおまへんと言われそう」という最後に入院したときの句を示し、門下の逸材といわれた須崎豆秋の「院長があかん云うてる独逸語で」とうまく釣合い照応し、どちらもおかしい、と述べている。

★ほんの書出しの部分だけ紹介したが、六十五になって人生も〝秒読みの時代〟に入ったと言う聖子さんはここから例によってザックバランな文学観・死生観をつづっている。

★この聖子さんも来臨いただいた八〇〇号記念川柳大会は、予想を上回る盛会のうちに閉じることができ、本号にその特集を行った。

★「政治改革」法案が成立した。一次試験は通ったが二次試験に落ちた受験者がコネを使って裏口入学したような何とも後味の悪い幕切れではあった。（正）

○八百号記念大会の余韻がまだ温いまま二月を迎えた。八年続きの暖冬でも、日毎に春の彩が濃くなって行くのはうれしい。

○三月になると、四月からの年度替りに備え、予算消化の道路工事が増える。このところは、不況対策のための、公共事業の前倒しとやらで、年中街のあちこちが掘られ埃っぽいが…。

○また三月は大阪場所があるので、お相撲さんをよく見かけるようになる。うちの近くにはお寺が多く、宿舎や稽古場にする部屋がいくつかあり、お相撲さん達が玉造温泉（有名な山陰の温泉でなく、JR環状線玉造駅近くのお風呂屋さん）へ三三五五やってくる。人間離れしたでっかい体格、ヘアスタイル、季節外れの浴衣ですぐ人目につく。

○さっそう（？）と自転車で来るお相撲さんもいる。まるで大人が子供用のに乗っているようで、壊れないかハラハラし、自転車に同情する。そして早く出世して、ベンツに乗れることを心から祈って見送る。

○こんなことから、三月と言えばすぐ〝埃のガタガタ道路を、自転車のお相撲さんが走っている〟シーンが目に浮かぶ。ちょっと情緒に欠けるかなー。（ふ）

ひとこと

神保拓生さん逝く

七年前　薫風先生のNHK川柳教室で出会い、ウマが合った友。ぜんそくで府立病院に入院の際も度々、見舞いに行って慰めた。また長居公園のバラ、伊勢路、八尾市川柳大会も一緒だった。「ごめん、ごめん」、拓生さんは煙が駄目なので、愛煙家の私が風下で煙草を吸った想い出も。

なぜ、そんなに早く逝ったの。

私によく川柳のアドバイスをしてくれ、この間の宿題も電話であれこれと言ってくれたのに。もう一遍、言ってくれ。まだ、電話がかかってきそうな気がする。まだ若い。俺より七つも年下なのに、きれいな奥さんを残して何も言わずに一人旅。俺も障害を持つ身だがまだ行かないぞ。冥福を祈って。

川柳を共に歩んだ拓生逝く

大福　留吉

川柳塔誌寿古希記念句集　参加用紙

きりとりせん

同人
一般

府県
市

雅号（ふりがな）

◎自選**15句**を楷書でお書きください。

No.

作品募集

5月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句）　西尾栞選
水煙抄（10句）　黒川紫香選
銀河系（3句）　河内天笑選
茴香の花（3句）　八木千代選

課題吟（3句）
「恥」　浜野奇童選
「外す」「ビタミン」　玉井豊太選
「ビタミン」　玉置重人選

初歩教室「眼鏡」（3句）　吉岡美房担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

6月号
課題吟「膝」「梯子」「はしゃぐ」
初歩教室「破る」

本社3月句会

日時　3月7日（月）午後5時半
会場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1―1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点南西角
おはなし　野村太茂津
兼題「愛」　木本朱夏選
「やんわり」　奥田みつ子選
「励ます」　福本英子選
「スマート」　西出楓楽選
「伝統」　西尾栞選
席題　1題　当日発表　各題2句以内
会費　500円
投句　投句料400円（80円切手5枚）同封のこと

本社4月句会　7日（木）
兼題「予定」「悩む」「訳」「ほやほや」「植える」

夜市川柳募集

第10回「靴」　中尾藻介選
ハガキに3句　3月末締切
投句先　〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「迷う」　森中恵美子選
ハガキに3句　3月10日締切
投句先　〒540 大阪市中央区馬場町3―43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　3月27日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「川」　橘高薫風選
ハガキに3句　3月15日締切
投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2―20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料71円）
半年分　三千八百円（送料共）
一年分　七千五百円（同）
平成六年三月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（六二六）六一九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可

〝貴石画〟個展

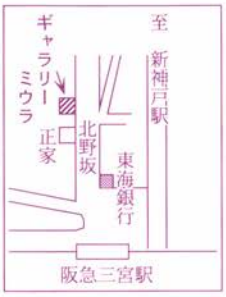
川柳塔　吐田公一

4月19日(火)－4月24日(日)

(A.M11時～P.M8時　最終日はP.M5時まで)

ところ　ギャラリーミウラ

神戸市中央区中山手
1－8－19
☎078－322－0668
JR
阪急三宮駅から
徒歩5分



二十有余年の宝石研磨の集大成として〝貴石画〟の個展を開催する運びとなりました。一度ご来駕の上、ご批判賜りますことを心よりお待ちいたしております。

〒675-01　加古川市平岡町新在家2006－8

吐田一三

(0794)22－3681

第18回　全日本川柳群馬大会

とき　6月12日(日)午前10時開場

ところ　高崎市文化会館

宿題　第一部(事前投句・5月10日締切)

「躍る」佐藤曙光選
「競う」唐沢春樹選
「人生」岩井三窓選

各題2句、無記名、封筒に住所・氏名を明記し、出句料1000円を同封して左記へ

出句先　〒530　大阪市北区天神橋2丁目北1－11
ステップイン南森町町702号
全日本川柳協会大会係

宿題　第二部(当日出句・正午締切)

「旗」米沢苦郎選
「器(うつわ)」田中寿々夢選
「育つ」細川聖夜選
「美」安藤富久男選

会費　3000円(昼食・記念品代共)

観光　6月11日(土)3500円

前夜祭　サンパレス　8500円

宿泊　高崎ターミナルホテルほか

申込先　〒370　高崎市中居町4丁目2－21
宮沢ビル内
全日本川柳群馬大会事務局

雑誌　05703－3